

美浜町内遺跡発掘調査報告書4

興道寺廃寺(第17~19次調査)

高善庵遺跡(第2・3次調査)

興道寺遺跡

藤ノ木遺跡

中長浜遺跡

丹生砦跡

2020

美浜町教育委員会

美浜町内遺跡発掘調査報告書4

興道寺廃寺(第17~19次調査)

高善庵遺跡(第2・3次調査)

興道寺遺跡

藤ノ木遺跡

中長浜遺跡

丹生砦跡

2020

美浜町教育委員会



興道寺廃寺第 17 次調査全景



興道寺廃寺第 18 次調査 1 トレンチ SZ180101-SD1 土層断面

巻頭図版2



高善庵遺跡から興道寺廃寺跡を望む（南から撮影）



興道寺廃寺第19次調査1トレンチSZ190101-SD1埋土出土の
ネコ科と考えられる動物の足跡が付いた須恵器杯（内面）

例　　言

- 本書は、美浜町教育委員会が国庫補助金（文化庁 国宝重要文化財等保存整備費補助金・国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金）の交付を受けて実施した、美浜町内所在の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 興道寺廃寺第17～19次調査、高善庵遺跡第2・3次調査、および町内遺跡の発掘調査等に関する現地調査および整理作業、報告書作成は、平成28年度（2016）から同30年度（2018）、令和元年度（2019）までの4年間ににおいて実施し、その成果を本書に収録した。
- 発掘調査、整理作業、および発掘調査報告書の作成は、美浜町教育委員会の直轄事業として実施した。美浜町教育委員会教育長が調査主体者となり、文化財保護執行課である教育政策課が事務局となっている。以下に、調査に関する体制を列記する。

調査主体者

大同 保（美浜町教育委員会教育長、平成28・29年度）

森本克行（美浜町教育委員会教育長、平成29・30年度、令和元年度）

調査事務局

渡辺直史（美浜町教育委員会事務局 教育政策課 課長、平成28～30年度、令和元年度）

河合政志（美浜町教育委員会事務局 教育政策課 歴史文化館 館長、平成28～30年度）

塩浜洋一（美浜町教育委員会事務局 教育政策課 歴史文化館 館長、令和元年度）

松葉竜司（美浜町教育委員会事務局 教育政策課 歴史文化館 主査（学芸員）

平成28～30年度、令和元年度）

調査作業員

石丸晴夫、伊藤キヨ子、大畑和代、奥村憲昭、北村八千代、小坂美喜、小林幸男、坂田尚子、

谷川陽子、伊達泰子、手倉森由起、中山俊一郎、西野律子、榎木等、原田吉雄、平城美智子、

町野和彦、三田昭治、道下匠、箕山千恵（平成28～30年度、令和元年度）

- 現地調査は松葉が担当した。

- 本書の構成は、興道寺廃寺第17～19次調査報告、高善庵遺跡第2・3次調査報告、および町内遺跡発掘調査等の報告からなる。

- 遺物実測図の縮尺は本文中に示す。図中の遺物断面は須恵器を黒塗り、陶磁器をトーン、土師器・製塩土器・瓦を白抜きとした。

- 本書収録の第1～3・5図は、国土地理院発行の2万分1正式図および数値地図25000（地図画像）を使用した。また、第21・34・40・44図は、美浜町発行の2千5百分1地形図を使用した。

- 興道寺廃寺、高善庵遺跡の過去の発掘調査については調査報告書が刊行されている。煩雑となるため、以下に掲出し、本文では略書名を記す。

『美浜町内遺跡発掘調査報告書I』（平成15年3月発行。本文では『2003年報告』と略す。）

…興道寺廃寺第1次調査を収録

『美浜町内遺跡発掘調査報告書II』（平成18年3月発行。本文では『2007年報告』と略す。）

…興道寺廃寺第2～8次調査、高善庵遺跡第1次調査を収録

『美浜町内遺跡発掘調査報告書III』(平成24年3月発行。本文では『2012年報告』と略す。)

…興道寺廃寺第9～13次調査を収録

『興道寺廃寺発掘調査報告書』(平成28年3月発行。本文では『2016年総括報告』と略す。)

…興道寺廃寺第14～16次調査および興道寺廃寺発掘調査総括編を収録

9. 本書の執筆、編集は松葉が行った。

10. 現地調査・報告書作成で下記の個人・機関にご指導、ご協力を賜った。(敬称略)

文化庁文化財第二課、福井県教育庁生涯学習・文化財課、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、若狭考古学研究会、美浜町文化財保護委員会

荒井秀規(藤沢市教育委員会)、諫早直人(京都府立大学)、今村昌子(美浜町文化財保護委員会)、上野晃(若狭考古学研究会)、海野聰(東京大学)、近江俊秀(文化庁)、梶原義実(名古屋大学)、門井直哉(福井大学)、金田久璋(美浜町文化財保護委員会)、腰地孝大(野々市市教育委員会)、栄原永達男(大阪市立大学)、清水孝之(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、神野恵(奈良文化財研究所)、清野孝之(奈良文化財研究所)、清野陽一(奈良文化財研究所)、高島英之(群馬県埋蔵文化財調査事業団)、竹内亮(花園大学)、田辺信義(元 美浜町文化財保護委員会)、堂野前彰子(明治大学)、中川佳三(福井県教育庁生涯学習・文化財課)、中西絃子(美浜町文化財保護委員会)、中野知幸(羽咋市教育委員会)、中原義史(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、中村友一(明治大学)、永井邦仁(愛知県埋蔵文化財センター)、西島伸彦(小浜市教育委員会文化課)、林正憲(奈良文化財研究所)、馬場基(奈良文化財研究所)、菱田哲郎(京都府立大学)、古川登(株式会社四門)、本多達哉(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、水野和雄、三舟隆之(東京医療保健大学)、三好清超(飛騨市教育委員会)、森井守(美浜町文化財保護委員会)、山口悦子(元 美浜町文化財保護委員会)、山口道介(岡崎市教育委員会)、山崎健(奈良文化財研究所)、渡辺丈彦(慶應義塾大学文学部)(所属は本報告刊行時のものである)

11. 出土遺物・記録類は、美浜町教育委員会 教育政策課 歴史文化館が保管している。

12. 本書掲載の調査資料は、貸し出しの用意がある。また、本書の複製は、文化財の保護、教育普及、公開活用、学術研究が目的の場合に限り、著作権者の承認を得ずに利用することができる。ただし、出典を明記する必要がある。

目 次

巻頭図版

例 言

目 次

第1章 興道寺廃寺(第17~19次調査)	1
第1節 興道寺廃寺周辺の地形と土地利用	1
第2節 遺跡からみた興道寺廃寺周辺の歴史	7
第3節 調査に至る経緯と経過	11
第4節 発掘調査の方法	12
第5節 興道寺廃寺第4期調査(第17~19次調査)の概要	15
第6節 興道寺廃寺第17次調査	18
第7節 興道寺廃寺第18・19次調査	26
第8節 興道寺廃寺第17~19次調査の総括	41
第2章 高善庵遺跡(第2・3次調査)	43
第1節 高善庵遺跡周辺の環境	43
第2節 調査に至る経緯と経過	45
第3節 高善庵遺跡第2・3次調査の概要	47
第4節 高善庵遺跡第2・3次調査	47
第5節 高善庵遺跡発掘調査の総括	59
第3章 町内遺跡試掘調査	61
第1節 興道寺遺跡	61
第2節 藤ノ木遺跡	63
第3節 中長浜遺跡	70
第4節 丹生砦跡	75

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	興道寺廃寺周辺地形分類図	2
第2図	興道寺廃寺周辺地質分類図	3
第3図	興道寺廃寺周辺地形図	4
第4図	興道寺廃寺現況地形測量図	5・6
第5図	興道寺廃寺周辺遺跡分布図	9
第6図	興道寺廃寺発掘調査位置図	13
第7図	興道寺廃寺第17次調査トレンチ配置図	16
第8図	興道寺廃寺第18・19次調査トレンチ配置図	17
第9図	興道寺廃寺第17次調査1トレンチ遺構平面図	19・20
第10図	興道寺廃寺第17次調査1トレンチ遺構土層断面図	21
第11図	興道寺廃寺第17次調査1トレンチ出土遺物実測図	25
第12図	小字孤塚周辺の地籍図	26
第13図	興道寺廃寺第18次調査1トレンチ遺構平面図	29・30
第14図	興道寺廃寺第18次調査1トレンチ遺構土層断面図	31
第15図	興道寺廃寺第18次調査1トレンチ出土遺物実測図	32
第16図	興道寺廃寺第19次調査1・2トレンチ遺構平面図	35
第17図	興道寺廃寺第19次調査1トレンチ遺構土層断面図	36
第18図	興道寺廃寺第19次調査1トレンチ出土遺物実測図	37
第19図	興道寺廃寺第19次調査2トレンチ遺構土層断面図	39
第20図	興道寺廃寺第19次調査2トレンチ出土遺物実測図	40
第21図	高善庵遺跡位置図	44
第22図	高善庵遺跡第2・3次調査トレンチ配置図	46
第23図	高善庵遺跡第2次調査1トレンチ遺構平面図	49
第24図	高善庵遺跡第2次調査1トレンチ遺構土層断面図	50
第25図	高善庵遺跡第2次調査1トレンチ出土遺物実測図	51
第26図	高善庵遺跡第2次調査2・3トレンチ遺構平面図	52
第27図	高善庵遺跡第2次調査2トレンチ遺構土層断面図	53
第28図	高善庵遺跡第2次調査2トレンチ出土遺物実測図	53
第29図	高善庵遺跡第2次調査3トレンチ遺構土層断面図	55
第30図	高善庵遺跡第2次調査3トレンチ出土遺物実測図	55
第31図	高善庵遺跡第3次調査1トレンチ遺構平面図	56
第32図	高善庵遺跡第3次調査1トレンチ遺構土層断面図	57
第33図	高善庵遺跡第3次調査1トレンチ出土遺物実測図	58
第34図	興道寺遺跡調査位置図	62
第35図	興道寺遺跡試掘調査土層断面模式図	63
第36図	藤ノ木遺跡調査位置図	64
第37図	藤ノ木遺跡2017年試掘調査出土遺物実測図	65
第38図	藤ノ木遺跡試掘調査土層断面模式図	68
第39図	藤ノ木遺跡試掘調査出土遺物実測図	69
第40図	中長浜遺跡調査位置図	71
第41図	中長浜遺跡（丹生小学校遺跡A地区）採集遺物実測図	72
第42図	中長浜遺跡試掘調査土層断面模式図	73
第43図	中長浜遺跡試掘調査出土遺物実測図	74
第44図	丹生岱跡試掘調査位置図	75

表 目 次

第1表	興道寺廃寺周辺遺跡一覧	10
第2表	興道寺廃寺第17~19次調査出土遺物観察表	42
第3表	興道寺廃寺第17次調査出土瓦観察表	42
第4表	高善庵遺跡第2・3次調査出土遺物観察表	60
第5表	町内遺跡試掘調査出土遺物観察表	77

写 真 目 次

卷頭図版 1	上 興道寺廃寺第17次調査全景 下 興道寺廃寺第18次調査 1トレンチSZ180101-SD1土層断面
卷頭図版 2	上 高善庵遺跡から興道寺廃寺跡を望む 下 興道寺廃寺第19次調査 1トレンチSZ190101-SD1埋土出土の ネコ科と考えられる動物の足跡が付いた須恵器杯(内面)

本文写真 1	興道寺廃寺空中写真(南から)	4
本文写真 2	興道寺廃寺空中写真(北から)	4
本文写真 3	高善庵遺跡の山間部に見られる平坦面	59
本文写真 4	高善庵遺跡の山間部平坦面に見られる建物礎石	59

写 真 図 版 目 次

写真図版 1	興道寺廃寺第17次調査 1トレンチ全景、北壁土層断面、南壁土層断面
写真図版 2	興道寺廃寺第17次調査 1トレンチ西端北壁土層断面、整地面、 整地面断割土層断面、SD170101、SA170101、P170101土層断面、 P170102土層断面、P170103土層断面
写真図版 3	興道寺廃寺第18次調査 1トレンチ全景、南半・北半、東壁土層断面
写真図版 4	興道寺廃寺第18次調査 1トレンチSZ180101北側、SZ180101-SD1検出状況、 SZ180101-SD1、SZ180101-SD1疊出土状況、SZ180101-SD1土層断面、 SZ180101-SD1断割土層断面
写真図版 5	興道寺廃寺第18次調査 1トレンチSK180101・SK180102、 SK180102土層断面・検出状況、SK180102疊・土壁出土状況、SA180101、 P180101土層断面、P180102土層断面
写真図版 6	興道寺廃寺第19次調査 1トレンチ全景、北壁土層断面、SZ190101-SD1
写真図版 7	興道寺廃寺第19次調査 1トレンチSZ190101-SD1、SZ190101-SD1疊出土状況、 SZ190101-SD1土層断面、SZ190101-SD1断割土層断面、SK190101土層断面、 SK190103土層断面、P190101土層断面、P190102土層断面
写真図版 8	興道寺廃寺第19次調査 2トレンチ全景、北壁土層断面、SH190201、 SH190201-SD2、SH190201焼土
写真図版 9	高善庵遺跡第2次調査 1トレンチ全景、南半・西壁・南壁土層断面、SE020101、 SE020101土層断面
写真図版10	高善庵遺跡第2次調査 2トレンチ全景、西半・東半、北壁土層断面、 PO20204・PO20205土層断面
写真図版11	高善庵遺跡第2次調査 3トレンチ全景、西半・東半、南壁土層断面、 SK020301・PO20305土層断面、PO20301・PO20302土層断面、 高善庵遺跡第3次調査地全景
写真図版12	高善庵遺跡第3次調査 1トレンチ全景、西半・東半、南壁土層断面、SA030101、 PO30101土層断面、PO30102土層断面、PO30103土層断面

- 写真図版13 興道寺遺跡試掘調査 調査前現況、1トレンチ遺構検出状況、東壁土層断面、
2トレンチ遺構検出状況、東壁土層断面、
- 藤ノ木遺跡試掘調査 9トレンチ土層断面、17トレンチ土層断面
- 写真図版14 藤ノ木遺跡試掘調査 21トレンチ遺構検出状況、21トレンチ土層断面、
23トレンチ遺構検出状況、28トレンチ遺構検出状況、
中長浜遺跡試掘調査 1トレンチ土層断面、10トレンチ土層断面、
丹生砦跡試掘調査 2トレンチ、6トレンチ
- 写真図版15 第11図掲載遺物1~21
- 写真図版16 第11図掲載遺物22~30、第15図掲載遺物1~9、
SK180102出土チャノキ近似種の種子、SK180102出土土壁
- 写真図版17 第18図掲載遺物1~7、第20図掲載遺物1・2、第25図掲載遺物1~5、
第28図掲載遺物1~7
- 写真図版18 第30図掲載遺物1~6、第33図掲載遺物1、第37図掲載遺物1~5、
第39図掲載遺物1・3~5
- 写真図版19 第39図掲載遺物2~12・17・18
- 写真図版20 第39図掲載遺物14~16・19~22、第43図掲載遺物1~3、
中長浜遺跡1トレンチ灰褐色砂層出土製塙土器

第1章 興道寺廃寺(第17~19次調査)

第1節 興道寺廃寺周辺の地形と土地利用

興道寺廃寺（福井県遺跡番号 30071）は福井県三方郡美浜町興道寺4号観音1番ほかに所在する古代仏教寺院遺跡である。遺跡のおよその中心は、北緯35度35分52秒、東経135度56分39秒。

興道寺廃寺周辺の地理的環境については、『2016年総括報告』で詳述しているため、本書では概略のみを述べる。

興道寺廃寺が所在する耳川流域は、標高約40mの美浜町野口付近から北に向かって下流域となり、標高約6mのあたりまで扇状地性の沖積地が広がっている。一方で、野口から興道寺にかけての左岸の下流域には興道寺面と呼ばれる低位河岸段丘が北に向けて細長く延び、耳川に対して比高差5~10mの段丘崖を向いている。この段丘は第四紀堆積物にあたる花崗岩、緑色岩などの砂礫層によって構成され、最上部に約29,000年前の広域テフラのAT（始良TN火山灰）が分布する。この低位段丘は美浜町郷市付近でラグーン（潟湖）状の低地面と交差して埋没し、洪水山まで至る。

興道寺廃寺は、この耳川下流域の左岸の低位河岸段丘の上にある。標高約23~25m付近、興道寺小字渕ノ上・観音のあたりに広がっている段丘東縁の微高地に立地している。遺跡の東側は河岸段丘崖に面し、寺城のすぐ東側は後世の大規模な削平によって段丘崖が浸食され、急峻な崖となっているが、寺城の北東側には元々の段丘地形が残っており、東に向かって緩やかに傾斜し、耳川の扇状地性の冲積地に至っている。寺城のすぐ西側は南北に延びる町道1号に面し、さらに西側には水田が広がっている。寺城の北側は畠地が広がり、また南側にも畠地が広がっていたが、昭和50年代前半の圃場整備事業で南側は水田化した。

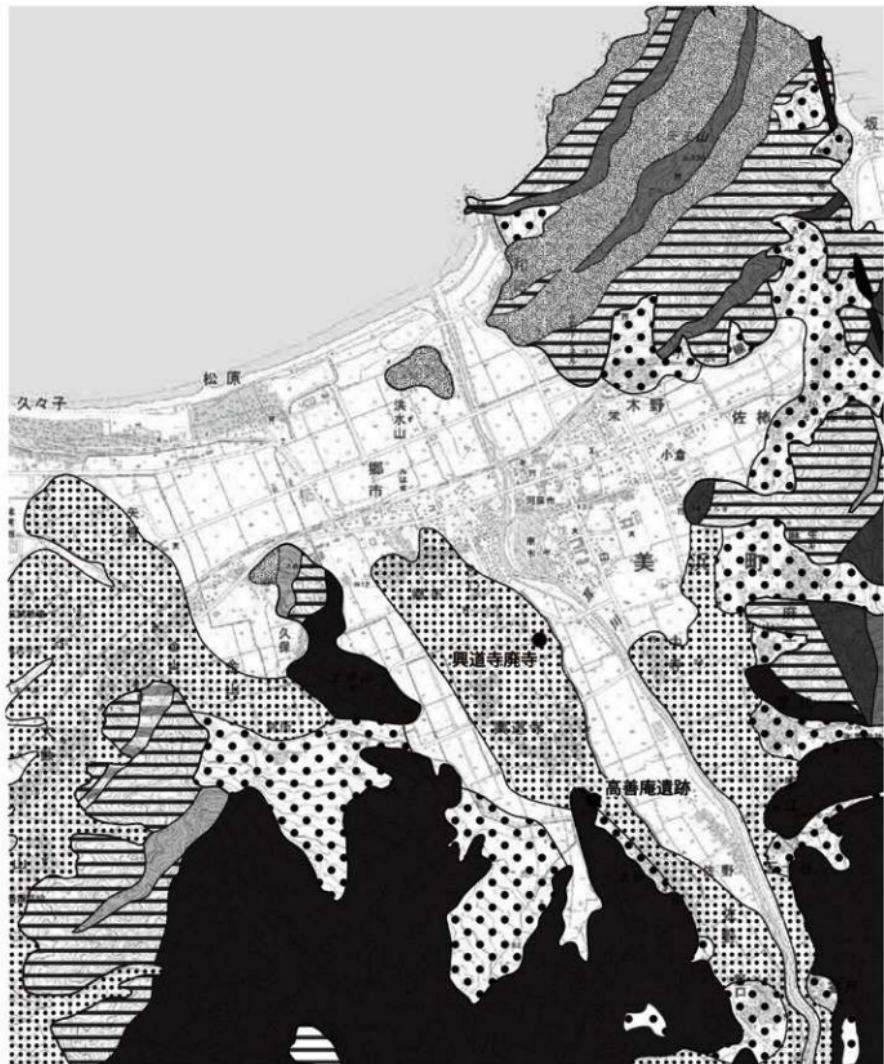
興道寺廃寺の西方にも河岸段丘の広がりがあり、低地面を挟んで興道寺古墳群が立地する段丘西縁の微高地へと緩やかに続き、西側の段丘崖を経て後背湿地へと至る地形となっている。

興道寺廃寺の現況は基本的には畠地である。第3図、大日本帝国陸地測量部が明治26年(1893)測図、同28年(1895)に製版した地形測量図「三方」を確認すると、遺跡の周囲は水田で、一方で遺跡が所在する部分は空白となっているため、明治時代には遺跡の場所が畠地であったことがうかがえる。また、耳川下流域の左岸における主要幹線道の一つが遺跡のすぐ西側を通過していたこともわかる。

第4図は、平成19年(2007)冬に興道寺廃寺が所在する畠地の現況を地形測量した際の測量図に広域農道の北側を補足したものである。興道寺廃寺一帯が微高地であるが、南東隅の標高25m付近が最も標高が高く、北に向かって緩やかに標高が低くなり、21~23m付近で広域農道に至り、さらに北側にも標高22mほどの微高地が続いている。図中、畠地の南西あたりに道路（町道1号）に面して1軒の住宅が建つが、この建物の東側で中門基壇が確認されており、これより北側に伽藍があり、基壇の微起伏を反映した等高線の乱れが確認できる。標高24~25m付近に見られる地形の微起伏は金堂や塔などの主要堂塔の建物基壇を反映している可能性が漠然と指摘され、付近一帯は寺院推定地として認識されていたのが、一連の調査に着手する前の状況であった。



第1図 興道寺廃寺周辺地形分類図（縮尺 1/25,000）〔国土地理院発行 数値地図 25000「鳥取」を元に作図〕



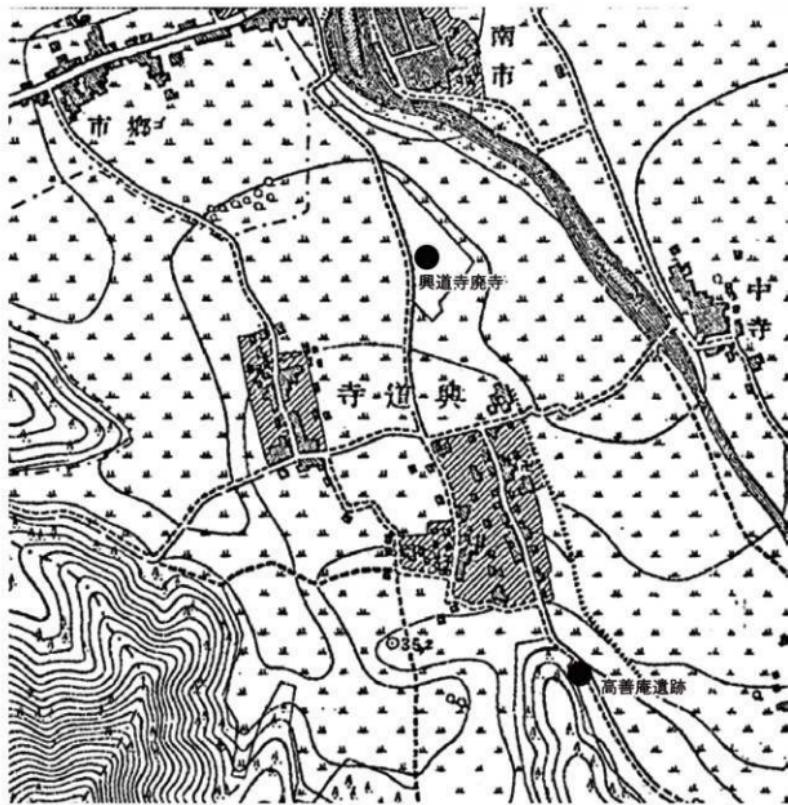
第2図 興道寺庵寺周辺地質分類図（縮尺1/25,000）〔国土地理院発行「数値地図25000「鳥取」」を元に作図〕



写真1 興道寺廃寺空中写真(南から)



写真2 興道寺廃寺空中写真(北から)



第3図 興道寺廃寺周辺地形図 (縮尺 1/10,000) [国土地理院 明治 26 年測図・同 28 年製版 1/20,000 地形図「三方」]



第4図 興道寺庵寺現況地形測量図(縮尺1/800)

第2節 遺跡からみた興道寺廃寺周辺の歴史

遺跡の動向から興道寺廃寺が所在する耳川下流域の歴史的環境を詳述した『2016年総括報告』を要約して概略を述べる(第5図・第1表)。

旧石器時代から古墳時代前期にかけての興道寺廃寺周辺での遺跡の動向は低調で、南伊夜山遺跡(銅鐸出土地)(24)から弥生中期後半の扁平錐式六区袈裟棒文銅鐸が1口、寄戸遺跡(57)から弥生時代と考えられる石劍が1点、不時発見されている〔福井県埋蔵文化財調査センター 2005、廣島 1986など〕。興道寺遺跡(18)では河岸段丘の縁辺部から弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が出土している〔福井県埋蔵文化財調査センター 2003、山口 1984など〕。

古墳時代中期においても興道寺遺跡で土器師甕・椀がわずかに出土するに留まり〔美浜町教育委員会 2003〕、尾根上に5基の墳丘状の盛土が並ぶ木野古墳群(41)、尾根上に前方後円形の墳丘状の盛土をもつ土井山古墳(23)が古墳時代前期・中期に伴う古墳の可能性がある。

興道寺遺跡・藤ノ木遺跡(16)などは古墳時代後期の集落遺跡である。

興道寺遺跡では、興道寺廃寺北方の遺跡北縁部付近を中心に6世紀前半、TK10～TK209型式並行期の掘立柱建物跡5棟、堅穴建物跡3棟が検出されている〔美浜町教育委員会 2016〕。藤ノ木遺跡は獅子塚古墳の南西に立地し、6世紀前葉、MT15～TK10型式並行期の堅穴建物跡1棟が断片的に検出され、須恵器杯蓋・甕、浜彌IIA式に類する製塩土器容器などが出土した〔美浜町教育委員会 2003など〕。

耳川流域での土器製塩の開始は浜彌IIA式の並行期、5世紀後半から6世紀前半と考えられ、土器製塩遺跡自体は未発見であるが、内陸部の興道寺遺跡や藤ノ木遺跡から浜彌IIA式に類する製塩土器が出土している。古墳時代後期の土器製塩遺跡として松原遺跡(11)などがある。松原遺跡は耳川左岸河口部の浜堤に立地し、敷石炉2基、土器溜3か所9基、配石帯1基、土製模造品集中分布域などが検出され、土器溜から須恵器、土器師とともに器壁1cm前後の厚手の浜彌IIB式新段階に類する丸底で深楕円形の製塩土器容器が出土している。7世紀前半、TK209～TK217型式並行期が主体の時期であり、8世紀前半まで続くものと考えられる〔網谷 1995など〕。

興道寺窯跡(27)は耳川流域唯一の古墳時代後期の須恵器窯である。地下式の窯窓1基が検出され、窯床面から7世紀前葉、TK209型式並行期の杯・杯蓋・高杯・短頸壺などが、灰原からMT15型式並行期以後の杯・杯蓋・高杯・甕・甕・提瓶・短頸壺・筒形容器台・装飾付台付壺・角杯・円筒埴輪・土鍤などが出土している。6世紀前半に開窯し、7世紀前葉まで断続的に操業されたことが判明している〔美浜町教育委員会 1978、入江 1986・2009など〕。

古墳・古墳群として、獅子塚古墳(15)、群集墳の興道寺古墳群(19)などがある。

獅子塚古墳は全長32.5m、後円部径約17m、前方部幅約15m、前方部が西面する前方後円墳で、周濠をもち、墳丘に円筒埴輪を備える。全長6.0m、玄室長4.5m、奥壁幅2.5m、不整形な羽子板状の平面形態を呈し、北部九州に系譜をもつ横穴式石室を埋葬施設にもつ。石室内からMT15型式並行期の須恵器杯・杯蓋・高杯・甕・壺・台付子持壺・筒形容器台・角杯・装身具の勾玉・管玉・ガラス製小玉・工具の金鉗・鹿角装刀子・鉄斧・武器の鹿角装鉄劍・鉄鎌・武具の盛矢具・馬具の鉄地金銅張の剣菱形杏葉・楕円形鏡板、これ以外にも三環鈴、二条線引手・兵庫鎖・雲珠・鉢具・農具の曲刀鎌が出土した。6世紀前葉の耳川下流域の在地小首長墳と考えられる〔入江 1986・2009など〕。

獅子塚古墳の北西に長塚古墳(14)など7基の古墳の存在が伝えられており、獅子塚古墳を盟主墳として南方の興道寺古墳群と同一の古墳群を形成していたものと考えられる。長塚古墳は横穴式石室

を埋葬施設にもち、須恵器杯・高杯・堤瓶・甕・蓋・勾玉・滑石製紡錘車などが採集されている。6世紀中葉から7世紀前葉、TK10～TK209型式期の造営である〔入江2009など〕。

興道寺古墳群は10基以上からなる群集墳で、昭和50年代の土地改良事業で周溝を伴う墳丘下部や横穴式石室が複数基発見されており、また近年の発掘調査によって6世紀後葉、TK43型式並行期の、周溝を伴う円墳2基と小石室を埋葬施設にもつ小円墳1基が検出された〔美浜町教育委員会2002など〕。6世紀前葉から7世紀前葉、MT15～TK209型式並行期の古墳造営が考えられる〔入江2009〕。

古墳時代後期の祭祀遺跡として松原遺跡がある。7世紀前葉、TK209型式並行期に土器製塙の場に転用される以前、海上を前面に臨む浜堤上で土製模造品による継続的な祭祀が行われている。土製模造品の分布は、製塙土器が出土した土器溜と一部重複し、その下から鏡、管玉、勾玉、船、釧、容器、短甲など、5世紀後半から6世紀末葉に伴う7器種総数148点の模造品が出土した〔網谷2009など〕。

耳川下流域の左岸には、古墳時代後期、6・7世紀の集落形成、土器製塙や須恵器生産などの生産部門の掌握、海上祭祀の執行、古墳造営など、流域を支配領域とした在地小首長層の動態の痕跡が色濃く残っており、後の白鳳寺院、興道寺廃寺(21)建立の素地は既に養われていたものと理解できる。

興道寺廃寺周辺の律令期の集落遺跡として、興道寺遺跡、上野遺跡(31)などがある。

興道寺遺跡では興道寺廃寺の北方から北西方にかけて8世紀前半を主体とする堅穴建物跡、掘立柱建物跡などが検出され、須恵器・土師器の食膳具・煮炊具、製塙土器、鉄釘や鉄製紡錘車などの鉄器、輪羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物などが出土する〔美浜町教育委員会1998・松葉2009など〕。

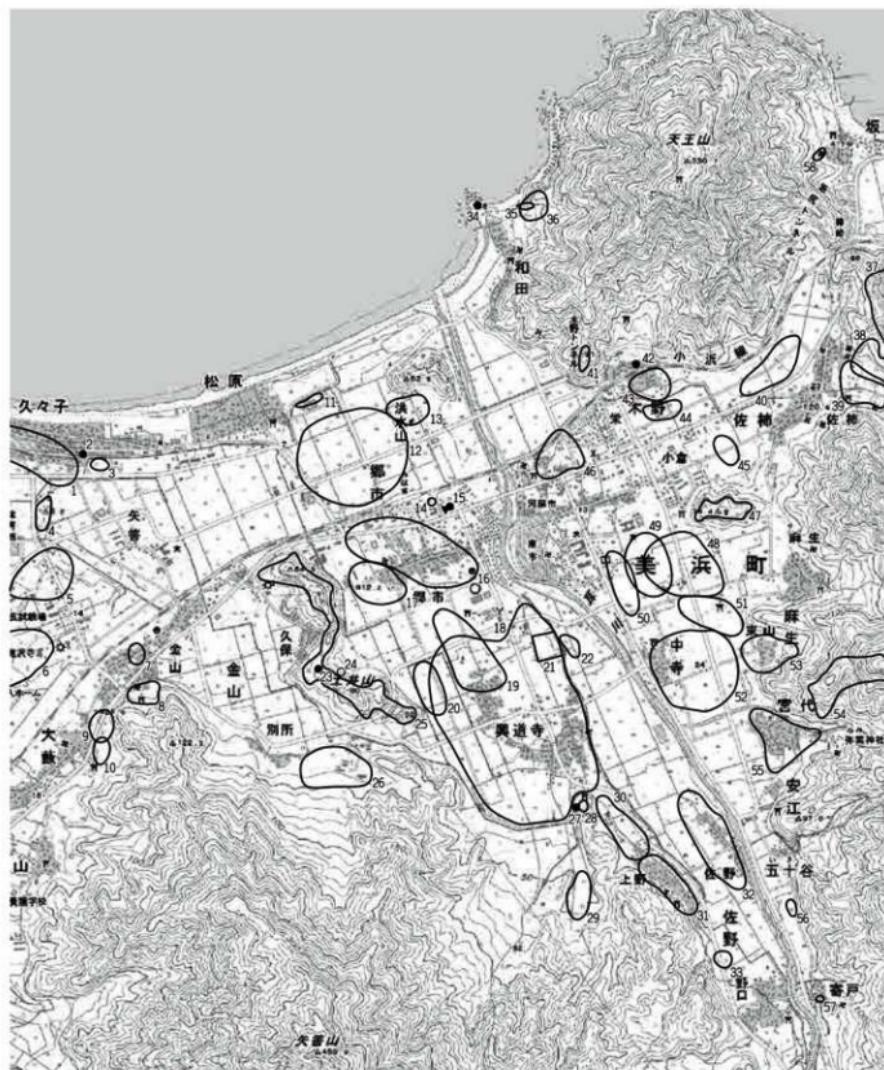
上野遺跡は8～9世紀の須恵器、土師器、製塙土器が採集され、秋名古遺跡(48)は8世紀中葉の須恵器、9～10世紀の須恵器、土師器などが採集されている。

耳川下流域の条里地割は『福井県史』の絵図・地図編などで復元されており〔田中・大森1992、田中1992〕、耳川下流域の右岸によく残り、北20度西の方位を基本として美浜町木野から宮代にかけての沖積地や、東山、麻生、中寺、佐柿などの微高地や自然堤防などに、約55町と比較的よく残っている。また、左岸では郷市から松原にかけての低位河岸段丘の末端から浜堤背後のラグーンにかけて約60町の地割が残っているが、古代のどの段階にラグーンなどの低地帯を水田として整備したものか、明らかではない。

古代の交通関係施設として弥美駅家がある。弥美駅家は『延喜式』、『和名類聚抄』に記載が見られ、『延喜式』兵部式81北陸道条駅伝馬条には、「若狭国駅馬（弥美、濃飯各五疋。）」とある。耳川下流域を占める三方郡弥美郷に所在が考えられており、特に歴史地理学研究の立場から郷市の「馬作」「早子」、河原市の「大道ノ下」「駒ヶ田」など駅、駅路をイメージさせる小字地名が遺存することを根拠にこの付近に駅の所在が想定され、旧丹後街道、あるいは国道27号の付近に駅路が復元されている〔真柄1978〕。

しかし、近年、高橋美久二氏は美浜町佐柿の椿峠から木野の南、そして土井山の北端を通過するルートを駅路に想定しており〔高橋2000〕、美浜町興道寺に見られる「繩手」「南街道」「東街道」「前田」など駅路に關係すると考えられる小字地名に注目して、高橋説よりさらに南方の東西の地方主要道が駅路である可能性を門井直哉氏が指摘した〔門井2011・2014〕。

興道寺廃寺や興道寺古墳群では13世紀の遺構、遺物が断片的に確認されている。この時期の掘立柱建物跡2棟、土坑、小穴、旧河道に沿う柱列が検出され、柱穴から土師器皿4枚が積み重なって出土するなど、建物廃棄に伴う地鎮痕跡も確認されている。掘立柱建物の周辺や古墳の周溝内、興道寺廃寺の寺域内の溝から越前焼の甕や土師器皿・甕・鍋などが出土するなど、興道寺古墳群、興道寺廃寺などの古代遺跡は埋没し、集落形成を促したものと推測される〔美浜町教育委員会2002など〕。



- 1 久々子遺跡
- 2 耳塚遺跡
- 3 野添遺跡
- 4 西堂林遺跡
- 5 口背湖遺跡
- 6 電沢寺遺跡
- 7 姶遺跡
- 8 坊の谷遺跡
- 9 大殿古墳群
- 10 上田遺跡
- 11 松原遺跡
- 12 橋市遺跡
- 13 洪水山前遺跡
- 14 長塚古墳
- 15 箱子塚古墳
- 16 鹿ノ木遺跡
- 17 黒作遺跡
- 18 興道寺古墳群
- 19 興道寺古墳群
- 20 西沢遺跡
- 21 興道寺発寺
- 22 鶴音遺跡
- 23 土井山古墳
- 24 南伊夜山遺跡 (興津出土地)
- 25 土井山岩跡
- 26 金山八幡神社跡
- 27 興道寺跡
- 28 高遠古墳群
- 29 谷ノ口遺跡
- 30 高善庵遺跡
- 31 上野遺跡
- 32 網ノ下遺跡
- 33 西野遺跡
- 34 和田并天台塔跡
- 35 和田台塔跡
- 36 和田古墳群
- 37 国吉城址
- 38 茶屋勝久館跡
- 39 佐拂奉行所跡
- 40 佐拂流田遺跡
- 41 木野古墳群
- 42 木野神社古墳
- 43 木野遺跡
- 44 穴田遺跡
- 45 町田遺跡
- 46 茶屋ノ上遺跡
- 47 麻生宿跡
- 48 秋名古遺跡
- 49 麻生古墳群
- 50 篠橋遺跡
- 51 末国遺跡
- 52 麻生流田遺跡
- 53 七反田遺跡
- 54 宮代古墳跡
- 55 宮代中世墓群
- 56 五十谷遺跡
- 57 寄戸遺跡
- 58 板尻遺跡

第5図 興道寺廃寺周辺遺跡分布図(縮尺1/25,000)(国土地理院発行 数値地図25000「鳥取」を元に作図)

No	遺跡名	種別	時期					遺構・遺物	備考 (指定・現況・文献など)
			古生	新石器	平安	鎌倉	室町		
1	久々子遺跡	製塗						須恵器・土師器・製塗土器	
2	耳屎遺跡	経塚						不明	
3	野部遺跡	散布地						須恵器・土師器	
4	西堂林遺跡	散布地						須恵器・土師器・陶器	
5	口背湖遺跡	集落跡						堅穴住居址・土師器・砾石	一部が町史跡
6	庵沢寺遺跡	集落跡						堅穴住居址・土坑・小穴・土師器	
7	筋遺跡	散布地						陶器	
8	坊の谷遺跡	寺院跡						不明	
9	大藪古墳群	古墳						金風製造物か	
10	上田遺跡	散布地						土師器	
11	松原遺跡	製塗						石敷伊・土器留まり・配石帶 須恵器・土師器・製塗土器・土製模造品	一部消滅
12	鷺市遺跡	散布地						須恵器・土師器	
13	渓木山前遺跡	散布地						須恵器・土師器・陶器	
14	長坂古墳	古墳						円墳(横穴式石室)・須恵器・石製軸輪車	消滅
15	獅子塚古墳	古墳						前方後円墳(横穴式石室)・須恵器・鉄器・玉・埴輪	
16	藤ノ木遺跡	集落						堅穴建物・溝・土坑・須恵器・土師器・製塗土器	
17	馬作遺跡	散布地						不明	
18	興道寺遺跡	集落						堅穴建物・掘立柱建物・土坑・溝 須恵器・土師器・製塗土器・鉄器・瓦	
19	興道寺古墳群	古墳群						円墳(横穴式石室)・須恵器・土師器・製塗土器・鉄器	10数基の内、2基現存
20	西沢遺跡	散布地						須恵器・土師器	
21	興道寺摩度寺	寺院						基壇・堅穴建物・掘立柱建物・溝・土坑 須恵器・土師器・製塗土器・瓦・塑像・鉄器	大部分が国史跡
22	鍼音遺跡	散布地						須恵器・土師器・製塗土器	
23	土井山古墳	古墳						前方後円墳か	
24	南伊夜山遺跡	埋納地						六区製塗津御輪	消滅
25	土井山若跡	城郭						曲輪・堀切	一部消滅
26	金山八幡神社跡	寺院跡						不明	
27	興道寺空塲	空						須恵器窯・灰原・須恵器・埴輪・土鍋	
28	高達古墳群	古墳群						基収・墳形・埋葬施設不明	
29	谷ノ口遺跡	散布地						須恵器・製塗土器・陶器	
30	高善庵遺跡	散布地						須恵器・土師器・瓦	
31	上野遺跡	散布地						須恵器・土師器・製塗土器	
32	殿ノ下遺跡	散布地						須恵器・土師器	
33	西野遺跡	散布地						須恵器・陶器	
34	和田弁天台場跡	台場						石積み	
35	和田台場跡	台場						土壘・台座	
36	和田古墳群	古墳群						横穴式石室	半壌
37	国吉城址	城郭						本丸・曲輪群・伝二ノ丸(土壘・虎口・堀切) 土師器・陶磁器・石仏・墓石	一部が町史跡
38	裏屋勝久居前跡	城館						礎石建物・石垣・虎口・石組水路・陶磁器・土師器・鉄器	一部が町史跡
39	佐柿奉行所跡	城館						礎石・石垣・石組水路・敷石・土壘・瓦・土師器・陶磁器	
40	佐柿波田遺跡	散布地						須恵器・製塗土器・陶器	
41	木野古墳群	古墳群						埴丘状盛土	
42	木野神社古墳群	古墳群						円墳(横穴式石室)	
43	木野遺跡	散布地						須恵器・土師器・製塗土器・陶器・鉄器	
44	穴田遺跡	散布地						須恵器・土師器・陶器	
45	町田遺跡	散布地						土師器	
46	茅原ノ上遺跡	散布地						須恵器・土師器・製塗土器	
47	麻生翁跡	城郭						不明	
48	秋名古遺跡	散布地						弥生土器・須恵器・土師器・製塗土器・陶器	
49	麻生古墳群	古墳群						不明	
50	難橋遺跡	不明						須恵器・土師器・陶器	
51	末国遺跡	散布地						須恵器・土師器・陶器	
52	麻生波田遺跡	散布地						須恵器・土師器・陶器・土鍋	
53	七反田遺跡	散布地						須恵器・土師器・陶器・土鍋	
54	官代翁跡	城郭						横曲輪群・堅屋・土壘・虎口	
55	官代中世墓群	墓地						五輪塔・石仏・宝鏡印塔	
56	官代遺跡	散布地						須恵器・土師器・陶器	
57	五十谷遺跡	出土地						須恵器・土師器	
58	寄戸遺跡	出土地						石劍	
59	坂尻遺跡	散布地						不明	

第1表 興道寺廃寺周辺遺跡一覧

第3節 調査に至る経緯と経過

第1項 興道寺廃寺発掘調査の経緯と経過

興道寺廃寺における発掘調査の主な要因は、平成9年(1997)以後に興道寺廃寺の北方、北西方で開発事業が増加したことによる。特に遺跡北縁部で記録保存のための発掘調査や開発計画に伴う事前の試掘調査が美浜町教育委員会、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによって継続的に行われており、これらの開発事業が興道寺廃寺にまで及ぶ可能性が予見された。このため、平成14年度(2002)、美浜町教育委員会は内容確認のための発掘調査に着手し、平成26年度(2014)の第16次調査まで、13年におよぶ発掘調査を実施した。第17～19次調査地の位置と併せて、第6図にこれまでの調査区を示す。

これらの調査の概要については『2016年総括報告』で詳述したが、第1期調査は平成14～18年度(2002～2006)の5年間における第8次までの調査が該当し、金堂、塔、中門の基壇を部分的に検出し、古代寺院の存在が明らかとなった。平成19～23年度(2007～2011)の5年間における第13次までの調査が第2期調査にあたり、伽藍域がほぼ明らかとなり、伽藍の寺院建物の時期別変遷が一定程度把握された。第3期調査は平成24～26年度(2012～2014)の3年間、第16次までの調査が該当し、寺域がほぼ明らかとなった。

本章で報告する調査は第4期調査に該当し、寺域外、特に寺院北方の様相確認を行うことを目的として、平成28～30年度(2016～2018)の3年間で第19次までの調査を実施した。なお、調査地点は寺域外であり、厳密には興道寺廃寺の発掘調査とは言えないが、一連の調査の経緯を考慮し、興道寺廃寺第17～19次調査と位置付けた。第17・18次調査に関しては、興道寺廃寺等調査指導委員会に調査指導を仰いでおり、柴原永遠男、菱田哲郎、門井直哉、渡辺丈彦(以上、学識者)、宮邊邦明、澤田政一、西島健、一瀬繁紘(以上、地元住民)、中川佳三、中原義史(以上、行政)の各氏にご指導を賜っている。第19次調査については、同委員会が解散しているため(平成30年度(2018)より史跡興道寺廃寺跡保存活用計画策定委員会に移行)、学識者による特段の調査指導は受けていない。

発掘調査では、土地所有者、関係者である高城勲、高城トキ子、高橋文代、畠中徳二の各氏のご理解、ご協力を賜った。

第2項 興道寺廃寺における既往の調査研究

興道寺廃寺に関するこれまでの調査研究史は『2016年総括報告』で詳述しているので、それ以後の調査研究について以下に箇条書きし、簡潔に記す。

- ・三舟隆之「古代地方寺院の造営計画・技術の伝播 一伽藍配置を中心にー」『考古学ジャーナル』705 古代寺院の調査と研究 2017 ニューサイエンス社
- ・三舟隆之、堂野前彰子、中村友一、宮崎雅充、松葉竜司共著『美浜町歴史シンポジウム記録集12 耳別氏、若狭に起つ ～若狭の古代豪族、耳別氏を考える～』 2018 美浜町教育委員会
- ・松葉竜司「第6回企画展解説パンフレット 素描、興道寺廃寺跡 ～山を越え、もたらされた古代仏教～」 2018 美浜町歴史文化館
- ・三舟隆之、渡辺丈彦、門井直哉、梶原義実、海野聰、中野知幸、腰地孝大、松葉竜司共著『美浜町歴史シンポジウム記録集13 復元！興道寺廃寺をとりまく景色 ～古代寺院の景観を考える～』 2019 美浜町教育委員会
- ・松葉竜司「古代若狭における寺院造営の一様相 一興道寺廃寺を中心ー」『古代寺院史の研究』菱田哲郎・吉川真司編 2019 思文閣出版

第3項 興道寺廃寺の国史跡への指定と遺跡の活用

平成 28 年(2016)3 月に『2016 年総括報告』を刊行したことと、興道寺廃寺の国史跡への指定に向けた学術的価値を明らかにする根拠資料が整った。このため、美浜町教育委員会は平成 28 年 4 月より興道寺廃寺の国史跡への指定を目指して土地所有者からの指定同意の取得、意見具申書の作成等的具体的な事務に取り掛かった。指定予定地の土地所有者が多く、また関係者も多岐にわたっていたため、長年、指定同意事務が停滞していたが、平成 28・29 年度(2016・2017)に専門員が配置されたことで、土地所有者等の指定同意の取得が大きく前進し、平成 29 年 7 月 25 日に意見具申書を提出するにあたり、同意取得率が 100% に達した。

平成 29 年 11 月 17 日に国文化審議会は文部科学大臣に「興道寺廃寺跡」を国史跡に指定するよう答申し、平成 30 年(2018)2 月 13 日、文部科学大臣が興道寺廃寺跡を国史跡に指定したことが官報告示された。同 7 月 30 日には美浜町が史跡の保存管理団体に指定されている。

興道寺廃寺が「史跡興道寺廃寺跡」として国史跡に指定され、保存管理団体に指定されたことを受け、美浜町教育委員会は保存活用計画の策定に取り掛かった。平成 30 年 8 月 24 日に学識者、地域住民などからなる興道寺廃寺跡保存活用計画策定委員会を設置し、令和元年度にかけて計 4 回の会議を行い、保存活用計画の審議を進め、令和 2 年(2020)3 月に保存活用計画書として刊行される予定である。

なお、平成 28 年 4 月に美浜町歴史文化館が開館し、町の歴史を網羅的に扱う郷土資料館として運営されている。展示室の導入部分は興道寺廃寺の紹介コーナーとなっており、既往の発掘調査で出土した多くの資料が展示されるなど、遺跡のガイダンス施設としても活用が図られている。

第4節 発掘調査の方法

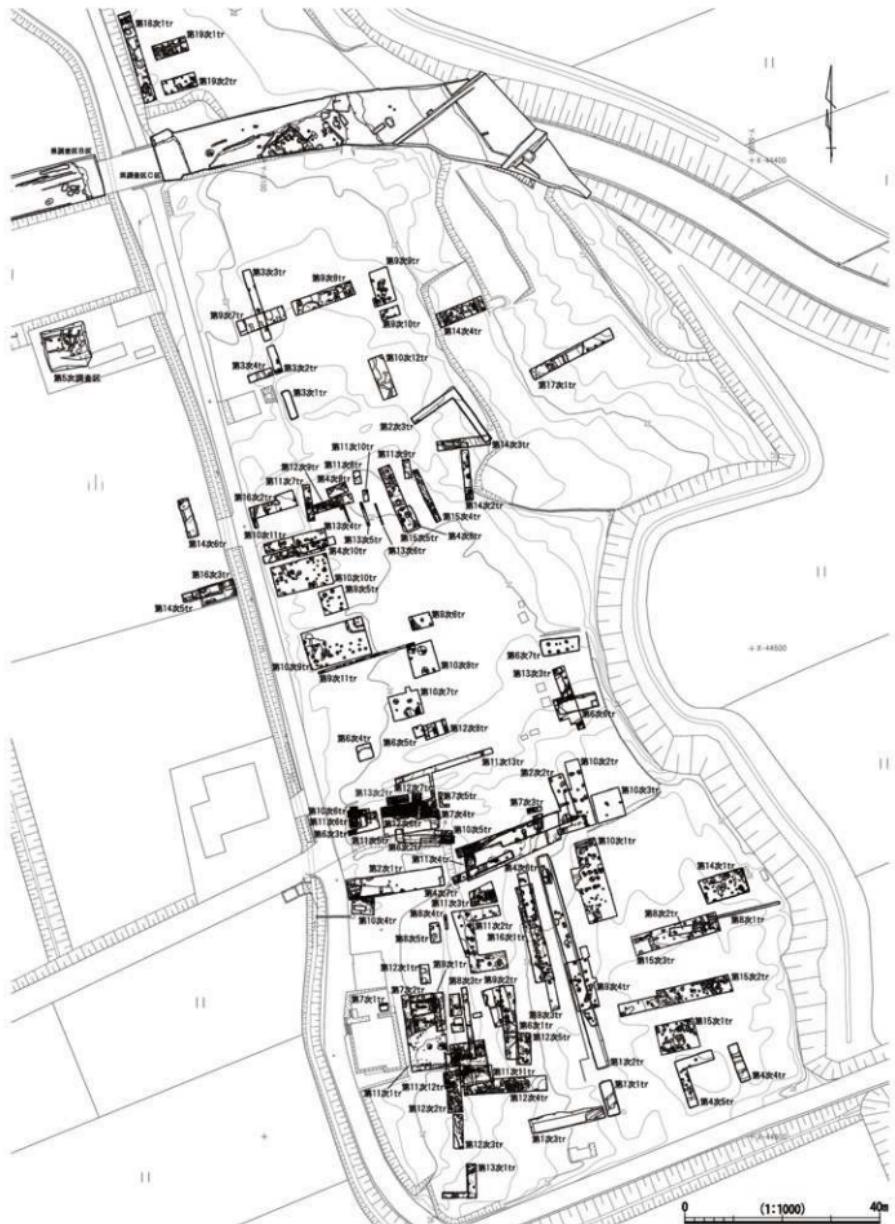
第1項 現地調査の方法、遺構番号の割り付け

興道寺廃寺における一連の調査で、遺構深度が浅い場合は畑地の耕作土にあたる表土を除去した段階で地山面で遺構が検出され、黒褐色系の堆積土をもつ場合でもその直下の地山面で遺構が検出されることが明らかであった。このため、基本的には表土のある程度の深さまでは重機による表土掘削を慎重に行い、堆積層や地山面の直上からは人力による掘削、精査を行った。

調査区の設定は、畑地の地割に影響され、トレンチ調査を基本としたが、ある程度は東西、南北軸を意識したトレンチ設定を行った。遺構の性格、構築および廃絶年代を把握するために必要最小限度の断ち割りを行った場合もある。調査の性質上、将来へ遺構を残すことを考慮し、柱穴・小穴などの小規模遺構の掘削は半裁に留め、土坑、溝などもセクションベルトなどとして未掘部分を設けた。

調査終了時のトレンチの埋め戻しは、後の畑地での耕作に影響が出ないように、地山面、遺構検出面などの掘削で発生した土砂を下位にそのまま戻し、耕土が最上位となるよう配慮した。

遺構平面図、遺物等出土状況平面図、遺構土層断面図、トレンチ土層断面図など調査図面の作成については、調査担当者と作業員が協力して進めた。トレンチ内の遺構検出面に杭を直線状に複数本設定し、それを図根点として造り方測量を基本として、一部は平板測量を併用して原則として 1/20 の縮尺で平面図を作成した。遺物等出土状況図の作成においては 1/10、1/20 の縮尺を併用し、土層断面図は 1/20 の縮尺で図面を作成した。なお、世界測地系に基づく 3 級基準点、4 級基準点が遺跡内外に 10 点ほど設置されているため、調査で作成した平面図の図根点に座標を割り付け、測量平面図に合成



第6図 興道寺廬寺発掘調査位置図（縮尺1/1,000）

している。

写真は、記録用として35mm一眼レフデジタルカメラを使用して撮影した。基本的にはトレンチごとに、遺構の検出段階、遺構の掘削（半裁）段階、調査の最終段階で全体の写真撮影を行い、必要に応じて、個別遺構の詳細写真、遺構の土層断面、遺物等出土状況の写真撮影を行った。

遺構の記号として、古墳…SZ、竪穴建物跡…SH、柱穴列…SA、土坑…SK、溝…SD、柱穴・小穴…Pなど、遺構種別ごとにそれぞれ略号を付した。本書収録の遺構図などは基本的に略号で表示した。

遺構番号は、調査図面には現地調査時に検出順に遺構番号を付しているが、『2012年報告』刊行時に第1次調査から第13次調査までの全ての調査に関して遺構番号が振り直され、調査次数の2桁＋トレンチ番号＋遺構番号という6桁の遺構番号の表示とすることとしたため、本章での報告においてもこれに基づく。

第2項 調査の手続き、遺跡名の呼び分け

文化財保護法に関する手続きについて、それぞれの調査の実施にあたっては文化財保護法第99条の規定に基づき、関係書類を添えて埋蔵文化財発掘調査通知書を福井県教育委員会に提出した上で調査に着手した。調査終了後は、遺失物法第13条の規定により敦賀警察署長に対して埋蔵文化財発見届を速やかに提出するとともに、福井県文化財保護条例第57条の2第1項の規定により福井県教育委員会に対して埋蔵文化財保管証を提出した。福井県教育委員会から敦賀警察署長に対する文化財認定を経た後、隨時、福井県教育委員会から埋蔵文化財の譲与を受けている。

『福井県遺跡地図』では周知の埋蔵文化財包蔵地「興道寺廃寺」として収録され、周知が図られているが、国史跡としての名称は「興道寺廃寺跡」であるため、国史跡の指定地を指す場合は興道寺廃寺跡、遺跡名としては興道寺廃寺と呼び分けている。本書では興道寺廃寺で統一しているため、了知されたい。

第3項 整理作業の方法と発掘調査報告書の作成

例言で示したように、興道寺廃寺における一連の発掘調査については、『2003年報告』、『2007年報告』、『2012年報告』、『2016年総括報告』において報告されている。このため、本書では既刊の発掘調査報告書と重複する記述は極力避け、第17～19次調査の調査内容が反映されるよう発掘調査報告書の作成を進めた。興道寺廃寺の調査、成果、評価に関する内容は現時点での『2016年総括報告』以後、訂正事項はない。

第17～19次調査の整理作業は、福井県三方郡美浜町河原市8-8の美浜町歴史文化館で実施した。第17次調査以後の各次調査終了後、出土遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、探拓の諸作業を隨時進め、令和元年度の発掘調査報告書の作成に備えた。

遺物の観察、実測図・拓影の収録にあたっては、以下のとおりとした。

- ・瓦の報告に際して、「横ナデ」としたものは側縁間の方向にナデ調整を施すもの、「縦ナデ」としたものは狭端と広端の方向にナデ調整を施すものを示し、同様に瓦の凸面叩き調整に関して側縁部に平行、直交して施すものは「直交する」ものとし、側縁部に対して斜めに施すものは「斜交する」ものと記述した。また、瓦の側面、側縁、狭端・広端面の調整については煩雑になるため本文では逐一触れていない。遺物観察表を参照されたい。
- ・瓦の報告にあたっては、『2012年報告』までの収録実測図・拓影は縮尺1/6を基本としたが、本報告では実測図・拓影は1/3の縮尺とした。

- ・土器、その他の遺物のうち破片資料は、口径、器形復元が可能な資料を極力抽出し、図化した。また、細片資料であっても遺構の構築および廃絶年代を示すと思われる資料についても極力図化した。なお、表土出土遺物については原則、図化を行っていない。なお、これらの出土点数には同一個体を構成すると考えられるものを含んでいるが、接合関係にあるものは接合後の状態で、また肉眼観察上、明らかに同一個体と考えられるものはそれらを一括して1点とカウントした。
- ・土器、金属製遺物、動物遺物（骨片）の実測図、拓影は1/3の縮尺とした。
- ・第17次調査1トレンチ出土の鉄片（第11回収録の29）、第18次調査1トレンチ出土の鉄製遺物（第15回収録の6）の実測図は、後述の保存処理業務を実施した株式会社イビソク福井営業所において作成したものを使用した。また、第18次調査1トレンチ出土の植物性遺物についても同社によって示された観察所見、樹種同定結果を本書に収録した。
- ・第18次調査1トレンチ出土の動物遺物（骨片）の観察所見については、独立行政法人奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター主任研究員、山崎健氏にご教示を賜り、本書に収録した。

発掘調査で出土した上記の金属製遺物、植物性遺物は、美浜町事業として専門業者である株式会社イビソク福井営業所に委託の上、隨時、保存処理業務を行っている。

本書を作成するにあたり、遺構・遺物の製図（トレース図）および遺構・遺物などの図版作成はAdobe社 Illustrator ver10を使用し、デジタルデータとして作成した。

なお、以上の整理作業の方法と発掘調査報告書の作成については、次章で述べる高善庵遺跡についても同様であり、次章では再述しない。

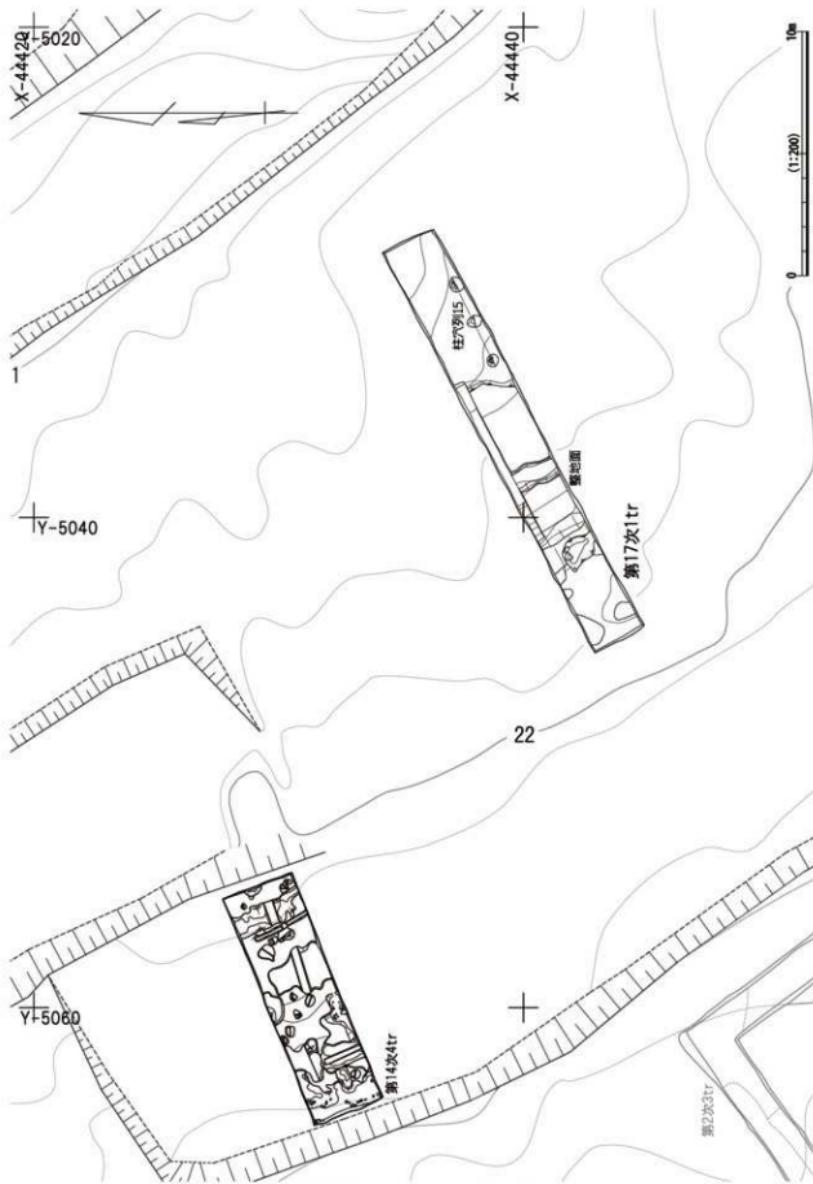
第5節 興道寺廃寺第4期調査（第17～19次調査）の概要

第16次調査を終え、興道寺廃寺の寺域、伽藍城についてはある程度、その様相が明らかになった一方で、寺域外の様相は不明な点も多く、平成28～30年度（2016～2018）までの間、興道寺廃寺の寺域外の様相を確認し、寺院との関係性を明らかにすることを目的として、寺域外の北方における発掘調査を興道寺廃寺の第4期調査として位置づけ、継続的な内容確認調査を計画した。

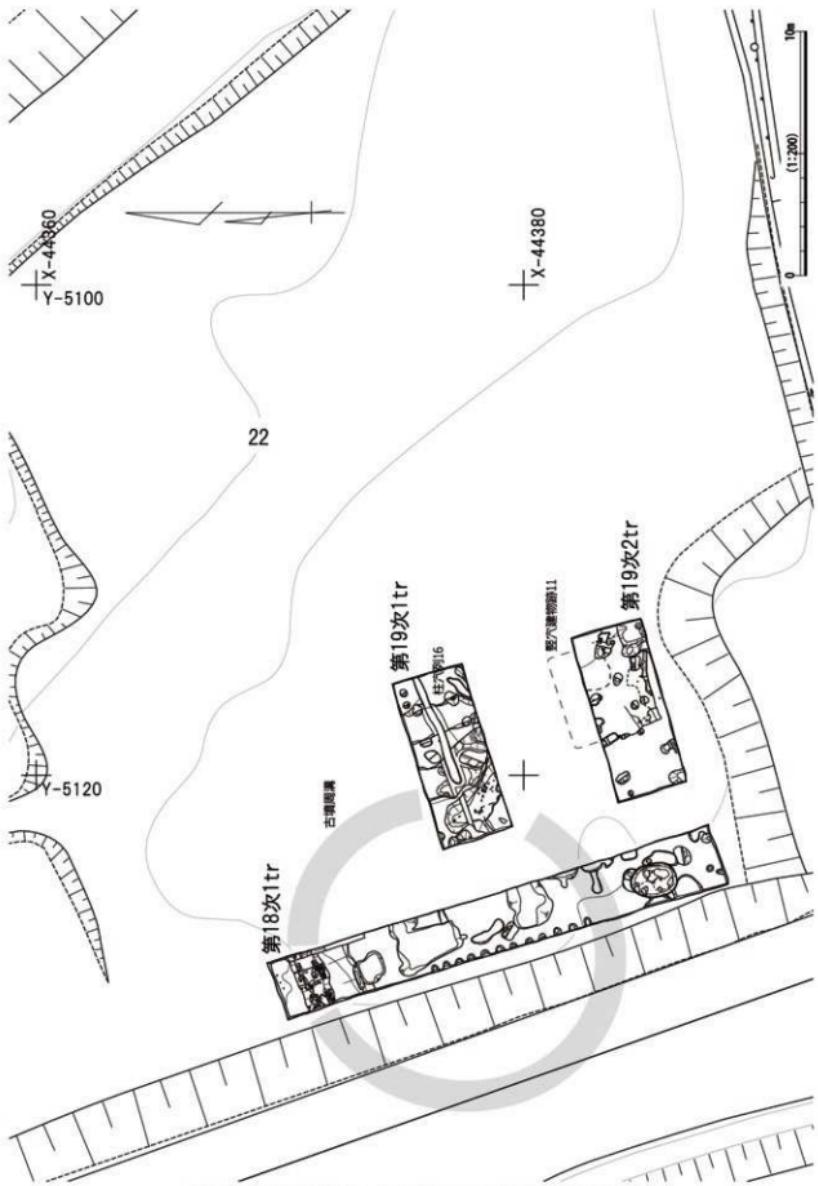
第17次調査では美浜町興道寺4号觀音24番に1か所のトレンチを設定し、平成29年（2017）2月7日から同3月14日まで面積42.2m²の発掘調査を行った。第18次調査は美浜町興道寺3号狐塚31番に1か所のトレンチを設定し、平成30年1月31日から同3月23日まで面積約46.2m²の発掘調査を行った。また、第19次調査は美浜町興道寺3号狐塚31番に2か所のトレンチを設定し、平成30年10月16日から同12月13日まで面積41.7m²（1トレンチ21.0m²、2トレンチ20.7m²）の発掘調査を行った。

第17～19次調査の調査面積は130.1m²である。第1～16次調査の面積が2,201.6m²であり、合算して約2,331.7m²の調査面積となる。第7図に第17次調査地周辺の、第8図に第18・19次調査地周辺の検出遺構平面図を縮尺1/200で示した。

なお、第1次調査から第16次調査の内容、成果と課題については、『2016年総括報告』に詳述している。



第7図 興道寺廃寺第17次調査トレンチ配置図（縮尺1/200）



第8図 興道寺庵寺第18・19次調査トレンチ配置図（縮尺1/200）

第6節 興道寺廃寺第17次調査

第1項 興道寺廃寺第17次調査の目的

これまでの調査が寺域内に偏っていたため、寺域外の様相に関しては不明なことが多い。興道寺廃寺外の北方エリアのうち、寺域北限に隣接するあたりでは7～8世紀の堅穴建物跡なども検出されていましたが、寺院との関係性は明らかではなかった。また、興道寺廃寺が所在する河岸段丘東縁の微高地は段丘崖に沿って大幅な削平を受けている一方で、第17次調査地付近、遺跡の北東側では元々の河岸段丘縁辺の旧地形が現存しており、東に向けて緩やかに傾斜している。この段丘崖の付近では広域農道の敷設に伴う福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が行われており、多くの遺物を包含する厚い堆積層と砂礫土からなる地山層が検出されているが、それ以外に遺跡の様相ははっきりしない。

このため、第17次調査は①旧地形の把握、②遺構・遺物の存否および様相確認を目的として調査を行った。

①について、調査地の付近では畑地の造成によって段々の地形となるなど、一部に地形の改変も認められるが、東側に流れる耳川に向かって緩やかに標高が低くなるなど、段丘崖の元来の地形が比較的よく残っている。当時の旧地形を把握することで、寺院造営主体や経営主体の土地利用のあり方の一端を明らかにすることを目指した。

②については、今回の調査地の西側、標高が一段高い場所で一部、発掘調査が行われており（第14次調査4トレンチ）、古墳時代の遺構・遺物が検出されている一方で、奈良・平安時代の遺構・遺物は希薄であった。さらに標高が低くなる段丘崖付近での遺構・遺物の存否、様相を確認することで、寺院造営主体や経営主体の存否を確認し、また例えば旧耳川の河道に接続するような護岸構造といった物資運搬施設の存否などを確認することで、寺院と附属集落との関係性の一端を明らかにすることを目指した。

第2項 第17次調査1トレンチの調査（第9～11図）

（1）基本層序

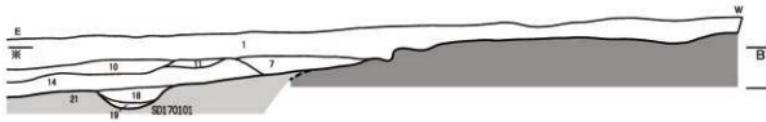
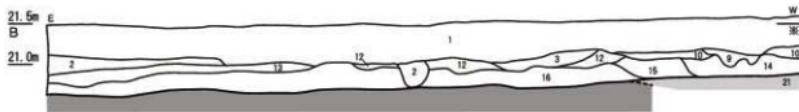
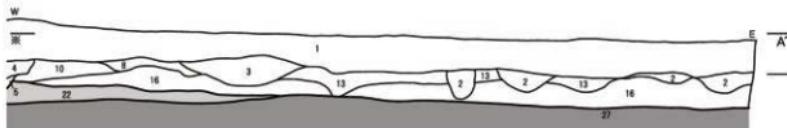
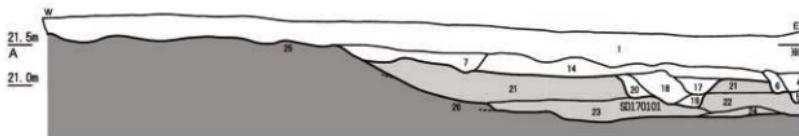
調査地は畑地で、地表面の標高は21.38～21.88mである。興道寺廃寺が所在する段丘の高位面から二段ほど低くなる地形であるが、調査地から東に向かっては緩やかに傾斜する。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2～0.5m）下、トレンチの西端では標高21.7m付近で地山面となる褐色砂礫土層の上面に、トレンチの東端では標高20.55m付近で地山面の暗褐色土の上面に至る。

トレンチの東側2/3には表土下に黒褐色土（層厚0.2mほど）からなる近世の堆積層、黒色土・黒褐色土（層厚0.2～0.3m）からなる中世の堆積層が順に上から分布する。近世堆積層の黒褐色土層から須恵器杯蓋片5点（第11図5・8）・杯類の破片3点・皿（灯明皿）片1点・高杯脚部片2点（同6）・甕片9点（同7）・甕片2点・須恵器の細片2点、土師器甕片17点、製塙土器片5点、土鍤1点（同9）、丸瓦片1点（同10）、中世の土師器皿片1点、近世以後の陶磁器細片2点が出土した。また、中世堆積層の黒色土・黒褐色土層からは弥生土器片2点、須恵器杯蓋片35点（同11～15）・杯片6点（同16）・杯類の破片3点・杯B蓋片2点（同17）・椀片1点（同18）・甕片22点（同19・20）・壺類の破片1点・甕片1点・須恵器の細片6点、土師器甕片132点（同21・22）、製塙土器片66点、平瓦片1点（同23）、中世の土師器皿片12点（同24～28）が出土した。



第9図 興道寺廃寺第17次調査1 トレンチ遺構平面図（縮尺1/60）



- 1 黒褐色土 10YR2/2
 2 黒褐色土 10YR2/2 (径1cmまでの礫含む)
 3 黒褐色土 10YR2/2 (径10cmまでの礫少しある)
 4 黒褐色土 10YR2/2
 5 黒褐色土 10YR2/1 (黒褐色土層じる)
 6 黒褐色土 10YR2/2 (地山土層じる)
 7 黒褐色土 10YR2/2 (英根の埋立)
 8 黒褐色土 10YR2/1 (地山土小ブロック混じる)
 9 黒褐色土 10YR2/3 (径5cmまでの礫含む、あまり縛まりなし)
 10 黒褐色土 10YR2/2 (あまり縛まりなし)
 11 黒褐色土 10YR2/2 (英根の埋立)
 12 黒褐色土 10YR2/2 (径1cmまでの礫含む)
 13 黒褐色土 10YR2/3 (径10cmまでの礫や含む)
 14 黒褐色土 10YR2/1 (地山土小ブロック混じる)
 15 黒褐色土 10YR2/2 (径1cmまでの礫含む)
 16 黒褐色土 10YR2/1 (土層多く含む)
 17 黒褐色土 10YR2/2 (地山土層ブロック混じる)
 18 黒褐色土 10YR2/1 (地山土ブロック層じる)
 19 黒褐色土 10YR2/2 (地山土層ブロック層じる)
 20 黒褐色土 10YR2/2
 21 黒褐色土 10YR2/2 (地山土が部分的に黒じる)
 22 黒褐色土 10YR1.7/2 (地山土黒じる)
 23 黒褐色土 10YR1.7/1 (地山土層ブロック混じる)
 24 黒褐色土 10YR1.7/1 (地山土層ブロック混じる)
 25 黒褐色土 10YR2/4 (径20cmまでの礫含む)
 26 黒褐色土 10YR2/3 (砂質)
 27 黒褐色土 10YR2/3 (径20cmまでの礫多く含む)
- 1・2 耕作土
 2~8 古代の整地層
 9~12 地山土層
 13~16 中世の整地層
 17~20 SD170101埋土
 21~24 古代の整地層
 25~27 地山土



第10図 興道寺廃寺第17次調査1 トレンチ遺構土層断面図 (縮尺1/60)

トレンチの東側 1/3 では中世の堆積層の下で地山層の上面に至るが、トレンチの中央付近ではこの堆積層の下に黒色土からなる古代の整地層（層厚 0.4～0.5m）が認められ、その下で地山層の上面に至る。

地山面は東に向かって大きく傾斜し、1 m 以上の比高差をもつが、これは古墳時代後期の段階に地山面を人為的に削平し、平坦面を造り出していることに起因する。

調査区の排土から須恵器杯類の破片 2 点・高杯脚部片 1 点（第 11 図 1）・甕片 3 点・須恵器の細片 3 点、土師器甕片 1 点、陶磁器細片 3 点が出土した。

（2）検出遺構の概要

地山面で柱穴 3 基（P170101～P170103）で構成する柱穴列（SA170101）1 基、古代の整地層、この整地層の上面から掘り込まれた溝 1 条（SD170101）を検出した。トレンチの西側では耕作などに伴う搅乱 6 基が確認され、地山面や近世の堆積層の上面に掘り込まれている。これらの搅乱土から破片で須恵器杯 2 点（第 11 図 2・3）・杯類 3 点・壺 1 点（同 4）・甕 1 点、土師器甕 2 点、製塙土器 5 点が出土。また、近世堆積層の上面から掘り込まれた搅乱溝からは破片で須恵器杯 1 点・杯類 1 点、土師器甕 3 点、製塙土器 6 点、縁釉陶器皿 1 点が出土した。

（3）整地面

トレンチの中央付近、地山面の上に東西約 6.6m の範囲において盛土を施す整地層を検出した。南北の広がりは不明。整地層は 0.4～0.5m ほどの厚みをもち、東に向かって傾斜する。整地土は地山土や小礫が混じる黒色土・黒褐色土で、ある程度水平に盛土されている。整地土には地山土の細ブロックや微細遺物が混じる。整地層の上面で須恵器杯 B 盖 1 点（第 11 図 30）が破片で出土した。

トレンチの北壁に沿って整地層を断ち割ったところ、この整地層の下部に地山層を人為的に削平し、西からの地山面を急激に傾斜させ、平坦面を造り出して東側に広がる様相を確認した。ただし、この地山層に対する削平痕跡は整地層に先行するものと考えられ、トレンチの東端付近で検出された柱穴列 SA170101 との関連が強いものと考えられる。整地層の上面で出土した須恵器杯 B 盖のおよその年代から、8 世紀後半以後に盛土による整地が施されたものと考えられる。

（4）溝

SD170101 は南北に延びる。古代の整地層の上面から掘り込まれており、平面形態は不定形で、南北検出長 2.15m、東西 0.92m、深さ 0.28m。断面形状は弧状をなし、底面まで浅い。黒色土・黒褐色土を埋土にもち、地山土の細ブロックが混じる。埋土から土師器甕片 2 点、鉄滓と考えられる鉄片（第 11 図 29）が出土した。

（5）柱穴列

柱穴列 1 基（SA170101）を検出した。P170101～P170103 の 3 基の柱穴が東西に並んで柱穴列を構成し、いずれも調査地東端付近の地山面で検出された。東側では P170103 の柱穴の続きが検出されず、西側に問ても整地層の一部を断ち割って確認したが、同様に P170101 の西側に柱穴の延長は認められなかった。ただし、調査地外を含めて南北棟の掘立柱建物跡の一部を構成している可能性はある。

P170101 の柱穴掘り方に柱固めの礫が含まれ、P170103 の底面に根固め石の可能性がある礫が認められる。SA170101 の柱筋の柱間は 1.8m 前後、柱穴の掘り方の径は 0.5m ほどである。底面まで浅く、

断面形状は弧状をなす。底面の標高は 20.5m 前後にあり、それぞれが若干の高低差をもつ。P170102 の埋土から須恵器杯 H の底部または杯 H 蓋の天井部と考えられる破片が出土しているので、8 世紀には降らない時期の遺構と考えられる。

（6）柱穴・小穴

P170101～P170103 の 3 基の柱穴は柱穴列 SA170101 を構成する。

P170101 の平面形態は円形で、南北 0.50m、東西 0.50m、深さ 0.29m。断面形状は半円形。掘り方の部分に拳大の礫が密にみられ、柱の柱固めの石の一部と考えられる。P170102 の平面形態は楕円形で、南北検出長 0.62m、東西 0.48m、深さ 0.20m。断面形状は半円形。埋土から須恵器杯類 1 点、製塙土器 2 点が破片で出土した。P170103 の平面形態は楕円形で、南北検出長 0.54m、東西 0.67m、深さ 0.09m。断面形状は弧状をなす。

（7）出土遺物

第 11 図 1 は調査区排土、2～4 は表土下の搅乱土から出土した。

1 は須恵器高杯の脚部。脚端部の復元口径は 8.5 cm で、脚端部は下方に鈍く折り返す。脚部の内外面に自然釉が付着する。2・3 は須恵器杯 H。2 の復元口径は 13.1 cm。口縁部は内上方に弯曲し、端部を丸く収める。受部は水平に短く作る。底部は浅く、外面にヘラ削りを施す。3 の復元口径は 13.6 cm。口縁部は内上方に短く立ち上がり、口縁端部と受部は鋭く収める。底部外面は回転ヘラ削りの後、ヘラ切りを施す。4 は須恵器壺。体部外面に回転ヘラ削りを施し、肩部にカキメを残す。体部の上半には自然釉が付着する。

同 5～10 は近世の堆積層から出土した。

5 は須恵器杯 H 蓋。復元口径は 12.2 cm。天井部は平らで、口縁部は下外方に強く屈曲し、端部を鋭く収める。天井部外面は摩耗のため成形ははっきりしないが、口縁部外面から内面にかけて横ナデを施す。6 は高杯の脚部。脚端部の復元口径は 9.7 cm。脚部はまっすぐ立ち、脚端部は外方に張り出す。脚部外面にカキメを施す。7 は須恵器壺の口縁部。復元口径は 18.9 cm。口縁部は外反し、口縁端部は肥厚する。口縁部の外面にカキメを施す。8 は須恵器杯 B。口縁部は上方にまっすぐ立ち上がり、高台は外方に張り出す。9 は土錐。長さ 7.8 cm、最大幅 2.7 cm の大型品で、表面にヘラ状工具によるナデのような痕跡が残り、外面の一部に煤が付着する。10 は無段式丸瓦。凸面に縱方向の平行叩きの後、横方向にナデを施し、叩き目をナデ消す。凹面に型枠痕と布縫じ合わせ目が残る。

同 11～28 は中世の堆積層から出土した。

11～15 は須恵器杯 H 蓋。11 は天井部外面に回転ヘラ削りを施す。12 の復元口径は 12.2 cm、器高 3.5 cm。天井部がややくぼみ、鈍い稜をもつ。口縁端部は外方に鋭く収め、内面に沈線をもつ。天井部外面には左回りの回転ヘラ削りを施す。13 の復元口径は 13.3 cm。天井部は丸みを帯び、口縁端部の外面に沈線をもつ。14 は器高が高く、天井部は平ら。稜の痕跡がわずかにあり、口縁端部の内面に沈線がかろうじて残る。天井部外面に左回りの回転ヘラ削りを施す。15 の復元口径は 13.4 cm。器高は高く、わずかに稜が残る。口縁端部の内面に面をもち、天井部外面には回転ヘラ削り調整を施す。16 は須恵器杯 H。復元口径は 12.9 cm。口縁部は上方に高く立ち上がり、口縁端部の内面に沈線をもつ。受部は外方に鋭く作る。17 は須恵器杯 B 蓋。口縁端部は下方に鋭く折り返す。18 は須恵器壺。底部の復元口径は 7.9 cm。高台の内側で接地する。19・20 は須恵器壺の胴部で、ともに外面には平行叩きを施す。19 の内面は同心円文の当て具痕をナデ消すが、20 の内面は当て具痕が残るもの、一部にナデ消し痕が認

められる。21・22は土師器甕。21は口縁部で、復元口径は10.8cm。上方にわずかに外反し、内外面に強いナデを施す。22は胴部の把手。一部に刷毛目が残り、胴部内面の部分に横方向の刷毛目が残る。

23は平瓦。凸面は縦方向に叩き目をナデ消す。凹面は模骨痕がわずかに残り、凸面、凹面ともに側縁部と側面に削りを施す。

24～28は中世の土師器皿。いずれも口縁部の内外面に丁寧な横ナデを施す。24の復元口径は8.5cm。底部外面は未調整で、内面は一定方向にナデを施す。25の復元口径は8.6cm。器壁は薄く、全体的にゆがむ。底部外面は未調整で指頭圧痕が残り、内面は一定方向にナデを施す。26は器壁がやや厚い。27の口縁部は肥厚し、口縁端部は丸く収める。口縁部外面に段をもつ。

29はSD170101 埋土から出土した鉄片。長径6.4cm、短径3.8cm、厚さ1.8cm、重量44.0g。板状をなし、表面には泥土が強く付着し、表面観察は困難であるが、X線透過画像で内部を確認すると複数の気泡状の空隙が認められることから鉄滓と考えられる。

30は整地層の上面から出土した須恵器杯B蓋。口縁端部は鋭く収める。

第3項 第17次調査の成果と課題

(1) 古墳時代後期集落の展開

興道寺廃寺の既往の発掘調査では、後に寺院が建立された微高地の安定面から東側の段丘崖に向かって、地山面が元々の傾斜と同じように緩やかに傾斜する地形があり、古墳時代後期の遺構、遺物が広く展開する様相が確認されていた。今回の調査で、7世紀以前に遡ると考えられる柱穴列1基と地山層を削平して平坦面を造り出した痕跡を検出した。柱穴埋土から須恵器H類が出土し、明確な時期は明らかにできないが、6世紀後半から7世紀前半のいずれかの時期に伴うと考えられる。

興道寺廃寺周辺では、寺域の南側と寺城外の北方の2か所を中心に、6世紀後半から7世紀前半に伴うと考えられる竪穴建物跡3基（棟）、掘立柱建物跡・柱穴列9基（棟）が第16次調査までに検出されている。建物方位や柱並びの方位は南北軸に対して全体的に西に振れるという特徴があり、7世紀後半から8世紀前半の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、柱穴列の方位についても同様に西には振れるが、その振れ幅はあまり大きないので、今回、検出された柱穴列の年代観に矛盾はないと判断される。

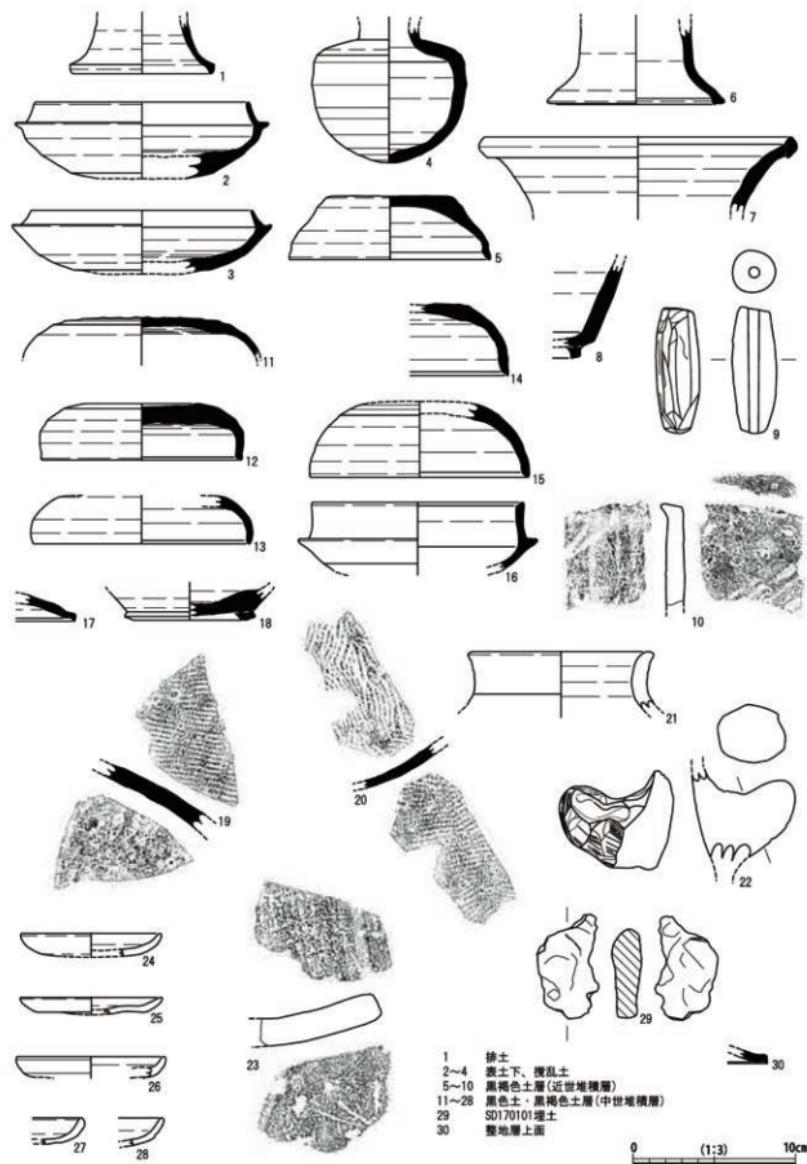
今回、柱穴列が確認されたことで、思いのほか古墳時代後期の集落が段丘面から段丘崖にかけて、標高が低いところまで広がっていたものと考えられる。

(2) 寺城外での整地層の検出

今回の調査で、地山面（段丘面）の上に盛土を伴う整地を施していることを確認した。地山面に対する整地については、寺城外の南方（南門の南側）の第13次調査1トレンチで寺院再建期に伴う黒色系の土砂による盛土整地が確認されており、それ以外にも再建期の寺院建物の基壇周囲で地山土の細ブロックや微細遺物が混じる黒色系の土砂による盛土造成が認められている。

今回の調査で検出された整地層は、広く興道寺廃寺全体を覆う寺院再建期の整地層にあたるものと判断され、同様の盛土整地が8世紀後半以後に顕在化し、寺院南方に留まらず興道寺廃寺周辺に及んでいる可能性が高まった。今回、寺城北側の段丘崖付近で整地が認められたことで、例えば耳川支流の小河川を用いた物資の輸送などに伴う段丘崖に対する何らかの造営行為があった可能性も考えられる。

段丘崖付近において古墳時代後期から古代にかけての遺跡形成があつたことが明らかとなったことで、今後、より具体的な遺跡、遺構の性格付けを視野に置いた発掘調査の継続が求められる。



第11図 興道寺廐寺第17次調査1トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/3）

第7節 興道寺廃寺第18・19次調査

第1項 第18・19次調査の目的

平成29・30年度(2017・2018)に実施した第18・19次調査の目的は、興道寺廃寺の寺域外の北方エリヤのうち、広域農道を挟んだ北側の旧地形と遺構・遺物の様相を明らかにすることであった。

この広域農道の北側は小字「狐塚」であり、墳墓の存在をうかがわせるが、畑地の一部に茶の木が植栽されており、この垣根が円弧状を呈していることから、かつては円墳があり、この墳丘に沿って畑地の地割が制限されており、その境界に茶の木が植栽されていた可能性も考えられた。これは明治初期の地籍図にも表現されており(第12図)、江戸時代以前の境界、植生を反映しているものと考えられた。

また、大正12年(1923)4月に耳村役場が例言を記した『耳村誌稿』には「第三章 大字誌」の興道寺の項に「(前略)。明治四十四年四月、河原市より興道寺に至る里道、水害の為めに破損せしを以て、之を変更して興道寺より郷市に達する村道を設けたり。該工事中小字観音の隣接地小字狐塚の地より刀剣の破片等を発掘せり。是古墳なりしなるべし。(後略)」との記述がある。明治44年(1911)の里道改修時に鉄剣が出土したことが記されており(美浜文化叢書刊行会 2014)、今回の調査地が小字狐塚であるなど、古墳が所在する可能性が高いものと考えられた。

寺域外の北側での既往の調査や、第18・19次調査地の南側を東西に延びる広域農道の敷設に伴う発掘調査においても確認されているように、興道寺廃寺の寺域外の北方エリヤでは古墳時代後期に伴う遺構が広範囲に分布しており、また7世紀後半以後に属すると考えられる竪穴建物跡や、第17次調査では古代の整地層も検出されている。



第12図 小字狐塚周辺の地籍図

これらのことから、第18・19次調査では過去に発掘調査が行われていない小字狐塚のうち、かつて古墳の墳丘があったものと考えられる地点において、①旧地形の把握、②遺構・遺物の存否および様相確認を目的として、平成29年度(2017)は南北方向に1か所のトレンチ、平成30年度(2018)は東西方向に2か所のトレンチを設けて、それぞれ調査を行った。

①について、興道寺庵寺が所在するあたりから北に向かって緩やかに標高が低くなり、段丘地形が比較的よく残っている。往時の旧地形を把握することで、寺院造営主体や経営主体の土地利用のあり方の一端を明らかにすることを目指した。

②については、寺院造営集団やその前身集団の集落形成などがさらに北方、つまり興道寺庵寺の発掘調査では最北端にあたる今回の調査地付近まで展開しているかを確認するとともに、前述のとおり古墳の墳丘や周溝を確認することを目指した。

なお、第19次調査においては、第18次調査1トレンチで検出された古墳周溝と考えられる溝の伸張を確認するために、この東側に南北に並列する形で2つのトレンチを設定した。

第2項 第18次調査1トレンチの調査（第13～15図）

（1）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は22.35～22.5mである。調査地付近はやや微高地で、北と東に向かって標高が低くなる。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2～0.4m）下、トレンチの南端では標高22.2m付近で地山面となる褐色砂礫土層の上面に、トレンチの北端では標高21.95m付近で地山面の褐色土層の上面に至る。地山面はトレンチの両端で約0.25mの比高差をもつが、トレンチの北端は古墳周溝の外側にあたるため、地山面が相対的に低くなっている。地山層の上面はほぼ平坦である。

表土から須恵器杯類の破片1点、土師器壺片1点、陶磁器細片1点が出土した。

（2）検出遺構の概要

地山面で周溝（SZ180101-SD1）と墳丘の盛土を伴う古墳1基（SZ180101）、土坑2基（SK180101・SK180102）、柱穴2基（P180101・P180102）、小穴14基（P180103～P180116）を検出した。地山面に掘り込まれた搅乱15基が確認されており、搅乱土から須恵器杯類の破片1点、土師器壺片1点・壺片4点、土師器の細片7点、製塙土器片1点、陶磁器細片11点、鉄片1点、鉄釘1点、プラスティック2点が出土した。

（3）古墳

地山面を掘り込む古墳北側の周溝（SZ180101-SD1）を検出した。周溝の幅は2.9m、深さ0.30m。平面形態はわずかに弧状を呈し、断面形状は船底状をなす。溝底面の標高は約21.8m、溝の外側の立ち上がりで標高約21.95m、内側の立ち上がりで標高約22.1mである。周溝の埋土は黒褐色土であるが、下位に拳大の礫が埋没し、上部には石室構成材であったと思われる大型の自然礫が多く含まれている。

トレンチの東壁に沿って周溝を斬ち割ったところ、周溝幅において最深0.5mほど地山層を大規模に掘削し、その上に黒褐色土、灰黄褐色土、黄褐色土、褐色土などの土砂を細かく水平に埋めながら縮め、周溝の底面を造り出した様相が明らかとなった。この周溝下の盛土整形は墳丘据部の構築と一緒に

体的になされたものと考えられる。周溝内側の立ち上がりの地山面の上で、墳丘裾部の盛土の一部をかろうじて検出した。

周溝から出土した遺物として、底面付近の最下層から須恵器杯類の破片2点・壺類片1点、土師器甕片3点・土師器の細片6点、土壁状製品1点が出土した。また、底面から若干浮いた状態で下層から土師器甕片4点・土師器の細片2点が出土した。また表土下、周溝の上方にあたる堆積土からは石室構成材と考えられる大きな自然礫とともに、破片で弥生土器壺1点（第15図1）・甕2点（同2）・弥生土器4点、須恵器杯H1点（同4）・杯類5点・壺類1点（同5）、土師器甕34点（同3）、陶磁器2点、鉄製遺物1点（同6）が出土している。断ち割りを行った際、墳丘土にあたる部分から弥生土器1点が出土した。

埋葬施設は未確認である。SZ180101-SD1が北側の周溝に当たるとすれば、埋葬施設はトレンチの南側で検出される可能性もあったが、地山面自体が大幅に削平されているものと考えられ、既に石室墓壙を含めて失われているものと考えられる。

（4）土坑

SK180101・SK180102はともに平面形態が円形であるが、SK180101はほぼ正円形で、SK180102は梢円形を呈する。どちらも側面の内側に厚さ5cmほどの土壁を塗り固めるなど防水の処理が施されており、SK180102は底面にも同様の造作が認められることから、水溜めとして機能した土坑と考えられる。SK180102がSK180101を切っており、最初に造られた土坑がやや小さく、ほぼ同じ場所で規模を大きくして造り替えられている。

SK180101の平面形態はほぼ正円形で、南北検出長が0.30m、東西径0.93m、底面までは検出していない。断面形状は箱形、埋土は暗褐色土からなる。遺物は出土していない。

SK180102は南北径1.87m、東西径1.24m、深さ0.78m。断面形状は箱形で、底面は中心に向かつてややくぼむ。埋土は上位は暗褐色土、下位は黒褐色土をもち、底面付近には人頭大ほどの自然石や土坑内側側面に塗られた土壁が多く堆積していた。また、底面付近からは未炭化のチャノキ近似種の種子10数点が出土している。これらをサンプリングし、土壁133点、種子8点ほどを回収した。埋土からは破片で土師器甕3点、磁器丸碗1点（第15図7）、磁器細片2点、天目碗1点、イノシシの骨1点（同8）が出土した。

（5）柱穴列

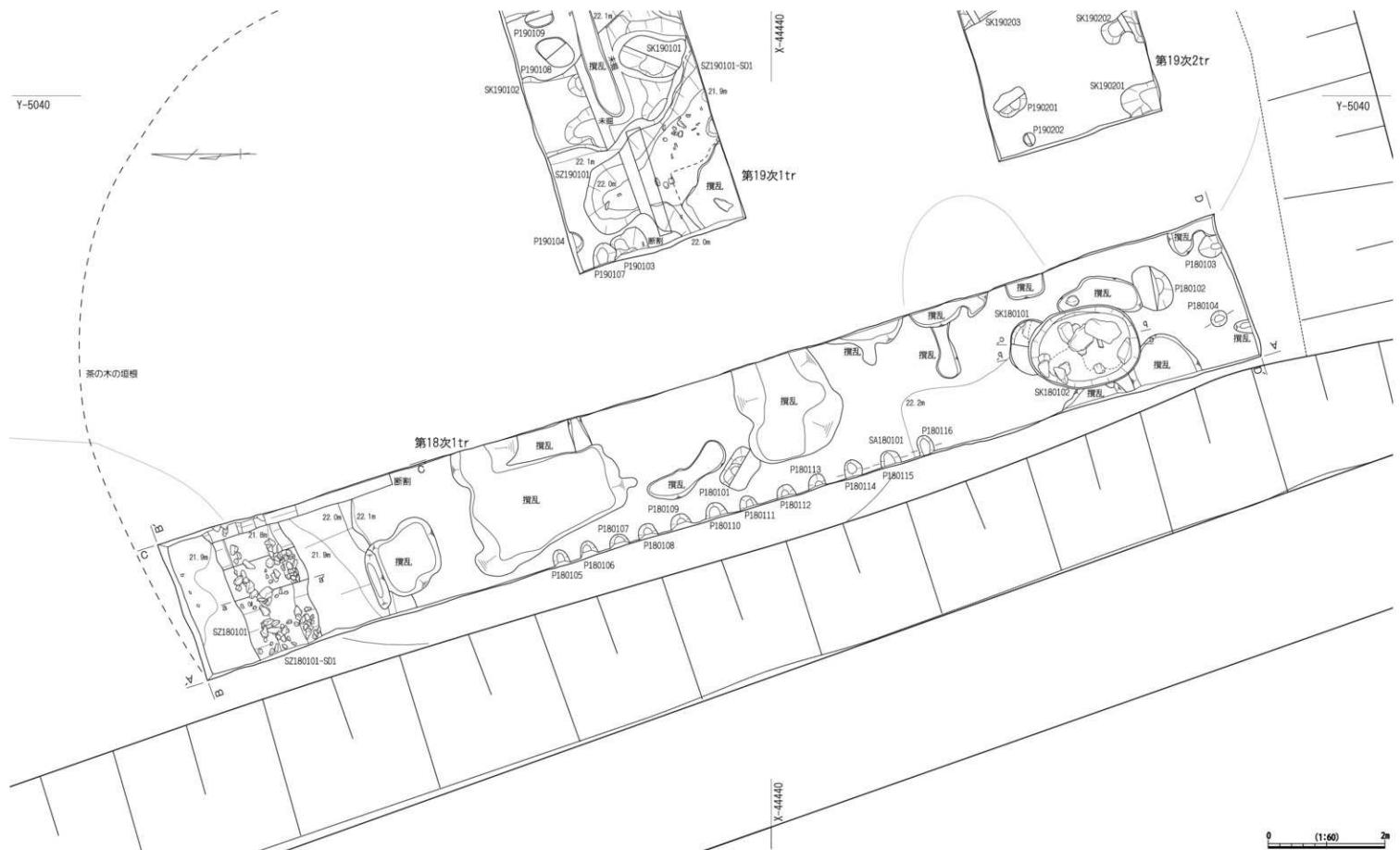
柱穴列1基（SA180101）を検出した。P180105～P180116の12基の小さな柱穴が狭い間隔で南北に並んで柱穴列を構成する。トレンチの西壁に沿って6.5mが検出された。柱穴の間隔は0.5mと細く、小規模な柵、杭が並んでいたものと考えられる。

柱穴の深さは総じて浅く、埋土は上位に暗褐色土、下位に黒褐色土をもち、土坑SK180102と近い埋土をもつ。底面の標高は多少の高低差があるが、ほぼ標高22.0mで揃う。埋土から出土した遺物はない。

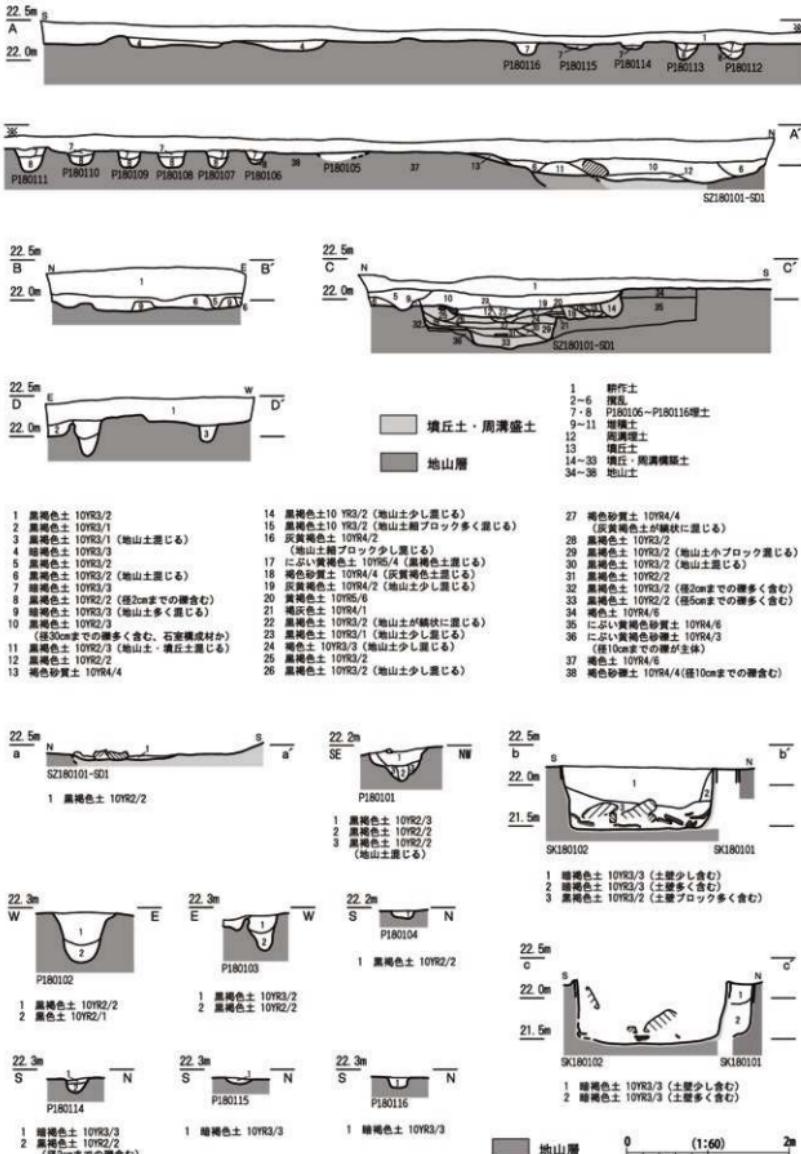
（6）柱穴・小穴

建物を構成するか不明であるが、P180101～P180104の4基の柱穴がある。

P180101の平面形態は梢円形で、北西～南東の検出長0.75m、北東～南西0.50m、深さ0.42m。断面形状は尖底状をなす。埋土の下部に掘り方と柱あたりが残る。弥生土器の細片2点、土師器甕片



第13図 興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ遺構平面図（縮尺1/60）



第14図 聖道寺廬寺第18次調査1トレンチ遺構土層断面図(縮尺1/60)

7点が破片で出土。うち1点は胴部外面に叩き痕をもつ。P180102の平面形態は楕円形で、南北0.58m、東西0.82m、深さ0.63m。断面形状は半円形。弥生土器細片1点、土師器壺片1点が出土。P180103の平面形態は楕円形で、南北検出長0.37m、東西検出長0.38m、深さ0.45m。断面形状は尖底状をなし、一部が深くなる。埋土から土師器甕2点・楕1点（第15図9）、製塙土器1点が破片で出土。P180104の平面形態は円形で、南北検出長0.28m、東西検出長0.25m、深さ0.10m。断面形状は箱形。

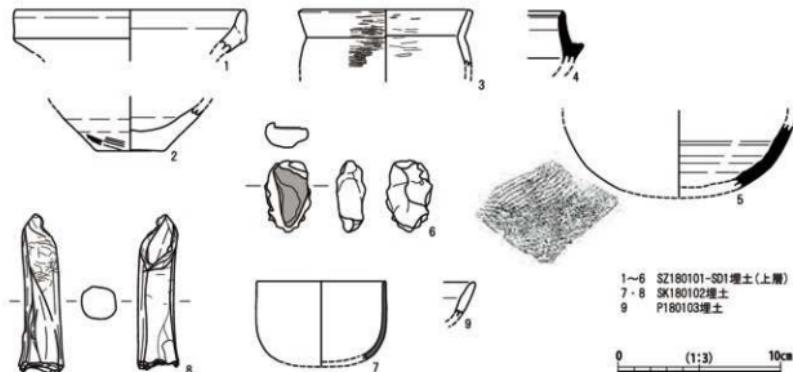
P180105～P180116の12基の小柱穴は柱穴列SA180101を構成する。平面形態は円形または楕円形を呈するが、いずれも柱穴の西側が調査区外にあるため、はっきりしない。

P180105は南北0.27m、深さ0.16m。断面形状は半円形。P180106は南北0.28m、深さ0.21m。断面形状は半円形。P180107は南北0.35m、深さ0.21m。断面形状は船底状をなす。P180108は南北0.32m、深さ0.21m。断面形状は半円形。P180109は南北0.36m、深さ0.20m。断面形状は半円形。P180110は南北0.37m、深さ0.30m。断面形状は尖底状をなす。P180111は南北0.31m、深さ0.24m。断面形状は半円形。P180112は南北0.33m、深さ0.21m。断面形状は半円形。P180113は南北0.30m、深さ0.22m。断面形状は尖底状をなす。P180114は南北0.30m、深さ0.08m。断面形状は浅い箱形。P180115は南北0.35m、深さ0.06m。断面形状は浅い箱形。P180116は南北0.26m、深さ0.16m。断面形状は半円形。

（7）出土遺物

第15図1～6はSZ180101-SD1の埋土上層、7・8はSK180102埋土、9はP180103埋土から出土。

1は弥生土器の壺。口縁部の復元径は14.0cm。口縁部は屈曲し、口縁端部を上方に收める。口縁部の内外面に強い横ナデを施す。2は弥生時期の甕の底部。底部の復元径は2.5cm、平底で、体部外面に刷毛目を施す。3は土師器甕。口縁部の復元口径は10.2cm。口縁部は上方にまっすぐ立ち、口縁端部に面をもつ。口縁部と胴部の外面に赤彩を施し、口縁部から頸部にかけての外面に精緻な細かいミガキを施す。4は須恵器杯H。口縁部は上方に短く立ち上がり、口縁端部は段をなす。受部は鈍く作り、体部は強く丸みを帯びる。5は須恵器壺類。胴部下半の外面は平行叩きの後、横ナデを施し、内面は横ナデを施す。6は鉄製遺物。長径4.4cm、短径2.8cm、厚さ1.7cm、重量19.8g。土の塊に厚さ2mm程度の金属の剥離面が固着する。種別は不明で、何らかの鉄製造物が土中環境にある中で剥離し、



第15図 興道寺廃寺第18次調査1トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/3）

周囲の土と一緒に固化したものと考えられる。

7は磁器丸瓶。口縁部の復元口径は7.9cm。口縁部は上方にまっすぐ立ち上がり、口縁端部は鋭く取れる。8はイノシシの大腿骨(右)の骨幹部。野生イノシシであるか、家畜のブタであるかは判断できない。近位側は螺旋状に割れており、人為的に割って骨髄を利用したものである。遠位側はかじられており、浅い溝状の痕跡も集中することから、犬の咬み跡と考えられる。

9は土師器椀。器壁は厚く、口縁端部は丸く收める。

図化は行っていないが、チャノキ近似種の種子について、樹種同定分析の結果を以下に収録する。

チャノキ近似種 c. f. *Camellia sinensis* (L.) Kuntze 種子 ツバキ科

直径1.4~1.6cm程度の大きさで、中空で脆弱であったため、埋土掘削時に破損したものがある。黄褐色で、背・腹面観は楕円形、側面観は半円形、上面観は扇形。腹面が鈍稜となる。全体的に丸みを帯びている。扇形の上面観から果実に3個程度入っていた種子の1つであると推定される。形態からツバキ科の中でもチャノキに似るが、着点やその周囲の瘤みなどの特徴的な部分は残存していない。また現生チャノキ種子よりもやや扁平である。全体的に丸みを帯び、背面上下方向には放射状のごく低い隆線がみられる。上端に直径約0.5mmの穴が、下端に直径約1.0mmの穴が空く。

第3項 第19次調査1トレンチの調査（第16~18図）

(1) 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は22.35mである。第18次調査1トレンチの東側に位置し、第19次調査地付近から東に向かって標高が低くなる。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.15~0.25m）下、トレンチの西端では標高22.15m付近で、トレンチの東端では標高22.1m付近で地山面の褐色土層の上面に至る。地山面はトレンチの両端で約0.05mの比高差しかない。

表土から須恵器杯片1点・甕片2点、土師器甕片4点・土師器の細片2点、越前焼擂鉢片1点、陶磁器細片5点が出土。また、排土から弥生土器片1点、須恵器杯片4点・杯類の破片4点、土師器甕片7点・土師器の細片3点、陶磁器細片3点が出土した。

(2) 検出構造の概要

地山面で周溝の一部(SZ190101-SD1)を伴う古墳1基(SZ190101)、柱穴列1基(SA190101)、土坑5基(SK190101~SK190105)、柱穴・小穴10基(P190101~P190110)を検出した。搅乱3基が確認されているが、土坑、柱穴・小穴に底面まで極めて深いものもあり、この中には耕作搅乱に伴うものもあるかも知れない。

(3) 古墳

地山面を掘り込む古墳東側の周溝(SZ190101-SD1)を検出したが、第18次調査1トレンチで検出されたように整った平面形状ではなく、崩れて不定形の形状をなす。大幅に耕作搅乱を及んでいるとともに、もっと古い段階にも一定の改変があったようで、周溝の形状が墳丘の裾部にあたるかは疑わしい。周溝の幅は1.95m、深さ0.13m。断面形状は船底状をなす。溝底面の標高は約21.85m、溝の外側の立ち上がりで標高約22.1m、内側の立ち上がりで標高約22.05mである。溝の底面と内側の立ち上がりの標高は第18次調査1トレンチで検出した周溝と近似値である。周溝の埋土は黒褐色土、暗褐赤土である。

周溝の一部を断ち割ったところ、北側と同様に周溝の底面を最深 0.3mほど地山層を掘削し、その上に黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土などの土砂をやや厚くブロック状に埋めながら、周溝の底面を造り出す。周溝の北側と東側では盛土の単位に相違があるが、周溝下に盛土整形を施す点で共通している。

周溝の埋土から、須恵器杯H蓋片 2点（第18図1・2）・杯片 2点（同3）・杯類の破片 2点・有蓋高杯片 1点（同4）・杯A片 1点（同5）・皿片 1点（同6）・甕片 1点、土師器甕片 59点、土師器の細片 9点、製塙土器片 1点が出土した。

（4）土坑

SK190101 の平面形態はいびつな楕円形で、南北 1.07m、東西 0.65m、深さ 0.25m。断面形状は船底状をなし、一部が深くなる。黒褐色土、暗褐色土を埋土にもつ。須恵器細片 1点、土師器甕片 1点が破片で出土。SK190102 の平面形態は幅が広い構造をなし、北西-南東の検出長 3.00m、北東-南西 1.78m、深さ 0.20m。底面まで浅い。暗褐色土を埋土にもつ。須恵器甕 1点、土師器甕 6点が破片で出土。SK190103 の平面形態は崩れた楕円形で、南北検出長 0.45m、東西 1.41m、深さ 0.06m。断面形状は浅い箱形。黒褐色土、暗褐色土を埋土にもつ。SK190104 の平面形態は幅の広い構造をなし、北西-南東検出長 2.87m、北東-南西 1.61m、深さ 0.06m。断面形状は浅い船底状をなし、SK190101 と同様、底面まで浅い。暗褐色土を埋土にもつ。土師器甕片 1点が出土。SK190105 の平面形態は細い構造を呈し、北東-南西検出長 1.15m、北西-南東 0.39m、深さ 0.06m。断面形状は浅い船底状をなす。暗褐色土を埋土にもつ。須恵器杯蓋 1点、土師器碗 1点・甕 2点が破片で出土。

SK190101 以外は総じて浅く、近世以後に伴う遺構である可能性も否定できない。

（5）柱穴列

柱穴列 1基（SA190101）を検出した。P190101・P190102 の 2 基の柱穴が南北に並ぶが、西へは展開しない。2 基の柱穴とともに埋土に掘り方と柱当たりが見られ、P190101 の底面には根固め石がある。SA190101 の柱筋の柱間は 1.6m 前後、柱穴の掘り方の径は 0.5m ほどである。底面の標高は 21.8～21.9 m にあり、高低差をもつ。柱穴埋土からの出土遺物はない。

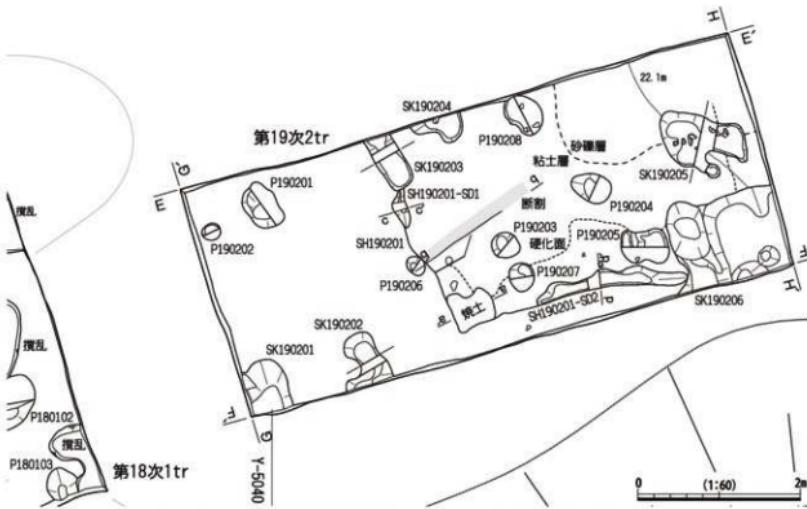
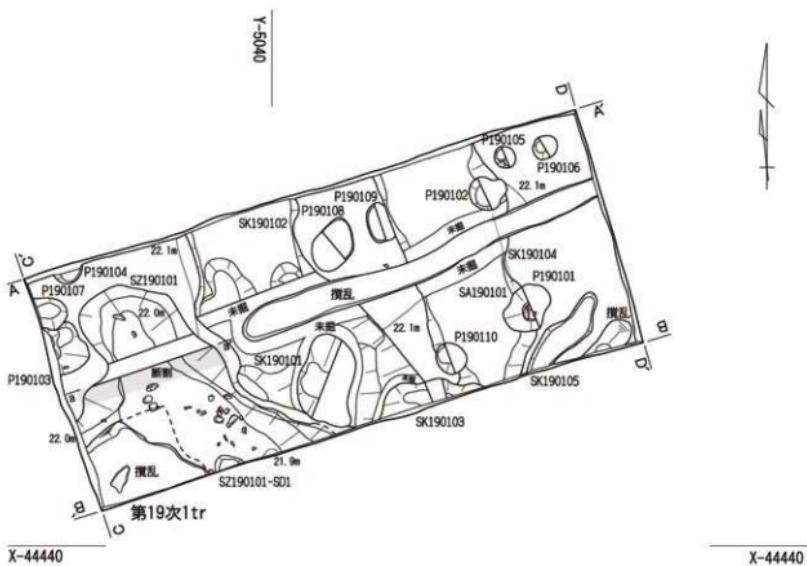
（6）柱穴・小穴

P190101・P190102 の 2 基の柱穴は柱穴列 SA190101 を構成する。

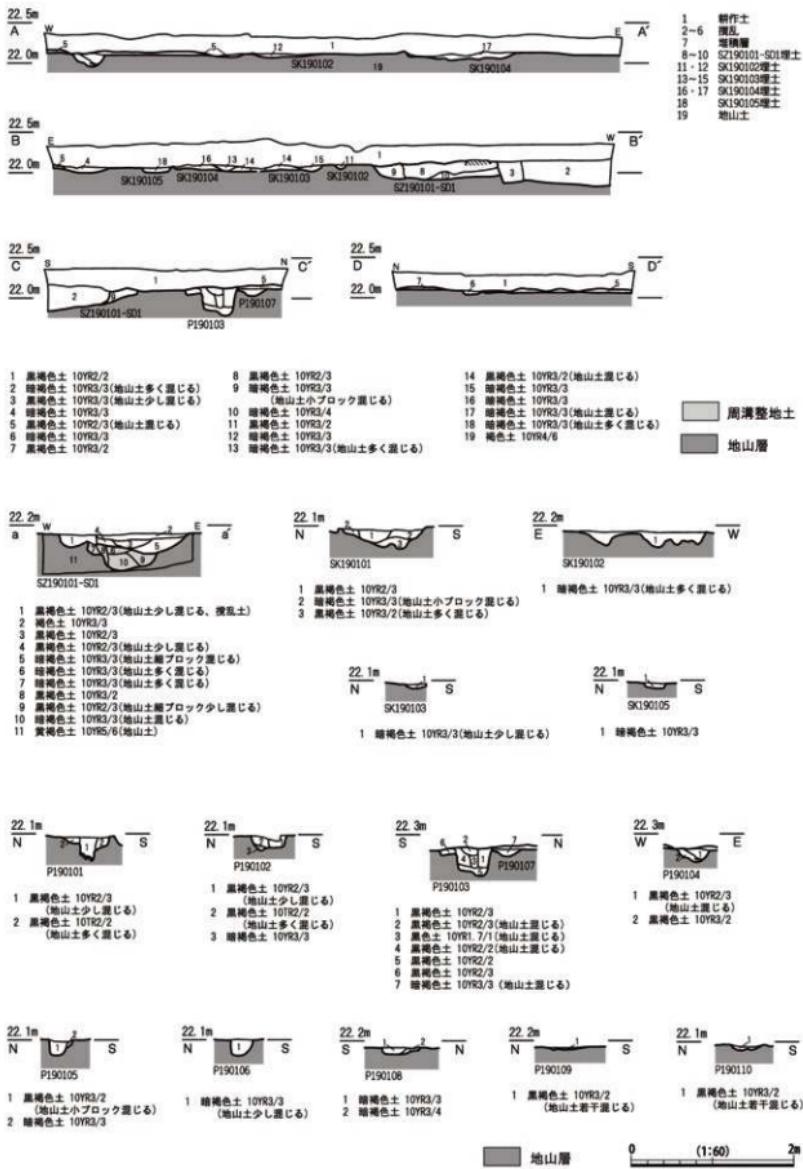
P190101 の平面形態は崩れた楕円形で、北東-南西 0.64m、北西-南東 0.46m、深さ 0.26m。断面形状は箱形で、柱あたりの部分が一段深くなり、底面に根固め石をもつ。P190102 の平面形態は崩れた円形で、南北 0.43m、東西 0.47m、深さ 0.19m。断面形状は箱形で、一部が深くなる。

P190103 の平面形態は崩れた円形で、南北 0.60m、東西検出長 0.40m、深さ 0.35m。断面形状は箱形。掘り方と柱あたりをもつが、周囲で柱穴の並びは確認できない。埋土から製塙土器支脚 1点（第18図7）が破片で出土。

P190104 の平面形態は円形で、南北検出長 0.13m、東西 0.37m、深さ 0.21m。断面形状は半円形。P190105 の平面形態は円形で、北東-南西 0.25m、北西-南東 0.28m、深さ 0.20m。断面形状は半円形。P190106 の平面形態は円形で、北東-南西 0.32m、北西-南東 0.29m、深さ 0.20m。断面形状は半円形。P190107 の平面形態は楕円形で、南北 0.42m、東西検出長 0.34m、深さ 0.08m。断面形状は弧状をなす。P190108 の平面形態は楕円形で、北東-南西 0.61m、北西-南東 0.48m、深さ 0.08m。



第16図 興道寺庵寺第19次調査1・2トレンチ遺構平面図(縮尺1/60)



第17図 興道寺庵寺第19次調査1トレンチ遺構土層断面図（縮尺1/60）

断面形状は船底状をなす。埋土から土師器甕片1点が出土。P190109の平面形態は楕円形で、南北0.49m、東西検出長0.28m、深さ0.04m。断面形状は弧状をなす。P190110の平面形態は円形で、北東—南西0.35m、北西—南東0.40m、深さ0.06m。断面形状は弧状をなす。埋土から土師器甕1点が破片で出土。

(7) 出土遺物

第18図1～6はSZ190101-SD1埋土、7はP190103埋土から出土した。

1・2は須恵器杯H蓋。1の復元口径は8.8cm。天井部は丸く、口縁部の立ち上がりは低い。口縁端部は強く屈曲し、下方に鋭く收める。天井部外面にヘラ削りの痕跡を残し、口縁部の内外面は横ナデを施す。2の復元口径は10.7cm。口縁部から天井部にかけて丸みを帯び、天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁端部は面をなす。3は須恵器杯H。復元口径は11.1cm。底部は浅く、口縁部は短く、口縁端部を鋭く收める。受部は薄く作る。底部外面は回転ヘラ削りを施し、口縁部外面から底部内面にかけて横ナデを施す。底部内面には、ネコ科と思われる小動物の足跡が残り、肉眼で肉球の跡6か所を観察できる。4は有蓋高杯。杯部の口径は10.3cm。杯部は内湾し、口縁部は内方に短く立ち上がり、口縁端部を鋭く收める。受部は厚く作る。底部外面は回転ヘラ削りを施す。脚部は太く、八の字状に開く。脚部に透かしは見られない。5は須恵器皿。復元口径は12.4cm。口縁部は上外方にまっすぐ立ち上がり、口縁端部は丸く、鋭く收める。6は須恵器皿。復元口径は8.7cm。口縁部は強く内湾して立ち上がり、口縁端部は外方に引き伸ばして鋭く收める。口縁端部の内外面に強い横ナデを施す。灯明皿。

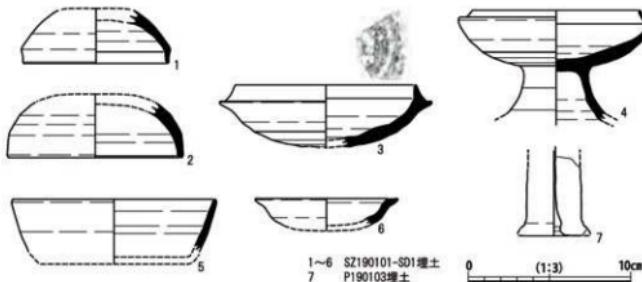
7は製塙土器の支脚で、中空。脚柱部は細く作る。

第4項 第19次調査2トレンチの調査（第16・19・20図）

(1) 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は22.35m。第18次調査1トレンチの東側、第19次調査1トレンチの南側に位置する。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.20～0.25m）下、トレンチの西端では標高22.15m付近で、トレンチの東端では標高22.1m付近で地山面の褐色土層の上面に至り、トレンチの両端で地山面の比高差が約0.05mしかないのは1トレンチと同様である。トレンチの北東隅では地山面が粘土層から砂礫層となる。



第18図 興道寺廃寺第19次調査1トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/3）

表土から須恵器杯蓋片 1 点、須恵器杯類の破片 2 点、土師器甕片 8 点、越前焼甕片 2 点、陶磁器細片 3 点、現代の瓦片 1 点が出土。また、排土から弥生土器片 1 点、土師器の細片 5 点、陶磁器細片 1 点が出土した。

（2）検出遺構の概要

地山面で竪穴建物跡 1 棟 (SH190201)、土坑 6 基 (SK190201～SK190206)、柱穴・小穴 8 基 (P190201～P190208) を検出した。

（3）竪穴建物跡

SH190201 は竪穴建物跡の南側を検出した。平面形態は方形を呈し、東西約 4 m ほどの規模に復元できる。床面の標高は約 22.1m 前後、建物跡の掘り方のほとんどが削平されており、床面までの深さは 1 cm あるかないかで、床面を検出したことでからうじて竪穴建物跡であるものと認識できる。

床面の断面形状は平らで、貼り床などは確認できないが、中央寄りに地山面の粘土層の硬化が認められる。この硬化面はよく縮まっており、貼り床と同等の機能をもつものと思われる。埋土は黒褐色土であったものと思われるが、基本的には表土直下で床面に至っている。床面直上付近で土師器甕 1 点、製塙土器 1 点（第 20 図 1）が破片で出土した。

建物の南西隅付近に焼土の堆積があり、暗褐色土、褐色土とともに数 cm ほど堆積するが、造り付けカマドの痕跡は認められない。建物の南側と西側の縁辺には幅 20 cm ほどの細い溝が部分的に廻り、建物壁溝にあたる。西側の溝 SH190201-SD1 は南北検出長 0.49m、東西 0.18m、深さ 0.03m で、断面形状は浅いレンズ状をなす。南側の溝 SH190201-SD2 は南北 0.21m、東西 1.88m、深さ 0.12m で、断面形状は尖底状をなす。SH190201-SD2 の埋土から土師器甕 2 点が破片で出土。

建物床面で 5 基の柱穴 (P190203・P190204・P190205・P190207・P190208) が検出されているが、確実に建物に伴う柱穴とは考えにくいため、竪穴建物の柱穴としては扱っていない。

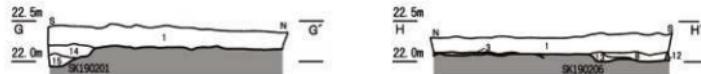
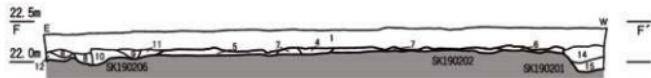
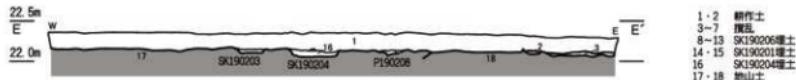
建物の時期を決める出土遺物には恵まれないが、7 世紀後半から 8 世紀前半に伴うものと考えられる。

（4）土坑

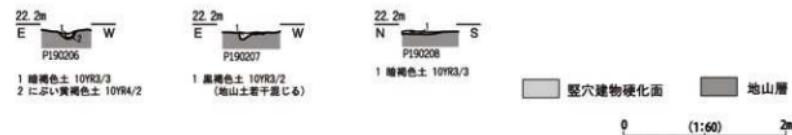
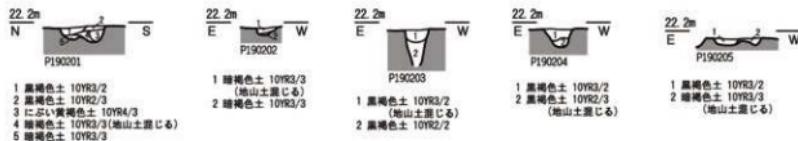
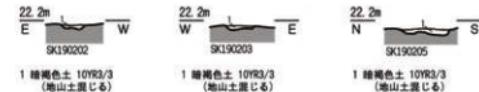
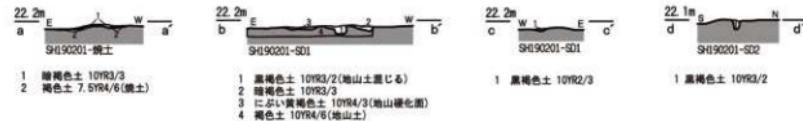
SK190201 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 0.64m、東西検出長 0.52m、深さ 0.28m。断面形状は箱形。暗褐色土を埋土にもつ。埋土から須恵器細片 1 点、土師器甕片 2 点が破片で出土。

SK190202 の平面形態は溝状を呈し、南北検出長 0.65m、東西 0.60m、深さ 0.05m。断面形状は浅い船底状をなす。暗褐色土を埋土にもつ。SK190203 の平面形態は溝状をなし、北東～南西 0.35m、北西～南東検出長 0.69m、深さ 0.05m。断面形状は浅い船底状で、一部が深くなる。暗褐色土を埋土にもつ。SK190204 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 0.32m、東西 0.62m、深さ 0.10m。断面形状は浅い箱形。暗褐色土を埋土にもつ。SK190205 の平面形態は崩れた円形で、南北 0.66m、東西 1.09m、深さ 0.08m。断面形状は浅い弧状をなし、一部が深くなる。暗褐色土を埋土にもつ。

SK190206 の平面形態は崩れた方形で、南北検出長 1.10m、東西検出長 1.37m、深さ 0.20m。断面形状は箱形をなす。黒褐色土、暗褐色土を埋土にもつ。埋土から須恵器壺類 1 点・甕 1 点、土師器甕 7 点、製塙土器 1 点、越前焼播鉢 1 点が破片で出土。



1 黒褐色土 10YR2/2	7 にぶい黄褐色土 10YR4/3(地山土混じる)	13 黑褐色土 10YR3/3
2 緑褐色土 10YR3/2	8 黒褐色土 10YR2/3	14 黑褐色土 10YR3/3(地山土多く混じる)
3 黒褐色土 10YR2/3(径10cmまでの根多く含む)	9 黒褐色土 10YR2/3(地山土細ブロック混じる)	15 黑褐色土 10YR3/3(地山土大ブロック混じる)
5 緑褐色土 10YR3/2(地山土多く混じる)	10 黄褐色土 10YR3/2(地山土小ブロック混じる)	16 黑褐色土 10YR3/3(地山土小ブロック多く混じる)
6 緑褐色土 10YR2/3(地山土小ブロック混じる)	11 黑褐色土 10YR3/2(地山土細ブロック混じる)	17 黑褐色土 10YR4/6
	12 黑褐色土 10YR2/3	18 黄褐色土 10YR4/6(径20cmまでの根多く含む)



第19図 興道寺庵寺第19次調査2トレンチ遺構土層断面図(縮尺1:60)

(5) 柱穴・小穴

P190201 の平面形態は崩れた梢円形で、北東—南西 0.41m、北西—南東 0.58m、深さ 0.26m。断面形状は半円形。P190202 の平面形態は円形で、北東—南西 0.24m、北西—南東 0.21m、深さ 0.11m。断面形状は弧状をなす。P190203 の平面形態は円形で、南北 0.32m、東西 0.35m、深さ 0.40m。断面形状は尖底状をなす。P190204 の平面形態は崩れた梢円形で、南北 0.36m、東西 0.51m、深さ 0.22m。断面形状は半円形。埋土から土師器甕 2 点が破片で出土。P190205 の平面形態は崩れた梢円形で、南北 0.44m、東西 0.59m、深さ 0.09m。断面形状は浅い弧状をなし、一部が深くなる。埋土から土師器甕 3 点（第 20 図 2）が出土。P190206 の平面形態は円形で、北東—南西 0.21m、北西—南東 0.25m、深さ 0.10m。断面形状は浅い船底状をなす。P190207 の平面形態は円形で、南北 0.35m、東西 0.31m、深さ 0.08m。断面形状は浅い尖底状をなす。P190208 の平面形態は崩れた梢円形で、北東—南西 0.42m、北西—南東 0.53m、深さ 0.04m。断面形状は浅い弧状をなす。埋土から須恵器細片 1 点が破片で出土。

(6) 出土遺物

第 20 図 1 は SH190201 埋土、2 は P190205 埋土から出土した。

1 は製塙土器。体部は丸みを帯び、口縁端部は上外方に鋭く收める。

2 は土師器甕の口縁部。器壁は厚く、口縁部は上方に立ち上がる。頸部の外面に刷毛目が残る。

第 5 項 第 18・19 次調査の成果と課題

(1) 旧地形の把握

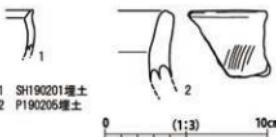
今回の調査地の南側に隣接する広域農道では発掘調査後、地山面が大きく削平されているものと想定されるが、今回の調査地付近は地山面があまり削平されることなく残り、興道寺廃寺が所在する南方から緩やかに標高が低くなる旧地形であったことを確認することができた。

(2) 埋没古墳の発見

今回の調査で、円弧状をなす茶の木の垣根に沿って、「狐塚」という小字名の由来となった円墳 1 基を確認した。『耳村誌稿』に記された明治 44 年(1911)の鉄劍出土を裏付ける成果である。

古墳の北側と東側で周溝にあたる溝をそれぞれ検出し、北側では周溝の内側で墳丘盛土の一部を検出した。東側の周溝は一定程度の改変を受けていたが、そのことを勘案しても径 10m ほどの墳丘規模が復元できる。墳丘土のほとんどや埋葬施設が失われている中、周溝の構築にあたって地山層を古墳の墳形に沿って構状に大幅に掘りくぼめて素掘りした後、この上に土砂を小ブロックごとに積み上げながら周溝の底面を造り出したことが判明した。当地における平野部の小円墳の造営過程を考える上で、例えば興道寺古墳群などに通有的に見られるものか、周辺での古墳調査に目を配る必要があろう。

埋葬施設も失われ、明確に古墳の時期を明らかにできないが、周溝埋土から出土した須恵器の年代を参考にすれば、TK209 型式併行期、7 世紀前葉である可能性が高い。ただし第 18 次調査 1 トレンチから出土した須恵器杯 H（第 15 図 4）が TK10 型式併行期まで遡るものと考えられ、先行する時期の須恵器も出土していることから、6 世紀から 7 世紀前葉までのある程度の年代幅を考えておく必要がある。



第 20 図 興道寺廃寺第 19 次調査
2 トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

（3）興道寺廃寺北方集落の展開

興道寺廃寺存続期の遺構、遺物はあまり確認されなかった。ただし、第19次調査1トレンチでは古墳周溝から8世紀の須恵器杯A・皿が出土しており、トレンチ西端で検出した柱穴P190103の埋土からは11~12世紀頃の製塙土器支脚が出土するなど、古代から中世初期には古墳自体が削平を受け、平地化していた可能性も少なからずあるものと考えられる。

また、明確な時期は不明であるが、堅穴建物跡1棟を検出した。興道寺廃寺の北方、北西方で確認されている8世紀前半の堅穴建物跡では壁面に沿って柱穴が並び、隅部に造り付けカマドを備える構造であることが明らかになっているが、今回、検出した堅穴建物跡にはそのような特徴は認められない。ただし、興道寺廃寺周辺における7世紀後半から8世紀前半の堅穴建物跡や掘立柱建物跡、柱穴列では南北軸の方位が若干西に振れる程度であるので、この堅穴建物跡も7世紀後半まで遡る可能性もある。今回の調査地のすぐ北側、県埋蔵文化財調査センター調査区（C区）で堅穴建物跡と考えられる遺構も検出されており、広域農道を越えてさらに北側に堅穴建物跡の分布が広がることが新たに判明し、興道寺廃寺に伴う付属集落がさらに北方に展開している可能性も浮上した。

（4）近世以後の遺構、遺物の確認

第18次調査1トレンチでは、土坑、柱穴列など近世以後に伴うと考えられる遺構群が検出された。土坑SK180101・SK180102の性格については、野溜め状の施設とも考えられたが、大規模に造り、内面は土壁状に塗り固めていること、SK180102底面付近から出土した土壁の中に曲線面をもつものもあり、導水のための施設を備えていた可能性があることなど、水溜め施設と想定される。発掘調査に従事された古者の話によれば、調査地付近には大正時代に馬の市があったという。これらの遺構が大正時代のものか、はつきりはしないが、柱穴列SA180101は馬を繋いでおく杭であった可能性も考えられる。

（5）ネコ科と思われる足跡を残す須恵器杯の出土

第18次調査1トレンチの古墳周溝から、底部内面に小動物の足跡が付着した須恵器杯Hが1点出土した。部分的ではあるが、肉球が認められ、足跡の形状からはネコ科の動物と考えられる〔小宮2013〕。兵庫県姫路市の見野古墳群でも6号墳東石室からTK209型式の杯Hの底部内面にネコ科の可能性がある小動物の足跡が残る須恵器が出土している〔立命館大学文学部2011〕。管見に触れる限り、この資料は土器の表面にネコ科と思われる動物の足跡が付着した最古例であり、今回の調査で新たに同時期の資料を蓄積したこととなる。

第8節 興道寺廃寺第17~19次調査の総括

第17~19次調査において、興道寺廃寺北方における古墳時代後期から古代にかけての土地利用のあり方や集落の展開について新たな知見を加えることができた。第3章で後述する興道寺遺跡での試掘調査成果を併せて考えると、この時期の集落が寺院北方に大規模に展開するものと考えられる。また、寺院北方で埋没古墳が発見されたことは寺院造営の前史を考える上で重要であり、古墳時代後期における当地の有力氏族の動向を探る上でも無視できないことを改めて確認しておきたい。

今回の調査は遺跡全体からすれば、ごく一部であるが、今後も継続的な発掘調査を実施することで、より興道寺廃寺をとりまく様相が明らかになるものと期待される。

第2表 興道寺廐寺第17~19次調査出土遺物觀察表

项目	指标	单位	值	备注	评价	结论
通长 通高	窗台板 窗台板	mm	2100 2100	窗台板尺寸 窗台板尺寸	合格 合格	窗台板尺寸符合设计要求，窗台板厚度及强度满足使用要求。
通长 通高	窗台板 窗台板	mm	2100 2100	窗台板尺寸 窗台板尺寸	合格 合格	窗台板尺寸符合设计要求，窗台板厚度及强度满足使用要求。
通长 通高	窗台板 窗台板	mm	2100 2100	窗台板尺寸 窗台板尺寸	合格 合格	窗台板尺寸符合设计要求，窗台板厚度及强度满足使用要求。
通长 通高	窗台板 窗台板	mm	2100 2100	窗台板尺寸 窗台板尺寸	合格 合格	窗台板尺寸符合设计要求，窗台板厚度及强度满足使用要求。

第3表 興道寺第17次調查出土瓦觀察表

第2章 高善庵遺跡(第2・3次調査)

第1節 高善庵遺跡周辺の環境

第1項 高善庵遺跡の位置と周辺の地形

高善庵遺跡（福井県遺跡番号 30068）は福井県三方郡美浜町興道寺 37 号高善庵、38 号小山、77 号高達ほかに所在する。遺跡のおよその中心は北緯 35 度 35 分 28 秒、東経 135 度 56 分 50 秒。

興道寺廃寺から南々東へ約 900m に位置し、雲谷山（標高 786.6m）から北に派生する小支尾根先端付近（標高 70.50m）の東側斜面の山裾の畠地に所在する。遺跡から北方に興道寺集落や興道寺廃寺、耳川下流域の左岸に広がる低位河岸段丘を見下ろし、標高約 37.0～42m 付近に立地する。

遺跡の現況は水田、山裾の緩斜面を開墾した畠地からなり、畠地の一部には茶の木がある。第1章の第3図で示した明治 26 年（1893）に大日本帝国陸地測量部が測図の地形測量図「三方」には高善庵遺跡、特に第1～3次調査地の付近を南北に通過する古道が示されており、明治時代には耳川左岸域の主要な南北道路の一つであったことがうかがえる。第22図には、第2・3次調査時に現地で略測した現況地形測量の成果を反映しているが、調査地周辺の畠地は大きく 2 段の平坦面をもつ。この平坦面の間にかつて道があり、人の往来があったことを発掘調査に従事されている古老より伝え聞いた。この道が明治 26 年の地形測量図に表現される道路と一致するものと考えられる。

第2項 高善庵遺跡周辺の歴史的環境

第1章と重複する内容もあるが、高善庵遺跡周辺の歴史的環境を述べる（第1章 第5図・第1表）。

遺跡周辺で旧石器時代、縄文時代、弥生時代および古墳時代中期までの遺跡は確認されていない。

古墳時代後期の遺跡として、興道寺遺跡（18）、上野遺跡（31）などがあり、高善庵遺跡の北側と南側にこの時期の集落が展開するようである。ただし、興道寺遺跡では遺跡の南側での調査事例が希薄であり、上野遺跡においてもこれまで調査事例がないことから、その具体相は不明である。

一方で、高善庵遺跡から支尾根を挟んだ西側斜面の山裾には興道寺窯跡（27）が所在する。窯の構造、出土遺物、時期などは前章で概述したとおりであるが、耳川流域において唯一の古墳時代後期の須恵器窯である。

遺跡北方の低位河岸段丘には 10 数基からなる興道寺古墳群の所在が知られる以外に、福井県教育委員会発行の『福井県遺跡地図 平成 4 年度』には高善庵遺跡から小支尾根を挟んだ西側の斜面に高達古墳群（28）がドットリングされているものの、現地に古墳が所在する痕跡は見い出せない。第21図には『福井県遺跡地図』で示される古墳群の位置を示すに留めた。

周辺の律令期の集落遺跡として、興道寺遺跡、上野遺跡などがある。興道寺遺跡では遺跡北縁部の付近で竪穴建物跡や掘立柱建物跡など複数の建物構造が検出されていること、上野遺跡では 8～9 世紀の須恵器、土師器、製塩土器が採集されていること以外に、周辺遺跡の動向が不明であることは古墳時代後期のあり方と同様である。

遺跡の北西縁部、支尾根先端には日枝神社が鎮座し、背後の斜面が法面化しているが、かつては弥美小学校西分校などの建物も建ち、一部で土砂掘削が行われているなど周辺では旧地形が変貌している。

第3項 高善庵遺跡における既往の調査研究

高善庵遺跡ではこれまで瓦窯の存在が推定されてきた。昭和38年(1963)発行の『福井県遺跡台帳目録』、同39年(1964)発行の『美浜町文化財調査台帳』には遺跡に関する記載はなく、当然、地誌にあたる『三方郡誌』などにもその記述はない。平成5年(1993)、『福井県遺跡地図 平成4年度』46図に「遺跡番号 30068 高善庵遺跡、種別 散布地、所在地 興道寺、時代 古墳・平安」と遺跡として掲載されたのが、周知の埋蔵文化財包蔵地としての初見である。これによれば、これまでに古墳時代と平安時代の須恵器・土師器片が採集されている。

しかし、高善庵遺跡の一部が瓦窯であることが水野和雄氏によって指摘されており〔北陸古瓦研究会 1987、水野 2006〕、興道寺廢寺に瓦を供給した瓦窯の所在が明らかではない中、有力な瓦窯推定地の一つとなっている。水野氏は弥美小学校西分校（現在は廃校）、西保育所（現在は子育て支援センター）の付近に瓦窯の存在を指摘しており、その根拠資料として昭和 12 年（1937）に小字高善庵から出土したことを墨書きする瓦片 4 点（丸瓦 3 点、平瓦 1 点）を挙げている。小字高善庵は遺跡の東寄り、第 1～3 次調査地や弥美小学校西分校、西保育所の東隣に位置する。



第21図 高善庵遺跡位置図(縮尺1/2,500)

この伝世の瓦片に関しては『2007 年報告』、『2016 年総括報告』に実測図を収録し、観察所見を概述したが、製作技法や胎土が興道寺廃寺出土瓦と酷似し、平瓦が焼け歪んでいる。また、平成 10 年度（1998）に美浜町教育委員会が実施した分布調査で、子育て支援センター北側の興道寺 77 号 3 番の畠地（第 1 ~ 3 次調査地付近）から瓦片、底部に高台をもつ須恵器杯の破片を若干採集している。

興道寺廃寺の出土瓦に一枚作り技法のものが存在しないので、瓦窯自体も有畔式平窯の構造であるとは考えられず、おそらくは山裾の緩斜面に所在する登り窯で須恵器とともに焼成されていたものと推測される。これらのことからも、やはり付近に興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯が存在する可能性があり、興道寺廃寺の創建とその後の寺院造営のあり方を考える上でも重要な問題を含んでいる。

第 2 節 調査に至る経緯と経過

第 1 項 高善庵遺跡の発掘調査に至る経緯と経過

高善庵遺跡における初めての発掘調査は、瓦窯の検出を目的として平成 15 年度（2003）に実施した発掘調査である。この第 1 次調査の内容については『2007 年報告』で概述したが、調査では瓦窯の検出、瓦の出土に至らず、瓦窯の存否は不明の残ったままとなっていた。その後、興道寺廃寺の発掘調査が本格化し、高善庵遺跡の発掘調査が継続されることになったが、『2016 年総括報告』の刊行を経て、興道寺廃寺の寺域外で発掘調査が進む中で、高善庵遺跡で発掘調査を行う機運が高まった。

平成 29 年度（2017）は 3 か所のトレンチを設定して第 2 次調査を行い、令和元年度は 1 か所のトレンチを設定して第 3 次調査を行った。第 22 図に第 1 ~ 3 次調査の調査区の位置を示した。

第 2 次調査については、興道寺廃寺等調査指導委員会に調査指導を仰ぎ、前述の委員各位にご指導を賜った。その後、同委員会解散のため、第 3 次調査では学識者の調査指導は受けていない。発掘調査では、土地所有者である木村毅、澤田要一、西野民男の各氏のご理解、ご協力を賜った。

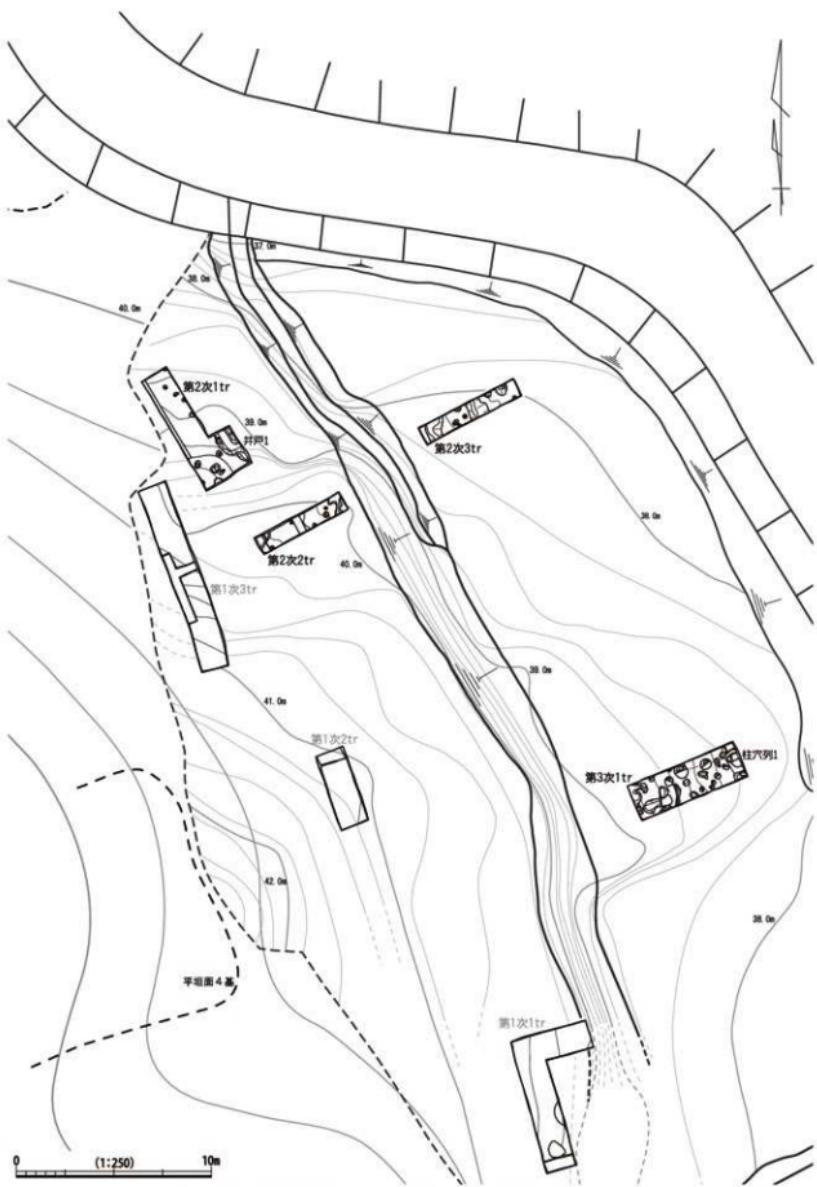
第 2 項 現地調査の手続き、方法

文化財保護法に関する手続きについて、調査の実施にあたって文化財保護法第 99 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査通知書を福井県教育委員会に提出した上で調査に着手した。調査終了後は、遺失物法第 13 条の規定により教賀警察署長に対して埋蔵文化財発見届を速やかに提出するとともに、福井県文化財保護条例第 57 条の第 2 第 1 項の規定により福井県教育委員会に対して埋蔵文化財保管証を提出した。第 2 次調査については、福井県教育委員会から教賀警察署長に対する文化財認定を経た後、福井県教育委員会から埋蔵文化財の譲与を受けている（第 3 次調査については手続き中）。

発掘調査は、調査地が狭小で、水路などもあり、パワーショベルなどの掘削機械の搬入が困難なため、第 1 次調査以後、表土の掘削から埋め戻しまで全て人力作業で行った。調査区の設定は土地の地割に沿っているため、東西軸、南北軸に斜交している。第 3 次調査では遺構の掘削は半裁に留めたが、第 2 次調査では遺構検出面での湧水が激しかったため、土層断面図化、写真撮影の上、完掘した。

遺構の記号として、柱穴列・SA、井戸・SE、土坑・SK、溝・SD、柱穴・小穴・P など、遺構種別ごとにそれぞれ略号を付した。本書収録の遺構図などは基本的に略号で表示した。遺構番号は興道寺廃寺の発掘調査と同様、調査次数の 2 衍 + トレンチ番号 + 遺構番号という 6 衍の遺構番号の表示とした。

遺構平面図、遺構土層断面図、トレンチ土層断面図など調査図面の作成は、調査担当者と作業員が協力して進めた。トレンチ幅の中央に 2 点の基準点を設定し、それを図根点として造り方測量を基本



第22図 高善庵遺跡第2・3次調査トレンチ配置図（縮尺 1/250）

として、一部は平板測量を併用して原則として1/20の縮尺の平面図、土層断面図などを作成した。

写真は、記録用として35mm一眼レフデジタルカメラを使用して撮影した。基本的にはトレンチごとに遺構の検出段階、遺構の掘削（半裁）段階、調査の最終段階で全体の写真撮影を行い、必要に応じて、個別遺構の詳細写真、遺構の土層断面、遺物等出土状況の写真撮影を行った。

第3項 整理作業の方法と報告書の作成

前章で述べたように、興道寺廃寺第17～19次調査において実施した内容と同一であり、本項では再述しない。

第2次調査3トレンチ出土の土製品（第30図4）は、株式会社太陽測地社福井支店が実測したものを使用したことを付記する。

第3節 高善庵遺跡第2・3次調査の概要

第1項 第1次調査の概要

第1次調査は3か所のトレンチを設定し、平成15年(2003)6月23日から7月18日まで面積36.0m²の発掘調査を実施した。以下に、第1次調査の調査区設定の根拠と調査の内容について述べる。

〔第1次調査（平成15年度・2003）〕

前述のとおり調査地は大きく上下2面の平坦面からなり、その間には法面と細い通路がある。高善庵遺跡での調査事例がない中、過去の分布調査では下側の平坦面で瓦片、須恵器片が採集されていることから、上側の平坦面に何らかの遺構があることを想定し、調査の取り掛かりとして基礎データを得るために、畑地の中でも最も標高が高い40～42mのあたりに1～3トレンチを設けた。

発掘調査ではいずれのトレンチでも表土の耕作土の下、極めて浅いところで暗褐色系の砂質土からなる地山面を検出したが、遺構、遺物ともに確認されなかった。最も北側に位置する3トレンチで表土と地山面の間に黒褐色系の堆積土が分布していたが、遺物の包含は全く見られなかった。

第2項 第2・3次調査の概要

前述のとおり、第1次調査後、今日まで瓦窯の未確認という課題が残ったままであったため、瓦窯を検出し、興道寺廃寺との関係性を明らかにすることを目的として、平成29年度(2017)と令和元年度(2019)に内容確認調査を実施した。

第2・3次調査は第1次調査と同様、美浜町興道寺77号高達3番に4か所のトレンチを設定した。第2次調査は平成30年(2018)1月31日から同3月23日まで、第3次調査は令和元年11月12日から同11月29日まで発掘調査を行っている。第1次調査の面積が36.0m²、第2次調査の面積が22.6m²、第3次調査の面積が11.5m²、合わせて70.1m²の調査面積である。

第4節 高善庵遺跡第2・3次調査

第1項 第2・3次調査の目的

第1次調査では全く瓦窯の痕跡を確認することができます、またそれ以後、長く調査が行われていな

かつたことから、第2次調査では第1次調査が行われた標高40~42m付近の地点から一段低く、かつて日枝神社に近い標高38~40mの地点にトレンチを設けた。現地に残る上下2面の平坦面のうち、2トレンチが上の平坦面、下の平坦面が3トレンチ、1トレンチはその傾斜面に位置する。第3次調査は、第2次調査3トレンチと同様、下の平坦面に1トレンチを設けた。第2次調査の南方に位置する。

第2・3次調査は、①旧地形の把握、②遺構・遺物の存否および様相確認を目的として調査を行った。

①について、調査地付近は北や東に向けて標高が低くなる山裾の緩斜面で、前述のとおり中央の小道を挟んで西側が一段高く、逆に東側が一段低い平坦地であるなど、一定程度の土地改変が認められる。小道の一部では山肌の地山土や軟岩盤が露頭している場所もあり、小道を挟んで西側は盛土、東側は削平によって現地形が形成されたものと考えられるが、旧地形とその造営時期を把握することで、瓦窯の存否の痕跡を明らかにすることを目指した。

②については、かつて瓦片や須恵器片が採集された地点の近接地で瓦窯を含めた遺構・遺物の存否、様相を確認することで、寺院と瓦窯との関係性の一端を明らかにすることを目指した。

第2項 第2次調査1トレンチの調査（第23~25図）

（1）基本層序

調査地は畠地で、地表面の標高は38.85~39.6mである。地表面の地形が北に向かって窪地状になっていたため、調査前は瓦窯の存在も想定された。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.1~0.3m）下、トレンチの南端では標高39.25m付近で地山面となる黒褐色土層の上面に、トレンチの中央付近では標高38.9m付近で地山面となる明黄褐色土層の上面に、またトレンチの北端では標高38.65m付近で地山面となる明黄褐色土層の上面に至る。地山面は北に向かって大きく傾斜し、0.6mの比高差をもつ。トレンチ西壁に沿って地山層を断ち割ったところ、明黄褐色土層は0.3mほどの厚みがあり、その下は浅黄橙色粘土からなる軟岩盤層となり、この境から湧水する。

トレンチの南端付近には表土下に水分が多い黒色土・黒褐色土（層厚0.1~0.2m）からなる堆積層が分布し、その下の地山層は黒褐色土、にぶい黄橙色粘土であるが、この地山層上面から湧水があり、全体的に粗砂が多く含まれている。

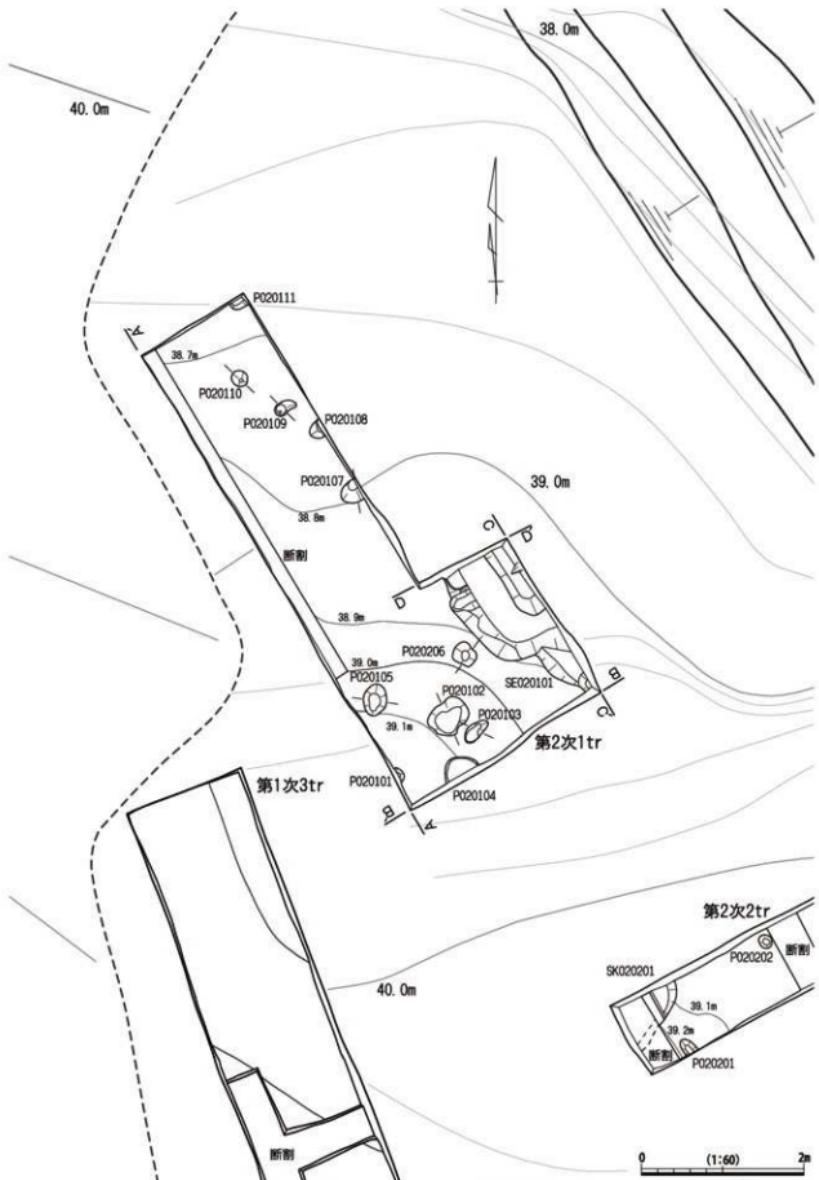
表土から土師器皿1点、砥石片1点が、堆積層の黒褐色土層からは土師器皿8点・土師器の細片2点が出土。

（2）検出遺構の概要

地山面で井戸1基(SE020101)、柱穴・小穴11基(P020101~P020111)を検出した。

（3）井戸跡

SE020101は西側が部分的に検出された。全体の規模は不明であるが、北東-南西の検出長2.09m、北西-南東の検出長0.99mを測る。深さ0.47mで、断面形状は箱形となる。井戸の掘り方は方形で、井戸枠材は既に除かれているが、方形木枠であったものと考えられ、底面に井戸枠の痕跡がわずかに残る。地下水位が高く、調査時は一晩経つとある程度の高さまで冠水した。黒褐色土、黒色土を埋土にもつ。埋土は一括での埋め戻し堆積であり、トレンチの南東隅からの掘り込みは人為的な井戸の破壊に伴うものと考えられ、埋土の上位に認められる搅乱はこれに伴う再堆積土であろう。



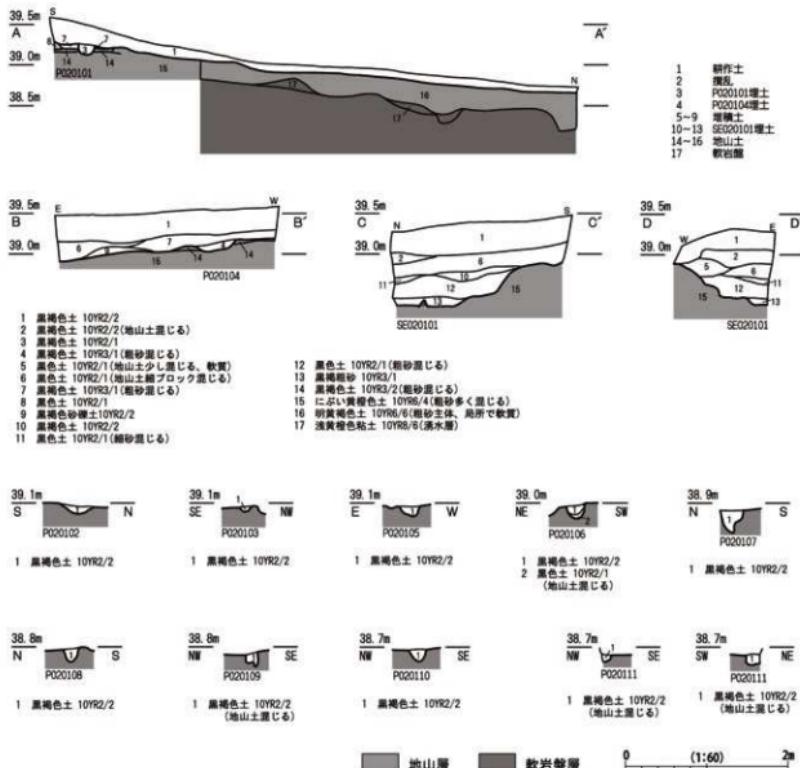
第23図 高善庵遺跡第2次調査1トレンチ遺構平面図（縮尺1/60）

井戸枠の部分の埋土から土師器皿片1点(第25図1)・土師器の細片2点が出土し、埋土の黒褐色土層から土師器皿片1点・土師器の細片3点が出土した。また、上位の搅乱土から須恵器細片1点、灰釉陶器細片1点、土師器甕片3点・皿片30点(同2~5)・土師器の細片7点が出土した。

(4) 柱穴・小穴

柱穴を構成すると考えられるものではなく、いずれも規模が小さく、底面まで浅い小穴群である。

P020101の平面形態は円形で、南北0.15m、東西検出長0.07m、深さ0.14m。断面形状は半円形である。P020102の平面形態は崩れた円形で、北東-南西0.49m、北西-南東0.41m、深さ0.14m。断面形状は弧状をなす。P020103の平面形態は楕円形で、北東-南西0.35m、北西-南東0.17m、深さ0.08m。断面形状は半円形。P020104の平面形態は円形で、南北0.23m、東西0.44m、深さ0.20m。断面形状は船底状をなす。P020105の平面形態は楕円形で、南北0.39m、東西0.30m、深さ0.13m。断面形状はいびつな半円形。P020106の平面形態は崩れた楕円形で、北東-南西0.26m、北西-南東0.30m、深さ0.19m。断面形状は半円形。P020107の平面形態は楕円形で、南北0.28m、東西検出長



第24図 高善庵遺跡第2次調査1トレンチ遺構土層断面図(縮尺1/60)

0.24m、深さ 0.28m。断面形状は尖底状をなす。P020108 の平面形態は円形で、南北 0.21m、東西検出長 0.14m、深さ 0.17m。断面形状は半円形。P020109 の平面形態は崩れた梢円形で、南北 0.17m、東西 0.28m、深さ 0.18m。断面形状は箱形で、一部が深くなる。P020110 の平面形態は円形で、南北 0.20m、東西 0.20m、深さ 0.15m。断面形状は半円形。P020111 の平面形態は梢円形で、南北検出長 0.13m、東西検出長 0.20m、深さ 0.10m。断面形状は箱形。

(5) 出土遺物

第25図1はSE020101 埋土のうち井戸枠の部分から、2~5は同じく埋土上位の搅乱土から出土した。

1~5は土師器皿。1の底部は平らで、外面に糸切り痕が残る。口縁部の外面には強い横ナデを施す。2の口縁端部は肥厚し、丸く收める。3の口縁部は外上方にまっすぐ立ち、口縁端部を丸く收める。口縁部の内外面に丁寧な横ナデを施す。4の口縁部は内弯して立ち、口縁端部は面をなす。口縁部の内外面に横ナデを施す。5の底部外面に糸切り痕を残し、口縁部の外面に強い横ナデを施す。

第3項 第2次調査2トレンチの調査（第26~28図）

(1) 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は39.9~40.1mである。地表面の地形はほぼ平坦である。

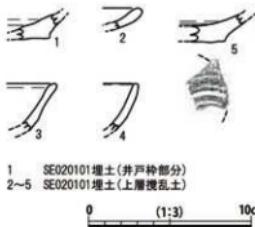
表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2~0.35m）下、トレンチの西端では標高39.15m付近で、トレンチの東端では標高38.8m付近で地山面となるにぶい黄褐色土層の上面に至る。地山面は東に向かって緩やかに傾斜し、0.35mの比高差をもつ。地山土は粗砂質で湧水が激しい。表土から須恵器細片1点、土師器皿片9点・台付皿1点・土師器の細片9点、近代陶磁器の細片1点、現代の瓦片5点、鉄片1点が出土した。

表土下に黒褐色土（層厚0.2mほど）が水平に堆積するが、その下には黒色土、黒褐色土、暗褐色土が0.1~0.2mほどの厚みをもちながら東側から積み上げたように堆積している。この堆積層は現地形に見られる高低差のある平坦面が造成された際に盛土された整地土にあたる。この盛土された土から須恵器壺類と思われる破片1点（第28図1）・須恵器の細片2点、土師器壺片2点（うち1点は把手）・皿片114点（同2・3）・土師器の細片17点、近代の陶磁器細片1点が出土した。標高が低い部分に分布していた遺物が盛土の際に混入したものと考えられる。

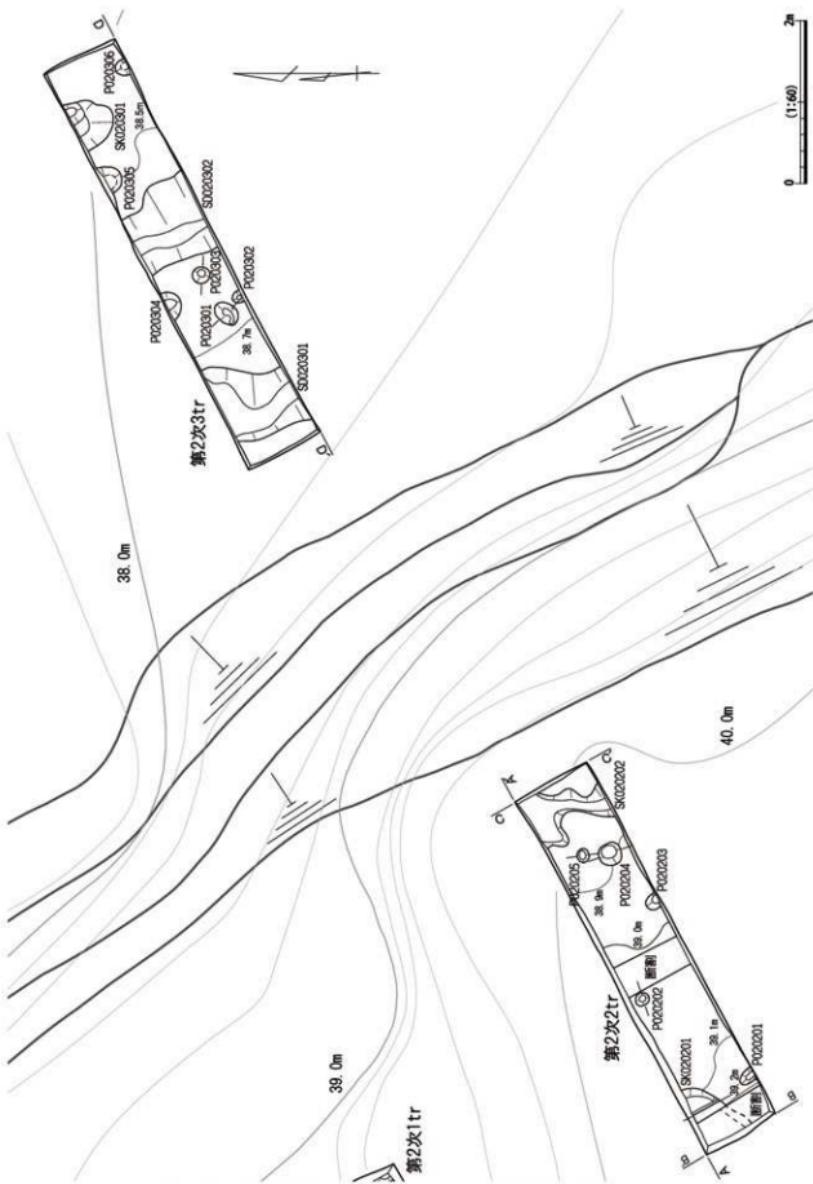
その下位には0.2~0.3mほどの厚みがある黒色土が地山面の傾斜に沿って東に向かって傾斜しながら堆積する。破片で土師器壺1点・皿21点（同4~6）、台付皿1点（同7）・土師器の細片5点などが出土するとともに、堆積土には粗砂が一定程度含まれており、周辺からの流れ込みによる堆積があつたものと考えられる。

(2) 検出遺構の概要

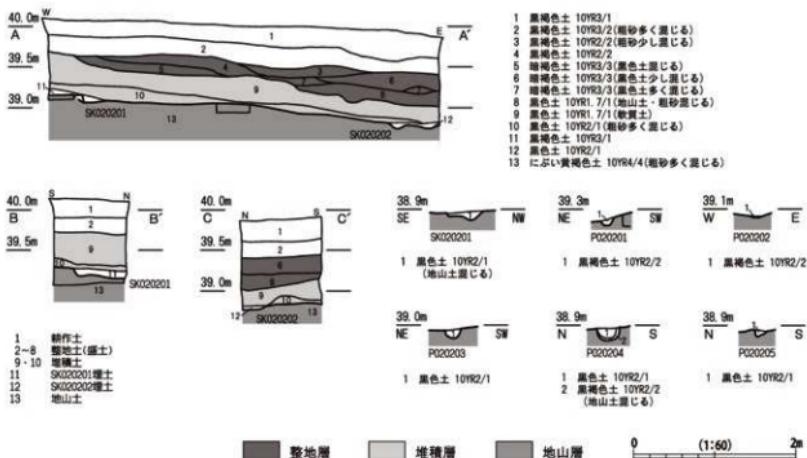
地山面で土坑2基（SK020201・SK020202）、柱穴・小穴5基（P020201~P020205）を検出した。



第25図 高善庵遺跡第2次調査1トレンチ
出土遺物実測図（縮尺1/3）



第26図 高善庵遺跡第2次調査2・3トレンチ遺構平面図（縮尺1/60）



第27図 高善庵遺跡第2次調査2トレンチ遺構土層断面図(縮尺1/60)

(3) 土坑

SK020201の平面形態は円形を呈するものと思われ、南北検出長0.43m、東西検出長0.43m、深さ0.10m。断面形状は箱形。黒褐色土を埋土にもつ。SK020202の平面形態は崩れた溝状をなし、南北0.61m、東西検出長1.00m、深さ0.12m。断面形状は弧状をなし、一部が深くなる。黒色土を埋土にもつ。

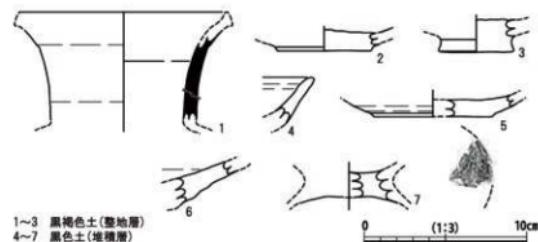
(4) 柱穴・小穴

P020201の平面形態は長楕円形で、北東-南西0.16m、北西-南東検出長0.22m、深さ0.10m。断面形状は半円形。P020202の平面形態は円形で、南北0.16m、東西0.17m、深さ0.03m。断面形状は弧状をなし、極めて浅い。P020203の平面形態は楕円形で、南北検出長0.19m、東西0.20m、深さ0.12m。断面形状は半円形。P020204の平面形態は円形で、南北0.28m、東西0.27m、深さ0.17m。断面形状は半円形。P020205の平面形態は円形で、南北0.15m、東西0.17m、深さ0.08m。断面形状は尖底状をなす。

(5) 出土遺物

第28図1~3は整地層(盛土層)のうち黒褐色土から、4~7は堆積層の黒色土から出土した。

1は須恵器壺か瓶の頸部。口縁部はまっすぐに立ち、内外面ともに強い横ナデを施す。2・3は土師器皿。2は底部外面に



第28図 高善庵遺跡第2次調査2トレンチ出土遺物実測図(縮尺1/3)

糸切り痕を残す。3は土師器皿。底部径3.8cm。底部には円柱状の高台を備え、底部の外面にわずかに糸切り痕を残す。

4・5は土師器皿。4の口縁部は外上方にまっすぐ立ち、口縁端部を丸く収める。口縁部に横ナデを施す。5は外方に口縁部が立ち、底部外面には明瞭な糸切り痕を残す。

6は大型の土師器皿か。器壁は厚く、外面に強い横ナデを施し、指頭圧痕を残す。

7は土師器皿付皿。外に開く低い脚台が付くものと思われる。底部内面にナデを施す。

第4項 第2次調査3トレンチの調査（第26・29・30図）

(1) 基本層序

調査地は畠地で、地表面の標高は38.0～38.2mである。2トレンチの地表面の標高とは1.9mほど低い。地表面の地形はほぼ平坦である。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2～0.3m）下、トレンチの西端では標高37.9m付近で、トレンチの東端では標高37.4m付近で、にぶい黄橙色の軟岩盤層の上面に至る。2トレンチの土層断面で確認されたように、土地造成時に地山面が大規模な削平を受け、元々は存在したであろう粘土層の地山層が失われ、軟岩盤層の面が現れているものと考えられる。軟岩盤層は凹凸をもちらながら東に向かって緩やかに傾斜し、0.5mの比高差をもつ。

2トレンチ東端の地山面の標高が約38.8mで、3トレンチ西端の軟岩盤層の標高が約37.9mと、その比高差は0.9mに收まり、3トレンチで粘土の地山層が削平されていることを勘案すると、元来は比較的緩やかな山裾の緩斜面の地形であったものと考えられる。

表土下に黒褐色土が0.2mほどの厚みをもちらながら東側に流れるように堆積する。地山面の削平を受けた後に軟岩盤層の上に堆積したものと考えられる。

表土から須恵器杯蓋片1点、土師器皿片10点・台付皿片1点・土師器の細片6点、陶磁器細片4点が出土し、堆積層から須恵器杯片2点・甕の胴部片1点・須恵器の細片3点、土師器皿片16点（第30図1～3）、土師器の細片17点、土製品1点（同4）が出土した。

(2) 検出遺構の概要

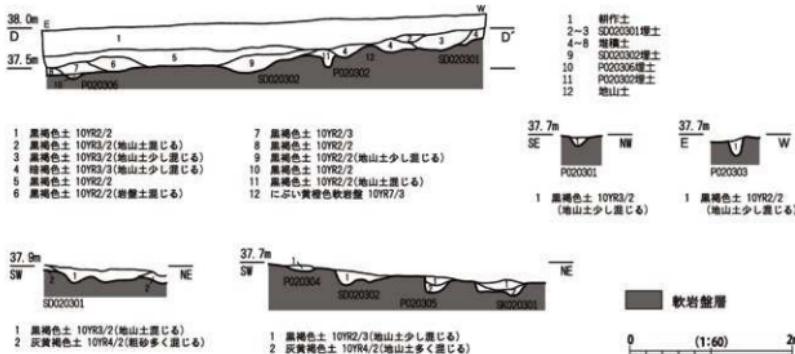
地山面で溝2条（SD020301・SD020302）、土坑1基（SK020301）、柱穴・小穴6基（P020301～P020306）を検出した。なお、これらの遺構は軟岩盤層に掘り込まれたもので、堆積層と遺構の埋土が同質のものもあり、地山層の削平時に軟岩盤層の上面に残された土取り痕跡である可能性も少なからずある。

(3) 溝

SD020301、SD020302ともに南北に延び、断面形状は弧状をなす。黒褐色土を埋土にもつ。SD020301は南北検出長0.94m、東西0.98m、深さ0.22m。SD020302は南北検出長0.96m、東西1.00m、深さ0.19m。SD020302の埋土から土師器碗1点（第30図5）・皿5点が破片で出土。

(4) 土坑

SK020301の平面形態は崩れた円形で、南北検出長0.51m、東西0.62m、深さ0.20m。断面形状は箱形。



第29図 高善庵遺跡第2次調査3トレンチ造構土層断面図(縮尺1/60)

(5) 柱穴・小穴

P020301の平面形態は梢円形で、北東-南西 0.34m、北西-南東 0.22m、深さ 0.10m。断面形状は尖底状をなす。P020302の平面形態は円形で、北東-南西 0.15m、北西-南東検出長 0.11m、深さ 0.22m。断面形状は船底状をなす。P020303の平面形態は円形で、南北 0.22m、東西 0.20m、深さ 0.23m。断面形状は尖底状をなす。P020304の平面形態は円形で、南北検出長 0.19m、東西 0.37m、深さ 0.08m。断面形状は弧状をなす。P020305の平面形態は円形で、南北検出長 0.21m、東西 0.33m、深さ 0.21m。断面形状は箱形をなす。埋土から土師器皿1点(第30図6)が破片で出土。P020306の平面形態は円形で、南北検出長 0.15m、東西 0.20m、深さ 0.06m。断面形状は弧状をなす。

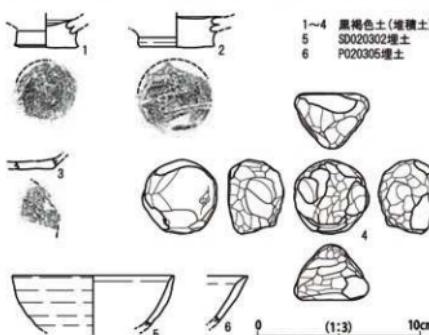
(6) 出土遺物

第30図1~4は地山層削平後の堆積土、5はSD020302埋土、6はP020305埋土から出土した。

1~3は土師器皿。1・2は底部に円柱状の高台をもち、底部外面は糸切り痕をわずかに留める。1の高台径 2.4cm、2の高台径 4.6cmと法量差がある。3の器壁は薄く、底部外面に明瞭に糸切り痕を残す。4は把手状の土製品。平面は円形を呈し、側面は三角形もしくは半円形をなす。底部は平らで、上部2か所に指頭ほどのくぼみをもち、親指と人差し指で摘まむような形状をなす。表面には工具による不定方向のナデが残る。

5は土師器碗。器壁は薄く、丸みを帯びて立ち上がる。口縁部は内弯し、口縁端部は鋭く收める。口縁部の外外面に弱い横ナデを施す。

6は土師器皿。器壁は薄く、口縁部は外上方にまっすぐ伸び、口縁端部を鋭く收める。口縁部の内外面に横ナデを施す。



第30図 高善庵遺跡第2次調査3トレンチ出土遺物実測図(縮尺1/3)

第5項 第3次調査1 トレンチの調査（第31～33図）

(1) 基本層序

調査地は畠地で、地表面の標高は38.5～38.85m。東側に向かってわずかに傾斜する地形である。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2～0.3m）下、トレンチの西端では標高38.65m付近で、トレンチの東端では標高38.05m付近で地山面となるにぶい黄褐色粘土層の上面に至る。地表面に対し地山面は東に向かって大きく傾斜し、0.6mの比高差をもつ。

表土下に黒色土・黒褐色土など（層厚0.1～0.2m）からなる堆積層が地山面の傾斜に沿って分布する。

表土から土師器の細片12点、陶磁器細片1点、現代の瓦片1点、煉瓦片4点、鉄釘3点が出土し、堆積層から須恵器杯H蓋片1点（第33図1）、土師器の細片1点が破片で出土した。また古代の平瓦片1点を採集している。

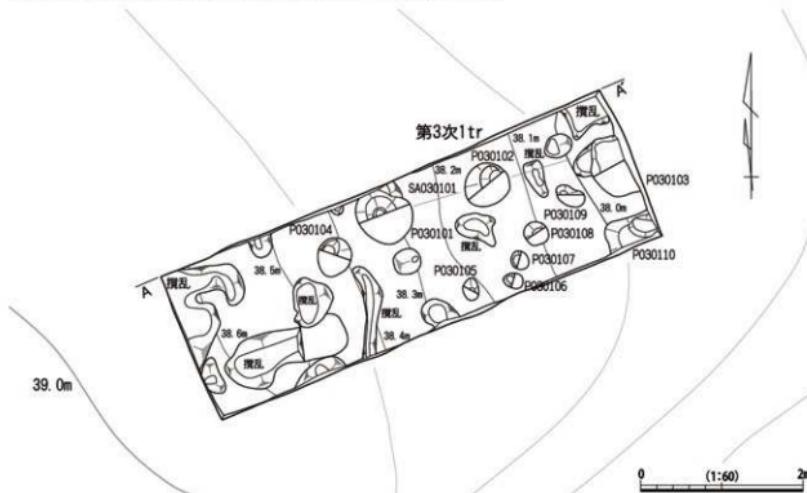
(2) 検出遺構の概要

地山面で柱穴列1基（SA030101）、柱穴10基（P030101～P030110）を検出した。地山面に掘り込まれた搅乱12基が確認されている。

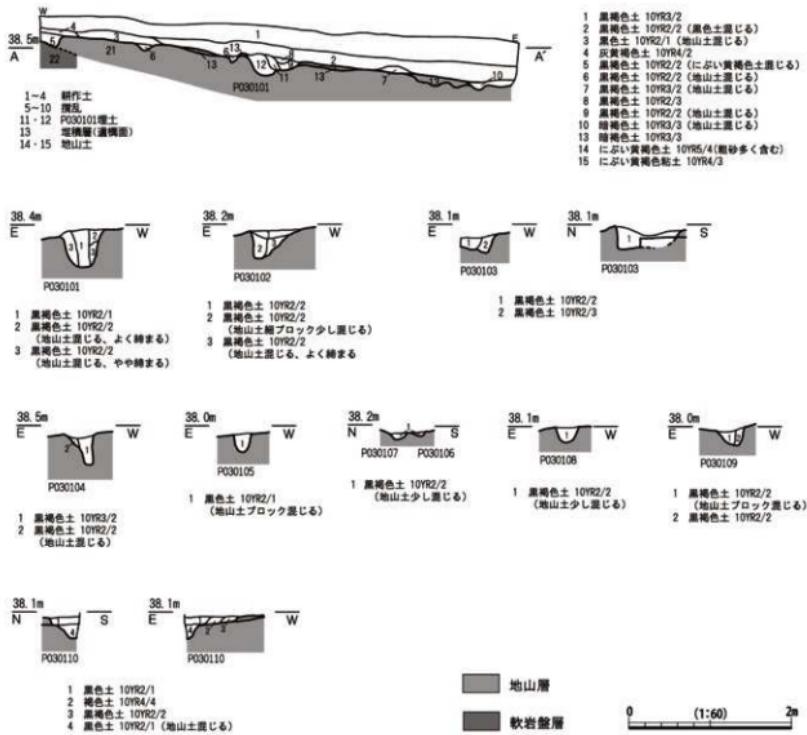
(3) 柱穴列

柱穴列1基（SA030101）を検出した。P030101～P030103の3基の柱穴が東西に並んで柱穴列を構成する。西側と南側には柱穴の延長が認められないが、調査地外を含めて掘立柱建物跡の一部を構成している可能性はある。

P030101とP030102の土層断面に柱穴の掘り方と柱当たりが認められる。SA030101の柱筋の柱間は1.5mほど、柱穴の掘り方の径は約0.5～0.7mである。底面まで深く、断面形状は尖底状をなし、柱の部分が最も深くなる。底面の標高は37.9m前後とよく揃う。



第31図 高善庵遺跡第3次調査1 トレンチ遺構平面図（縮尺1/60）



第32図 高善庵遺跡第3次調査1 トレンチ造構土層断面図(縮尺1/60)

(4) 柱穴・小穴

P030101～P030103の3基の柱穴は柱穴列SA030101を構成する。

P030101の平面形態は円形で、南北検出長0.68m、東西0.69m、深さ0.47m。断面形状は半円形。P030102の平面形態は円形で、南北0.53m、東西0.56m、深さ0.36m。断面形状は尖底状をなす。P030103の平面形態は崩れた方形で、南北0.75m、東西検出長0.63m、深さ0.23m。断面形状は船底状をなし、一部が深くなる。

それ以外の柱穴・小穴を以下に述べる。

P030104の平面形態は楕円形で、北東～南西0.50m、北西～南東0.41m、深さ0.40m。断面形状は尖底状をなす。P030105の平面形態は楕円形で、南北0.27m、東西0.19m、深さ0.24m。断面形状は半円形。P030106の平面形態は楕円形で、北東～南西0.19m、北西～南東0.25m、深さ0.05m。断面形状は弧状をなす。P030107の平面形態は楕円形で、北東～南西0.24m、北西～南東0.24m、深さ0.08m。断面形状は弧状をなす。P030108の平面形態は円形で、南北0.28m、東西0.30m、深さ0.20m。断面形状は半円形。P030109の平面形態は崩れた楕円形で、北東～南西0.22m、北西～南東0.37m、深さ0.23m。断面形状は尖底状をなす。P030110の平面形態は崩れた方形で、南北検出長0.30m、

東西検出長 0.63m、深さ 0.26m。断面形状は浅い弧状をなし、一部が深くなる。

(5) 出土遺物

第33図1は堆積層から出土した。

1は須恵器杯H蓋。口縁部は短く、口縁端部は丸く收める。



第33図 高善庵遺跡第3次調査

1トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/3）

第6項 第2・3次調査の成果と課題

(1) 古代の遺構、遺物の確認

第2次調査で井戸、土坑、溝、柱穴・小穴などの遺構を検出し、遺構内外から11～12世紀に伴うと考えられる土師器皿などの土器が多く出土した。第1次調査では遺構、遺物ともに未確認であり、標高40m以下にこれらの遺構、遺物が分布するものと考えられる。若干の須恵器片も出土し、10世紀以前まで遡る可能性はあるものの、主体を占める土師器皿のおよその年代が11～12世紀と考えられるところから〔梅沢2016〕、遺構の時期は古代でも後期から末期に求められるものと推測される。

これ以外に、第3次調査1トレンチで柱穴列1基が検出された。この帰属時期は不明であるが、検出遺構を覆う堆積層から古墳時代後期、6世紀末葉から7世紀初頭と思われる須恵器杯H蓋が1点出土している。この柱穴列が第2次調査で検出された遺構群と近い時期に伴うものであれば、集落がさらに南方に広がることとなり、また古墳時代後期に伴うものであれば、尾根の反対斜面にある興道寺塚跡との関連も考えられる。

(2) 古代以後の土地造成を確認

山裾で地形の改変を伴う大規模な土地造成が行われたことが判明した。第2次調査3トレンチ付近、山裾東側の軟岩盤層や地山層、堆積層を削平して切土造成による平坦面を造り出し、その西側の同2トレンチ付近、標高の高い側の山裾の地山層や堆積層の上にそれらの土砂を積み上げて平坦面を造り出し、2面の平場を造成している様相を確認した。ただし、第3次調査1トレンチは標高が低い側の平坦面に位置するが、堆積層の下で地山層が確認されており、軟岩盤層まで達するような削平は受けていないので、場所によって切土の多い、少ないがあるようである。

現地形に見られる標高差がある上下2面の平坦面は、第2次調査で検出された遺構の時期である古代末期以後に造成されたものと考えられる。第2次調査2トレンチで確認された盛土層の下、地山層の直上に位置する堆積層に土師器皿などが含まれており、またこの盛土層には中世以後の遺物を含んでいないので、土地造成の具体的な時期は遺跡が廃絶してからさほど時間が経過していない古代末期から中世初頭の段階であるものと考えられる。

今回の調査で古代から中世にかけての大規模な土地造成が確認されたことで、付近に瓦窯が存在しても、瓦窯本体を探索する上で大きな制約があり、今後、瓦窯を発見するにはかなりの困難が見込まれることが明らかとなった。ただし、第3次調査においても古代の平瓦を採集しており、瓦窯が既に失われているという根拠もないため、今後も継続的な発掘調査が必要である。

第5節 高善庵遺跡発掘調査の総括

高善庵遺跡では瓦窯の検出を目指して調査を進めてきたが、古代後期～末期を中心とする時期の遺構、遺物が確認された。高善庵遺跡の性格について、若干の検討を行っておきたい。

まず、遺跡の時期は10世紀以前に遡る可能性は高いが、中心の時期は11～12世紀と考えられるため、南方に所在する興道寺廃寺の廃絶が遅くとも10世紀初頭であることを考慮すると直接的な関係性は認めがたい。また、検出された遺構群が隣接の小字地名となっている高善庵と呼称された施設であるのか、判然としない。しかし、今回の調査で確認された遺構群と同時期に存在したと考えられるものとして天台宗寺院の興道寺がある。現在の大字地名の由来ともなった中世寺院で、興道寺廃寺の衰退と別の動きの中で成立したものと考えられており〔芝田 2005・2006〕、その所在は明らかになっていないが、『2016年総括報告』でも概述したように興道寺廃寺の南方が想定されている。

文永2年（1265）、「若狭国惣田数帳」（『東寺百合文書』）記載の「天台宗四王院 興道寺十二町」が興道寺という名の初出で、鎌倉期には比叡山四王院所有の興道寺の田圃が12町あったことが理解でき、以後、中世にかけて天台宗興道寺が定着していく。

一方、高善庵遺跡の北側に鎮座する日枝神社に関しては、『三方郡誌』に「興道寺に鎮座す。」とあり、『耳村誌稿』には「興道寺に鎮座す。祭神大山咋命、社殿^{南北五丈、東西三丈}、境内四百〇五坪、附属地九百七十九坪、氏子区域興道寺一円とす。」と記載がある〔美浜文化叢書刊行会2014〕。地誌には創建に関する記載はないが、祭神からして日枝神社總本社の日吉大社と比叡山との強い関係性を考えると、天台宗興道寺と日枝神社との関係性もある程度認めることができよう。

高善庵遺跡の遺構群が天台宗興道寺そのものを構成するとは考えがたいが、日枝神社と隣接して神仏習合の形態をとることや、井戸が検出されたように一定期間の居住があったこと、また出土遺物の中で土器器皿が占める割合がかなり高く、何らかの祭祀や悔過などの宗教行為があった可能性も想定されることから、中世寺院・興道寺に関係するような初期施設、あるいは山林修行に伴うような施設が存在した可能性についても考慮しておく必要がある。

第21・22図にも示したが、今回の第2・3次調査地から有害獣防止柵を挟んで西側の山間部には4面からなる平坦面が確認されている（写真3・4）。いずれも南北に細長く、最上位の平坦面は12.5m×3.6mの規模で3つの礎石が地表面に見え、上から2段の平坦面は同じく10.5m×2.2mで1つの礎石があり、南北棟の建物があったことがうかがえる。今回の調査区に見られた平坦面まで段々の地形として連続していたものか確認はないが、この山間部の平坦面が古代末期まで遡るものであれば、山間部にかけてある程度の広がりをもった宗教施設が存在したこととなる。瓦窯の確認に留まらず、高善庵遺跡と中世寺院・天台宗興道寺との関わりについても視野に、今後も継続的な発掘調査が望まれる。



写真3 高善庵遺跡の山間部に見られる平坦面



写真4 高善庵遺跡の山間部平坦面に見られる建物礎石

第4表 高善施遺跡第2・3次調查出土遺物觀察表

第3章 町内遺跡試掘調査

第1節 興道寺遺跡

第1項 遺跡の概要

興道寺遺跡（福井県遺跡番号 30073）は福井県三方郡美浜町興道寺に所在する。現在の美浜町興道寺地籍の大半を占める範囲に遺跡があり、弥生時代から中世までの複合遺跡である。遺跡は耳川下流域の左岸の低位河岸段丘に立地し、この段丘面には興道寺遺跡だけでなく、古墳時代後期の群集墳である興道寺古墳群や古代寺院遺跡である興道寺廃寺など、特に古墳時代から古代にかけての遺跡が分布する。

興道寺廃寺の北方、北西方にあたる遺跡の北縁部を中心に開発事業に伴う発掘調査、試掘調査などが継続的に行われ、6世紀後半から8世紀前半を中心とした堅穴建物跡、掘立柱建物跡などが確認されるなど、古墳時代後期から奈良時代を主体とした集落が展開していることが明らかとなっている。

広域農道を挟んだ今回の試掘調査地の南隣では美浜町教育委員会による民間企業の社屋建築に伴う発掘調査（土井ノ上1区）が実施されており、標高19.0～20.0m付近の地山面で8世紀前半を中心とした須恵器、土師器、製塩土器などとともに、堅穴建物跡4棟、掘立柱建物跡12棟が検出されている〔美浜町教育委員会 1998〕。また、調査地のすぐ南隣の広域農道の部分でも福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによる発掘調査（以下、「県調査区」という。）が実施され、A区では標高約20.3mの地山面で土坑1基、柱穴35基などが検出され、古墳時代後期から古代にかけての土器などが出土している〔福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003〕。

また、試掘調査地の東側では地山面の標高が高くなることが判明しており、例えば県調査区B区では最高位で標高21.5mであり、また興道寺廃寺の一連の発掘調査でも微高地であることが判明するなど、今回の試掘調査地の付近では深い谷状に標高が低くなることが明らかな反面、このような低地面にも遺構、遺物が展開しているという特徴がある。

第2項 試掘調査の経緯と経過

今回の試掘調査の原因となった事業は、民間企業の事務所建築工事計画である。興道寺遺跡の北縁部の遺跡境界付近にあり、調査地の住所は福井県三方郡美浜町興道寺11号1番。事業地はかつて水田であったが、一部が過去に盛土造成されている。事務所の建設はその東側に計画され、その場所は水田であることから南側で検出されている遺構、遺物が調査地まで展開している可能性が高いと考えられた。

このため、遺跡の存否、範囲、深度、性格などを確認することを目的として、事業地の東端付近に南北に長さ約15.0m、幅1.6mのトレンチ1か所（1トレンチ）と、中央付近に南北長さ2.4m、幅1.6mのトレンチ1か所（2トレンチ）を設定し、約27.8m²において試掘調査を実施した。調査日は平成30年（2018）10月23・24日である。

重機で基本的に地山層上面までの掘り下げを行い、土層断面の確認、遺物の検出を行った。遺構保護のため、今回の試掘調査では遺構の掘削は行っていない。遺構の形状、規模、埋土については、今後、記録保存のための発掘調査が行われる場合、改めて調査を行う予定である。

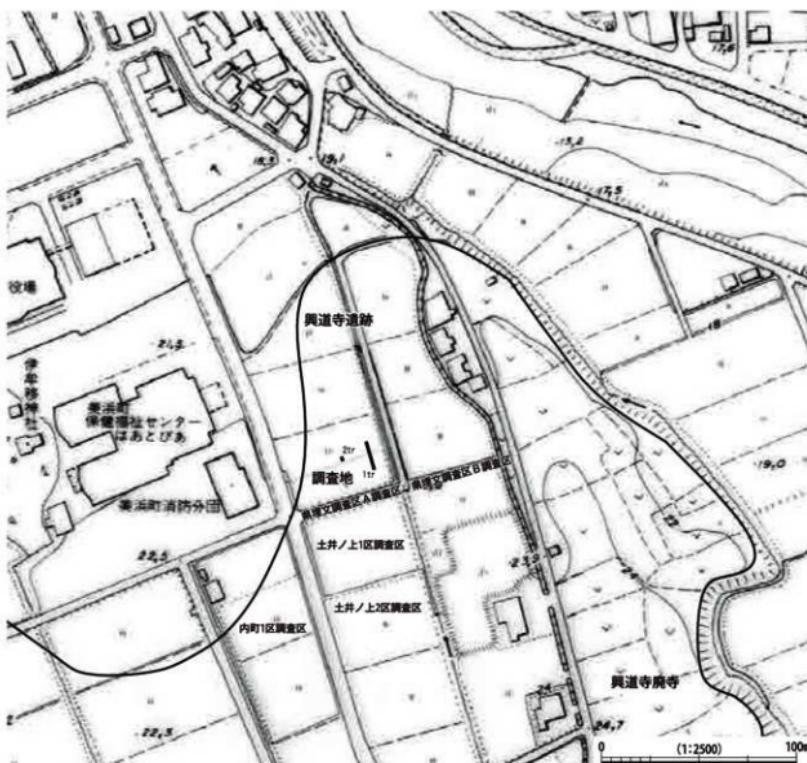
第3項 試掘調査の内容(第34・35図)

トレンチの位置は第34図、各トレンチの標準土層を第35図に示す。

1 トレンチの基本層序は、地表面から約0.4~0.55mまで水田の耕作土にあたる灰褐色土があり、その下に層厚約0.25~0.4m、摩耗した土器片や粘土塊、樹木の枝などをわずかに含み、周辺から流れ込んだと考えられる黒色土が堆積する。1トレンチ南端で地表面から0.7m下、北端で0.8m下に地山層の黄褐色土の上面に至る。地山面は北に向けてわずかに標高が低くなる。地山面の最高位で標高20.2m、最低位で標高20.0mであり、試掘調査地の南隣、県調査区A区と一体的な地山面の傾斜が認められる。

地山層の上面で堅穴建物跡とみられる遺構1基、土坑8基、柱穴15基などを検出した。黒色土から破片で須恵器杯A1点、土師器甕3点、平高台の土師器皿1点、製塙土器1点、土塊10数点が出土した。

2 トレンチの基本層序は、現在の地表面から約0.5mまで同様に耕作土の灰褐色土があり、その下に層厚約0.4mの黒色土が堆積する。地表面から0.9m下、標高20.0mに地山層の黄褐色土の上面に

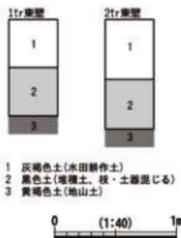


第34図 興道寺遺跡試掘調査位置図(縮尺1/2,500)

至る。溝1条、小穴1基を検出し、堆積土の黒色土から土師器壺8点が破片で出土した。

第4項 試掘調査の成果

調査地の南側で確認されている律令期の遺構、遺物が今回の試掘調査地まで広がるものと考えられ、周辺に遺構、遺物が良好に残っている可能性は高い。調査地は遺跡の北縁部に位置するが、遺跡はさらに北方に展開する可能性もある。周辺の旧地形は浅い谷状をなすが、古墳時代後期から古代にかけての集落が展開しているというこれまでの周辺での調査成果を改めて確認することができた。



第35図 興道寺遺跡試掘調査土層断面模式図（縮尺1/40）

第2節 藤ノ木遺跡

第1項 遺跡の概要

(1) 遺跡の概要

藤ノ木遺跡（福井県遺跡番号 30077）は福井県三方郡美浜町郷市に所在する。遺跡は耳川下流域の左岸の低位河岸段丘の末端付近に位置し、国道27号を挟んでさらに北側には沖積地が広がっている。藤ノ木遺跡の南方、低位河岸段丘に興道寺廃寺や興道寺遺跡、興道寺古墳群などの遺跡が所在しているのは前述のとおりであり、藤ノ木遺跡の北東近くには獅子塚古墳が所在する。

藤ノ木遺跡は遺物散布地として『福井県遺跡地図』に収録されているものの、遺跡の様相はあまり明らかではなかった。しかし、美浜町郷市の集落と遺跡の範囲がほぼ重複していることもあって、近年、個人住宅や民間企業の建物建築などに伴う試掘調査や立会調査が継続的に行われており、古墳時代後期から平安時代にかけての遺構や遺物が断片的に確認されている。

今回の試掘調査地の付近でも複数件の試掘調査が実施されており、国道27号や宅地、店舗などがある造成面から0.6~1.0mほど下に褐色系の粘土、砂礫土からなる地山層が分布し、場所によっては散在的に遺構、遺物が確認されていた。

(2) 2017年試掘調査の内容

今回の事業計画地の北寄りでは、公共事業の計画に伴う試掘調査を実施している（以下、「2017年試掘調査」という）。今回の試掘調査地と隣接しており、以下にその内容を概述しておく。

いずれも幅1.0m、南北方向に1か所、東西方向に3か所、計4か所のトレンチを設定し、平成29年(2017)5月16~18日に約130m²において試掘調査を実施した。1トレンチは約22.0m、2トレンチは約35.0m、3トレンチは約37.0m、4トレンチは約36.0m。地山層の上面まで重機で掘り下げを行い、土層断面の確認、遺構や遺物の検出を行った。

調査地の基本層序は、水田耕作土にあたる灰褐色土（層厚0.2~0.4m、表土）の下に遺物を含むする黒褐色土（層厚0.2~0.4m、堆積土）が分布する。1トレンチの南側と2・3トレンチの中央付近にはこの黒褐色土が認められず、またその付近の地山層は砂礫土からなり、遺構の分布密度も低く、

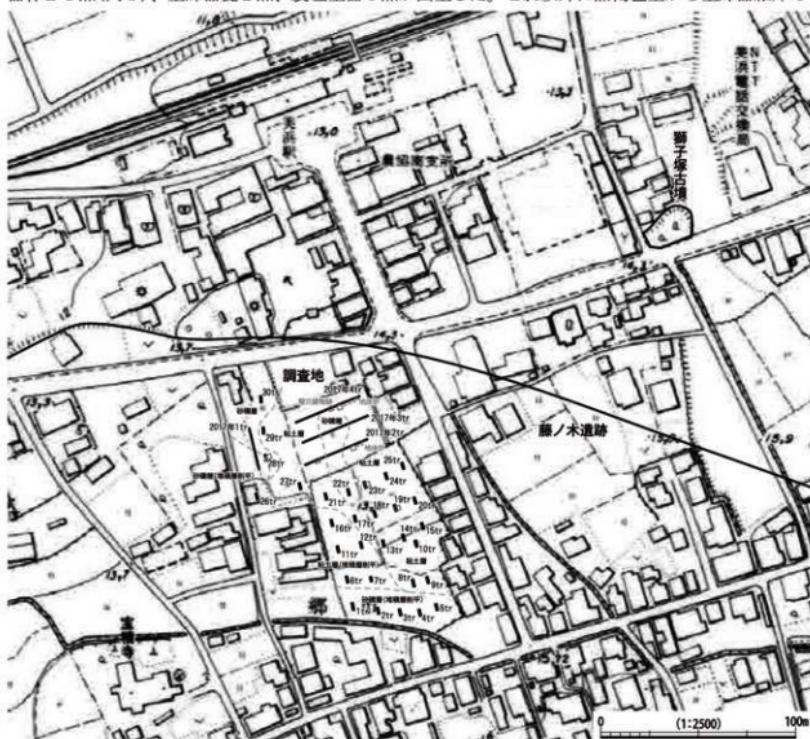
地山層そのものが削平を受けており、旧地形として南方からこの地点まで舌状に微高地が延びていたものと考えられた。

地表面下 0.2~0.7m で褐色・黄褐色・暗黄褐色系の粘土、もしくは砂礫土の層からなる地山面に至り、1 トレンチの北側半分では地山面の標高が他より高いので、全体的に西側は微高地となる。一方で 1 トレンチと 2~4 トレンチの西端までの間、2~4 トレンチの東側では地山面の標高が低く、この上層に黒褐色土の堆積土がある。

遺構はいずれのトレンチでも地山層の上面で検出され、特に地山層が粘土であるところには多くの遺構が認められ、遺構の切り合いが多い。調査では遺構の掘削は行っていない。

1 トレンチで土坑 5 基、小穴 15 基を検出し、地山面から破片で須恵器杯 B 1 点、土師器皿 5 点が出土した。これ以外に土師器細片 3 点が出土している。

2 トレンチで堅穴建物跡 2 棟、鍛冶炉（地床炉）を含む土坑 16 基、小穴 24 基を検出した。いずれも破片で、土坑 10 の検出面から須恵器甕 1 点（第 37 図 1）、土坑 13 の検出面から須恵器杯類 1 点、土師器杯 1 点、土師器甕 1 点、鉄滓 10 点、トレンチ東端の地床炉付近から土師器甕 1 点、砥石 1 点（同 4）、黒褐色土層から須恵器杯類 1 点、土師器椀 4 点（同 2）、製塩土器 4 点、土壁 1 点、排土から須恵器杯 B 1 点（同 3）、土師器甕 2 点、製塩土器 6 点が出土した。これ以外に黒褐色土から土師器細片 4



点、排土から土師器細片4点、陶磁器細片2点が出土している。

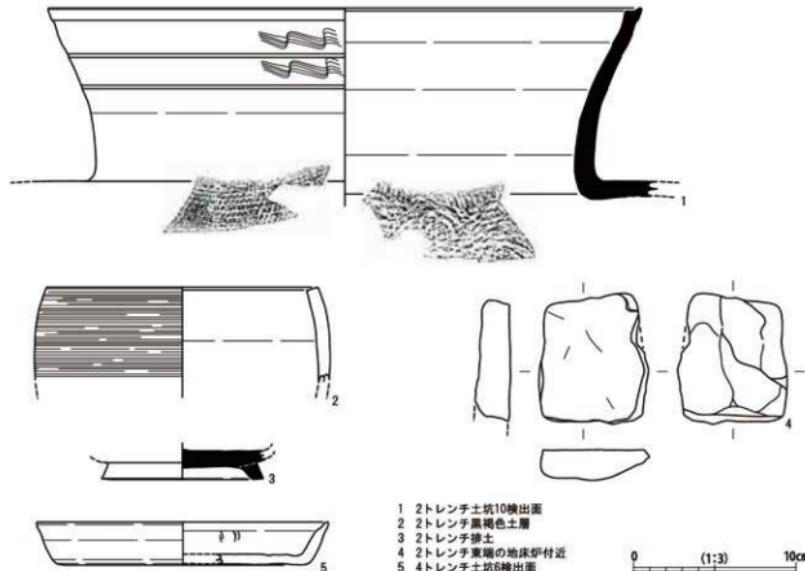
3トレンチで土坑5基、小穴24基を検出し、土師器甕の破片4点・土師器の細片2点、製塙土器1点が出土した。

4トレンチで堅穴建物跡2棟、土坑7基、小穴22基を検出し、いずれも破片で堅穴建物跡1の検出面から土師器甕1点、擦り痕の残る炭化した土器片1点、土坑1検出面から赤彩の土師器杯B蓋1点、土師器甕1点、土坑6から赤彩の土師器皿1点(同5)が出土した。地山面から土師器細片2点、砥石片1点、鉄滓1点が出土している。

第37図1は2トレンチ土坑10検出面、2は2トレンチ黒褐色土層、3は2トレンチ排土、4は2トレンチ東端の地床炉付近、5は4トレンチ土坑6検出面から出土した。

1は須恵器甕の口縁部。外面に緩やかに立ち上がり、口縁端部に凹面をもつ。口縁部外面の上部に3つの沈線と2条の波状文を、胴部外面に平行叩きとカキメ調整を施す。胴部内面に当て具痕を残す。2は土師器椀。口縁部は内湾し、口縁端部は面取りする。口縁部の外面はカキメを施し、内面は強く横ナデする。3は須恵器杯Bの底部。高台はやや高く、外に張る。底部外面に自然軸が付着する。4は砥石片。自然礫を半裁し、裁断面を叩打によって平滑にして砥面にしたものと思われる。石種は砂岩。5は土師器皿。復元口径は17.4cm。全体的に赤彩を施す。磨滅が著しいが、口縁部の内面に一段の螺旋暗文がわずかに残る。口縁部は厚く、口縁端部は丸く收める。口縁部の内外面に横ナデを施し、底部外面は指頭圧痕を残す。

一定程度の期間に渡って営まれた鍛冶工房を付属する集落の一部と考えられ、特に奈良時代の土器片が黒褐色土や地山面の直上から出土し、集落の中心の時期はこの頃と考えられた。



第37図 藤ノ木遺跡 2017年試掘調査出土遺物実測図 (縮尺1/3)

第2項 試掘調査の経緯と経過

今回の試掘調査の原因となった事業は、民間の施設整備計画に伴うものである。藤ノ木遺跡の北縁部の遺跡境界付近にあり、調査地の住所は福井県三方郡美浜町郷市 14 号 9・10・11・12-1・12-3 番、同 19 号 25・26・28-1・29-1・29-6・30 番。計画地は水田である。

2017 年試掘調査において事業予定地の一部には埋蔵文化財が存在することは判明していたが、一定程度の規模の建物、工作物などの建設を希望する一方で、事業計画そのものが試掘調査の時点ではほとんど決定していなかった。しかし、試掘調査の結果に基づいて盛土や建物等の設計を行うことで遺跡に影響がないように保存を図る旨の方針が示されたため、遺跡の存否、範囲、深度、性格などを確認することを目的として、計画地の全体に南北に長さ約 5.0m、幅 1.6m の計 30 か所のトレンチ（1～30 トレンチ）となるべく等間隔に設定し、約 240.0 m²において試掘調査を実施した。調査日は令和元年(2019)11 月 21 日、22 日、24 日である。

重機で基本的に地山層上面までの掘り下げを行い、土層断面の確認、遺物の検出を行った。遺構保護のため、今回の試掘調査では遺構の掘削は行っていない。遺構の形状、規模、埋土については、今後、記録保存のための発掘調査が行われる場合、改めて調査を行う予定である。

第3項 試掘調査の内容(第 36・38・39 図)

トレンチの位置は第 36 図、各トレンチの標準土層を第 38 図に示す。

試掘調査地の基本層序は、地表面から約 0.1～0.3m まで水田の耕作土にあたる灰褐色土があり、その下に層厚 0.2m 程度の黒褐色土、一部は灰褐色土・暗褐色土が堆積する。8・9・13～15・17～30 トレンチにおいてこの堆積層が面的に分布する。堆積土には若干の土器片が含まれるが、9 トレンチの灰褐色土には多くの土器が混入していた。試掘調査地の中央付近には表土と堆積層の間に、水田造成時の造成土にあたる灰黄褐色土（層厚 0.05～0.2m 程度）が分布している。

水田耕作土の上面から下に 0.15～0.75m の深さで地山面に至る。調査地の南側では地山面の標高が高く、表土直下で地山面に至ることに対して、調査地の北側では地山面の標高が低いため、表土下に造成土や堆積土が分布する傾向が強い。地山層は黄褐色土、褐色土、暗黄褐色土からなり、粘土質の土壤が多くを占め、調査区の南縁では砂礫層が中心となる。元々の表層地質として砂礫層の上に粘土層が覆って地山層を形成し、微起伏があった旧地形であったものと考えられるが、22・28・30 トレンチのように砂礫層の上面に堆積層が分布していることを考えると、ある程度地山層を削平した上で遺跡が形成されたものと想定される。

ただし、2017 年試掘調査では 1 トレンチの南側と 2・3 トレンチの中央付近で砂礫土の地山層が検出されており、堆積層の黒褐色土が見られず、遺構の分布密度も低いので、この部分では後世に地山層そのものが削平を受けているものと考えられる。

地山層の上面で竪穴建物跡 3 基、土坑 26 基、柱穴 20 基を検出した。検出遺構、出土遺物は以下のとおりである。遺構埋土を掘削していないので、遺物の出土量は多くない。一部の堆積層などから 8～10 世紀に伴う須恵器、土師器などが出土しており、特に 8 世紀から 9 世紀前半のものが多い傾向がある。

1 トレンチは溝または土坑 2 基、小穴 1 基を検出し、表土から赤彩の土師器高杯片 1 点(第 39 図 1)が出土。2 トレンチは小穴 1 基を検出し、表土から煉瓦片 1 点が出土。3 トレンチ表土から現代の瓦片 1 点が出土。4 トレンチ表土から陶磁器細片 1 点が出土。5 トレンチは小穴 1 基を検出。6 トレンチは土坑 4 基、小穴 1 基を検出し、黄褐色土層から土師器壺片 1 点、赤彩の土師器細片 1 点が出土。

7 トレンチは土坑3基を検出、表土から須恵器甕片1点が出土。8 トレンチ表土から破片で須恵器杯B蓋1点、土師器甕1点、陶器擂鉢1点、陶磁器細片7点が、黒褐色土層から土師器皿片1点(同2)が出土。

9 トレンチは土坑1基を検出し、表土から現代の瓦片3点、陶磁器細片1点が出土した。灰褐色土層からいずれも破片で、須恵器杯B蓋3点(同3~5)、杯A3点・杯B5点(同6~8)・杯Aまたは杯Bの口縁部4点・皿4点(同9)・甕4点(同10・11)・壺類4点、赤彩の土師器杯B蓋1点(同12)・杯A4点・杯B3点・皿1点、土師器甕9点、糸切り痕を残す土師器皿2点(同13)、近世の土師器皿1点、製塙土器6点、陶器甕1点・擂鉢2点、砥石4点(同14~16)が出土し、須恵器の細片10点、土師器の細片23点も出土している。

10 トレンチ表土から須恵器甕片1点が出土。11 トレンチは土坑1基を検出。12 トレンチ表土から須恵器細片1点が出土。13 トレンチは土坑2基、小穴1基を検出。14 トレンチは土坑1基、小穴4基を検出し、表土から土師器細片2点が、黒褐色土層から土師器細片1点が出土。15 トレンチは小穴1基、16 トレンチは土坑1基、17 トレンチは土坑2基を検出。17 トレンチは黒褐色土層から須恵器杯B片1点(同17)、土師器甕片1点が出土。18 トレンチは土坑1基、小穴1基を検出し、黒褐色土層から須恵器細片1点が出土。19 トレンチは竪穴建物跡1基、土坑1基を検出し、黒褐色土層から須恵器杯A片1点、土師器甕片2点が出土。20 トレンチは土坑2基、小穴1基を検出し、黒褐色土層から須恵器壺の口縁部片1点、鉄滓3点が出土。

21 トレンチは土坑2基、小穴1基を検出し、表土から須恵器細片3点、赤彩の土師器細片2点が、黒褐色土層から須恵器杯類の破片2点・甕4点(同18)、須恵器の細片2点、赤彩の土師器杯B蓋片1点(同19)・杯A片1点(同20)・椀片1点(同21)・器種不明のもの2点、土師器甕片13点、土師器の細片6点、製塙土器片8点、鉄滓1点、輪羽口の破片1点(同22)が出土した。

22 トレンチ表土から陶器細片1点が出土。23 トレンチは竪穴建物跡1基、小穴1基を検出し、黒褐色土層から土師器甕片2点・土師器の細片2点、製塙土器片3点、輪羽口の破片1点が出土。24 トレンチは小穴6基を検出し、黒褐色土層から須恵器甕片1点が出土。26 トレンチ表土から須恵器細片1点、土師器細片3点、陶器細片2点が出土。27 トレンチは土坑1基を検出し、表土から須恵器細片1点が出土。

28 トレンチは竪穴建物跡1基、土坑1基を検出し、暗褐色土層から破片で須恵器杯B蓋1点、土師器甕9点、赤彩の土師器皿2点、近世の土師器皿3点、製塙土器1点、土壁3点が出土。29 トレンチ表土から須恵器甕片1点・須恵器の細片1点、土師器の細片9点が出土。30 トレンチは土坑1基を検出し、黒褐色土層から土師器甕片1点が出土。

第39図1は1 トレンチ表土、2は8 トレンチ黒褐色土層、3~16は9 トレンチ灰褐色土層、17は17 トレンチ黒褐色土層、18~22は21 トレンチ黒褐色土層から出土。

1は土師器高杯の脚部、脚部はハの字状に開き、全体に赤彩を施す。

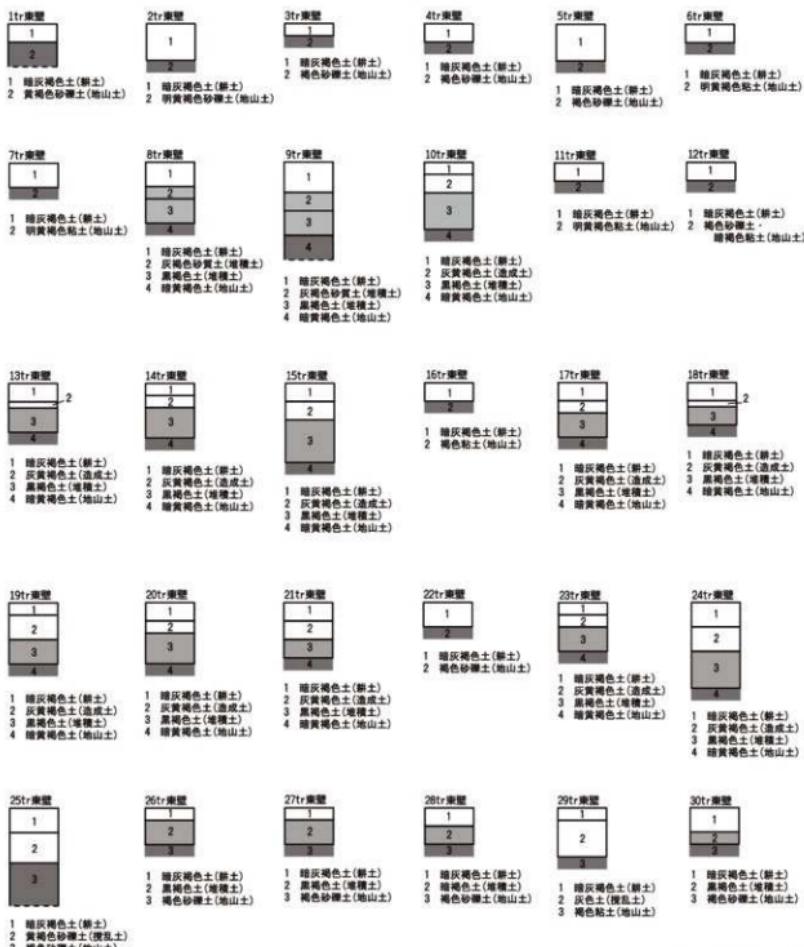
2は土師器皿の底部。口縁部は外方に広がり、底面は回転糸切り痕を残す。

3~5は須恵器杯B蓋。3の復元口径14.4cm。天井部は平らで、口縁部は鈍く折り返す。4の復元口径14.2cm。天井部は低く、笠状を呈し、口縁部は短く折り返す。いびつなつまみをもつ。5の復元口径13.5cm。天井部は平らで、口縁部を鋭く折り返す。扁平なつまみをもつ。6~8は須恵器杯B。6は高台がわずかに張り、7は高台が外に張り、内側で接地する。8は小型品で、復元口径は10.7cm。口縁部は外上方にまっすぐ立ち上がり、口縁端部は鋭く収める。高台はやや厚く、鈍い。9は須恵器皿。復元口径16.2cm。口縁部は薄く、短く立ち上がる。10・11は須恵器甕の胴部。10は底部外

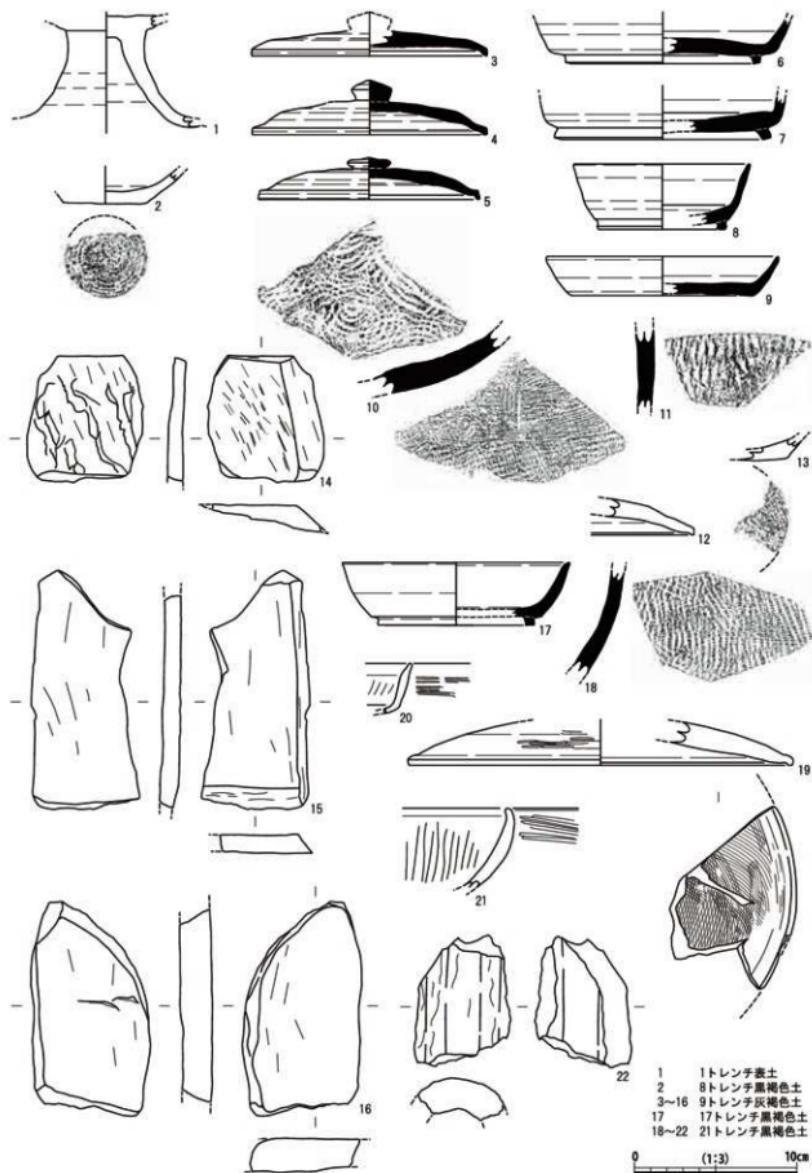
面を平行叩きの後、カキメを施し、内面は当て具痕が残る。11の外は平行叩きを施すが、叩き目が交差し、格子目状をなす。内面は当て具痕をナデ消す。

12は土師器杯B蓋。口縁部は厚く、下方に鈍く折り返す。内外面に赤彩を施し、天井部外面にヘラミガキの痕跡をわずかに残す。13は土師器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。

14~16は砥石。いずれも中砥と推定される。14は短辺7.0cm、厚さ1.4cm。横断面が薄い三角形の形状をなし、広い2面と側面1面と上端面を砥面として用いる。1面には溝状の擦痕が多く残り、



第38図 藤ノ木遺跡試掘調査土層断面模式図(縮尺1/40)



第39図 藤ノ木遺跡試掘調査出土遺物実測図（縮尺1/3）

裏側の1面は粗い叩打である程度平滑にする。側面と上端面は平坦で、擦痕がある。石種はチャート。15は厚さ1.1cm。残存する3面が砥面で、側面はやや粗いが叩打で整える。石種は花崗岩。16は厚さ1.7cm。広い2面が砥面で、うち1面に平坦な擦痕が残る。石種は砂岩。

17は須恵器杯B、復元口径は13.8cm、口縁部は厚く、口縁端部は鋭く取る。高台はわずかに外に張る。

18は須恵器甕の胴部。外面は平行叩きを施し、内面は当て具痕をナデ消す。19は土師器杯B蓋。復元口径23.5cm。器壁は厚く、口縁部を鈍く折り返す。内外面に赤彩を施し、天井部外面にヘラミガキの痕跡を残し、内面に不定方向の細かい刷毛目を施す。20は土師器杯A。口縁部は厚く、口縁端部を丸く取る。内外面に赤彩を施し、口縁部外面にヘラミガキの痕跡を残し、内面に一段の放射暗文を施す。21は土師器碗。口縁部が強く内湾し、口縁端部は内側に折り返す。内外面に赤彩を施し、口縁部外面はヘラミガキの痕跡を顯著に残し、内面は一段の放射暗文を施す。22は輪羽口。大型で器壁は厚く、長石、石英を多く含む。

第4項 試掘調査の成果

多くのトレンチで遺構が検出され、試掘調査地の全面に遺構が分布していることが判明した。遺構と微地形の関係を見ると、地山層の構成（砂礫層、粘土層など）、堆積層のあり方や遺構の有無などを勘案すれば、調査地の南端と、西端の一部、中央付近の南北方向の島状の部分に微高地があり、遺跡が廃絶した後に地山面が削平されて地山面が平坦化したものと考えられる。元々は南西側から緩やかに傾斜する微地形があったものと考えられる。

今回の調査地は、堅穴建物跡4棟、土坑33基、小穴85基が検出され、鍛冶を伴う集落が存在すると想定されていた2017年試掘調査の南側と西側にあたり、今回の試掘調査においても堅穴建物跡2棟が検出され、8世紀から9世紀前半を中心とした時期の須恵器、土師器などが出土した。藤ノ木遺跡が確認された堅穴建物跡6棟はいずれも平面形が方形で、遺跡南方の興道寺遺跡などで検出されている堅穴建物跡と平面形態では共通するが、藤ノ木遺跡では規模が一辺3m程度と小規模であり、2017年試掘調査で確認されたように堅穴建物跡付近に地床炉と考えられる鍛冶炉が存在することは、当地における鍛冶関連施設のあり方の一つを示している可能性がある。また、今回の試掘調査のうち、特に9トレンチから砥石、20トレンチから鉄滓、21・23トレンチから輪羽口、28トレンチから炉壁と考えられる土壁が出土するなど、調査地周辺に鍛錬鍛冶に関連する遺構が広く分布している可能性が高まった。

9トレンチの堆積層を中心に土師器食膳具が一定量出土したことでも注目される。若狭地方では律令期の土師器食膳具が出土する遺跡はあまり多くなく、藤ノ木遺跡の近郊に官衙関連施設が存在する可能性も想定される。

第3節 中長浜遺跡

第1項 遺跡の概要

中長浜遺跡（福井県遺跡番号30006）は福井県三方郡美浜町丹生に所在する。敦賀半島西岸の先端付近、関西電力株式会社美浜原子力発電所や美浜町丹生集落がある小さな湾の東側に遺跡があり、この小湾には西から東奥浦遺跡、田ノ口遺跡、長浜畠遺跡、中長浜遺跡といったようにいくつかの土器



第 40 図 中長浜遺跡試掘調査位置図（縮尺 1/2,500）

製塩遺跡が連なるように分布し、その背後の山麓にいくつかの古墳群が所在している。

中長浜遺跡は、これまで丹生小学校A・B遺跡と周知されてきたが、平成12年度(2000)の「福井県遺跡地図」改訂時に小字地名に基づいて中長浜遺跡と改称された。美浜町丹生の出身である古川登氏が少年期に採集したという丹生小学校A・B遺跡の出土品が福井県立歴史博物館に所蔵されているが(第41図)、多くが製塩土器片で、その年代観から7~8世紀に盛行した土器製塩遺跡であるものと推定される[松葉2009]。昭和39年(1964)発行の『美浜町文化財調査台帳』には丹生小学校の校庭から多くの土器片が出土した旨の記載があり、当時、古川氏がこれらを採集し、また『美浜町遺跡台帳』にその旨が記載されたことがうかがえる。

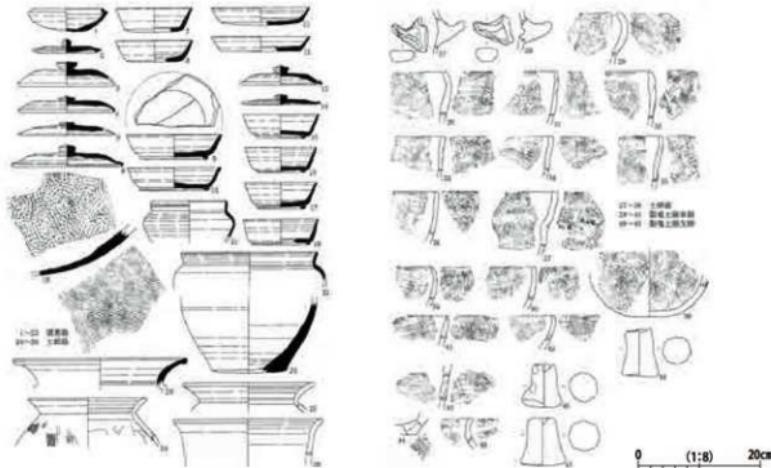
中長浜遺跡における既往の調査として、美浜町エネルギー環境教育体験施設きいばす建設工事に伴って旧丹生小学校の校庭部分で6か所の試掘調査を平成27年度(2015)に実施しており、近代に伴うと考えられる塩田施設の一部を検出しているが、古代まで遡る製塩遺構は確認されていない。

第2項 試掘調査の経緯と経過

今回の試掘調査の原因となった事業は、民間企業の駐車場整備計画である。中長浜遺跡の北縁部の遺跡境界付近にあり、調査地の住所は福井県三方郡美浜町丹生24号48番、49番1・2、50番、51番、56番。

調査地はかつて水田であったところが近年に盛土造成され、西側に隣接する県道とほぼ同標高の造成地となり、試掘調査時には雑地化していた。しかし、かつて水田が広がっていた頃には製塩土器片が採集されていたようであり、この造成地を未舗装の駐車場として使用するにあたり、地中の埋蔵文化財の状況が不明であったことから埋蔵文化財に対する影響がないことを確認するために、遺跡の存否、範囲、深度、性格などを確認することを目的として、東西約2.0m、幅1.5mのトレッチ10か所を設定し、約30m²において試掘調査を実施した。調査日は平成30年(2018)3月15・16日である。

重機で基本的に地山層上面までの掘り下げを行い、土層断面の確認、遺物の検出を行ったが、掘削

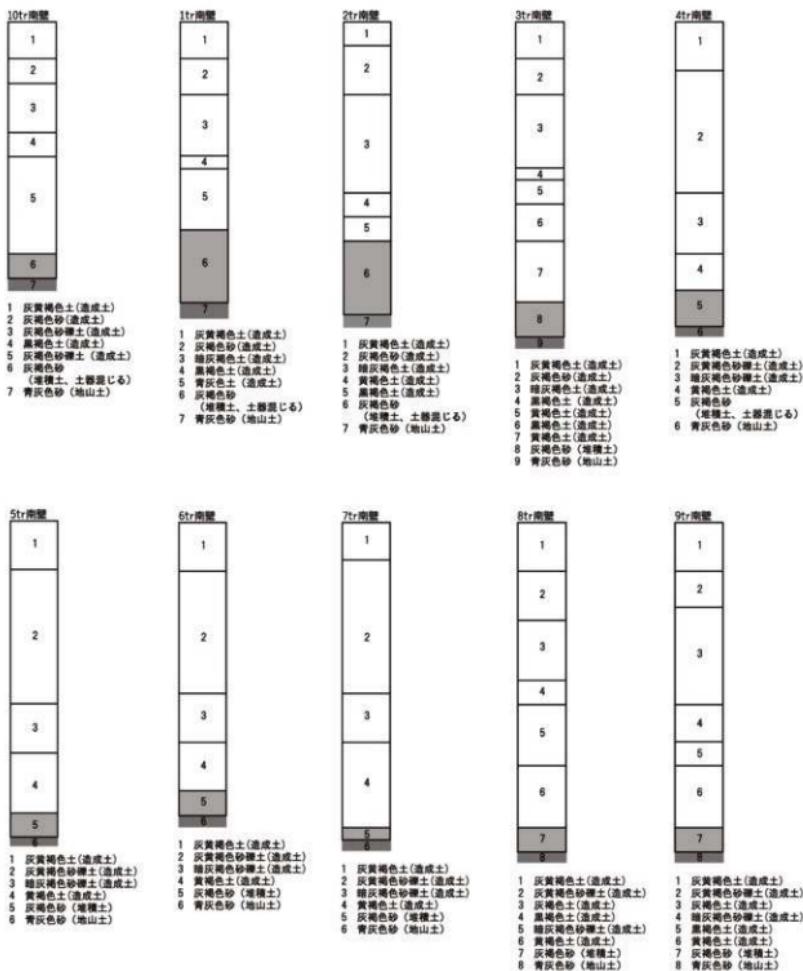


第41図 中長浜遺跡(丹生小学校遺跡A地区)採集遺物実測図(縮尺1/8)

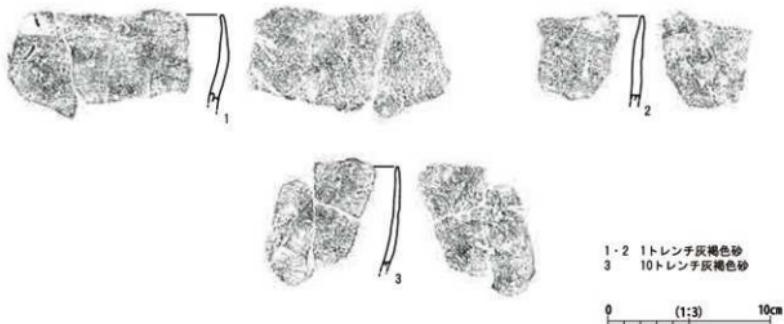
深が大きかったため、安全確保のためトレンチ壁面や地山面の人力による精査は行っていない。また、出土遺物の採集も重機で掘削した土の中から人の手によって行っている。

第3項 試掘調査の内容(第40・42・43図)

トレンチの位置は第40図、各トレンチの標準土層を第42図に示す。



第42図 中長浜遺跡試掘調査土層断面模式図(縮尺1/40)



第43図 中長浜遺跡試掘調査出土遺物実測図（縮尺1/3）

調査地の基本層序は、東側の山裾寄りでは現在の地表面から約2.0m前後の深さまで、また西側の海岸寄りではそれ以上の深さまで造成土が堆積しており、その下に灰褐色砂、そして最下層には青灰色砂の層が全てのトレンチに分布している。

1・2・4・10トレンチでは、灰褐色砂層から製塩土器片が出土した。1トレンチが174点(第43図1・2)、2トレンチが8点、4トレンチが5点、10トレンチが160点(同3)と、特に1・10トレンチからの出土が多い。10トレンチでは土器師甕片2点が出土している。

第43図の1～3の製塩土器は器壁が5～8mm程度と薄く、口縁部は上方に鋭く求めている。口縁端部から体部にかけて外面は整っておらず、指頭圧痕をよく残しているなど、図化していないものも含めてよく似た整形である。総じて丸底の深楕円形をなすものと考えられ、歪みがあるものの1の製塩土器の口径は20～25cm程度に復元できる。当地の製塩土器編年で言えば浜綱II B式の中でも古相のものに該当する。

いずれのトレンチでも青灰色砂層の上面から湧水したが、調査地西側の県道の海拔が2.0m前後であるので、いずれのトレンチにおいても海拔0m以下まで達したものと考えられる。最下層の青灰色砂は、かつての汀線を構成する砂層であるものと考えられ、製塩土器が出土した特に南東側に分布する灰褐色土層は堆積層にあたり、さらに東側の山寄りの山麓に集落あるいは土器製塩施設があり、低地に向かって製塩土器の流れ込みがあったものと考えられる。

青灰色砂層の上面を検出した段階で遺構の存否を確認したが、石敷炉などの製塩遺構は確認されていない。

第4項 試掘調査の成果

調査地は全体的に古代の汀線にあたると考えられ、特に調査地の南東寄りの堆積層から製塩土器片が多く出土したことを考えると、遺跡の中心はさらに東側の山寄りの山麓に所在するものと考えられる。古川登氏が発見した丹生小学校A・B遺跡は旧丹生小学校の校庭グラウンドの東側の山麓に所在していることから考えると、周辺の土器製塩遺跡は山麓を拠点に製塩活動に従事していたことが特徴であるものと考えられる。

第4節 丹生砦跡

第1項 遺跡の概要

丹生砦跡（福井県遺跡番号 30003）は福井県三方郡美浜町丹生に所在する。敦賀半島西岸の先端付近にある小湾の北側の山麓から山裾にかけて遺跡があり、この小湾を望む支尾根と谷筋に遺跡が立地する。遺跡周辺では段地形が確認されており、植林に伴う可能性もあるものの砦跡として周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

今回の調査地の近くの尾根先端には、方形区画をもつ台場状、見張り台のような構造が存在する。また、現代の石垣などが点在しており、美浜原子力発電所建設前後の時期に急傾斜崩落の対策として法面保護の措置が取られ、一定程度の土地改変がなされているものと考えられる。

第2項 試掘調査の経緯と経過

今回の試掘調査の原因となった事業は、民間企業の土地造成計画である。丹生砦跡の尾根から谷筋にかけての広範囲が事業地となっており、一部は公園として整備されている。調査地の住所は福井県三方郡美浜町丹生 65 号長尾山 4-5・4-17、同 66 号川坂山 5-3。



第44図 丹生砦跡試掘調査位置図（縮尺1/2,500）

今回の土地造成は、かつての美浜原子力発電所3号機建設時に山裾や谷筋などで盛土された範囲を中心として、さらに広範囲にわたって恒常的な盛土を計画したことによる。盛土の範囲は以前と同様に山裾や谷部が中心であり、遺跡名称となっている皆跡が尾根筋に分布すると想定すれば、埋蔵文化財に対する直接的な影響はさほど高くないと考えられる一方で、近年、土器製塙遺跡が海浜部のみでなく、背後の山麓まで展開している浦入遺跡などのような発掘事例も見受けられ、調査地付近でかつて大幅な盛土造成が行われているにせよ、今回の事業計画地に土器製塙遺跡の遺構、遺物が及んでいる可能性は否定できない状況にあった。

のことから埋蔵文化財に対する影響がないことを確認するために、既に盛土された範囲外の山裾、谷部において遺跡の存否、範囲、深度、性格などを確認することを目的として、幅1.0m、斜面に沿って細長いトレンチ8か所を設定し、約28.74m²において試掘調査を実施した。各トレンチの長さは、1トレンチ3.0m、2トレンチ4.35m、3トレンチ2.8m、4トレンチ3.5m、5トレンチ4.0m、6トレンチ3.0m、7トレンチ4.6m、8トレンチ3.5m。調査日は平成29年(2017)8月9・10・16日である。

調査地に重機の搬入は困難であることから基本的には人力で地山層(岩盤)の上面まで表土を掘り下げ、堆積土層の観察、遺構や遺物の検出を行った。

第3項 試掘調査の内容

トレンチの位置は第44図に示す。

調査地の基本層序は、いずれのトレンチにおいても数cmの腐葉土の下、表層に暗黄褐色土が5~10cmほど堆積し、この下に地山土にあたる黄褐色土~淡黄褐色土があり、3・5・6・8トレンチでは地山土が粗砂であり、5・8トレンチでは部分的に軟岩盤層が露頭していた。

地山面は現在の地形に沿って傾斜しており、人為的な削平、造営痕跡は認められなかった。また、遺構、遺物ともに確認されなかった。

第5表 町内遺跡試掘調査出土遺物観察表

【引用・参考文献】

- 網谷克彦「松原遺跡の調査」『教賀論叢 教賀女子短期大学紀要』第10号 1995 教賀女子短期大学
網谷克彦「福井県美浜町松原遺跡の土製模造品 一古墳時代後期の地域首長祭祀の一様相」『教賀論叢』第23号 2009 教賀短期大学
入江文敏「興道寺窯跡・獅子塚古墳」『福井県史』資料編13 考古 1986 福井県
入江文敏「第一部 考古編 第四章 美浜の古墳時代」『わかさ美浜町誌』第六巻 振る・使う 2009 美浜町
梅澤あゆみ「平安時代後期の越前国における土師器の編年的考察」『越前町織田文化歴史館研究紀要』第1集 2016 越前町
教育委員会
門井直哉「興道寺廃寺から見た交通路」『美浜町歴史シンポジウム記録集5 ここまで分かった! 興道寺廃寺 ～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』 美浜町教育委員会編 2011
門井直哉「若狭周辺における交通路の変遷」『美浜町歴史シンポジウム記録集8 古代若狭の交通、往来、地域社会』 美浜町
教育委員会編 2014
小宮輝之「哺乳類の足型・足跡ハンドブック」2013 文一総合出版
芝田寿朗「序章 わかさ美浜の寺社の変遷 第二節 美浜の古代寺院と寺社の記録 一 美浜町の古代文化 二 美浜町の古代郷と式内社」『わかさ美浜町誌』第三巻 振る・描く 2005 美浜町
芝田寿朗「興道寺廃寺その後」『美浜町歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
高橋美久二「弥美駅家と古代の道」『平成12年度生涯学習講座 ふるさとむかしよもやま話レジュメ』 2000 美浜町教育委員会
田中完一・大森宏「二 各説 (六) 三方郡」『福井県史』資料編16 下 条里復元図 1992 福井県
田中完一「第四章 律令制下の若狭 第四節 開発と土地管理 四 嶺南地方の条里」『福井県史』通史編1 原始・古代
1992 福井県
独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター「地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 西津地域の地質」 2002
初村武寛・福山博章「資料二 獅子塚古墳出土の金属製品」『わかさ美浜町誌』第六巻 振る・使う 2009 美浜町
菱田哲郎「興道寺廃寺から見た寺院経営」『美浜町歴史シンポジウム記録集5 ここまで分かった! 興道寺廃寺 ～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』 美浜町教育委員会編 2011
廣嶋一良「72 寄戸遺跡」『福井県史』資料編13 考古 1986 福井県
福井県教育委員会「重要遺跡緊急確認調査報告」(I) 1978
福井県教育委員会「重要遺跡緊急確認調査報告」(II) 1978
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター「興道寺遺跡 一県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う調査」 2003
福井県埋蔵文化財調査センター「南伊夜山鋼隕出土地」 2005
福井県立若狭歴史民俗資料館「塙 一生産の歴史三千年」 1989
北陸古瓦研究会「北陸の古代寺院 その源流と古瓦」 1987
真柄甚松「第4章 北陸道 第2節 若狭国」『日本古代の交通路』II 1978 藤岡謙二編 大明堂
松葉竜司「第一部 考古編 第五章 美浜の古代社会に生きた人々」『わかさ美浜町誌』第六巻 振る・使う 2009 美浜町
松葉竜司「若狭国遠敷郡における律令期の瓦生産 ～丸瓦・平瓦を中心に～」『館報 平成25年度』 福井県立若狭歴史民俗資料館 2015
水野和雄「若狭周辺の古代寺院と出土瓦」『美浜町歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』 美浜町教育委員会編 2006
美浜町教育委員会「興道寺窯跡発掘調査概報」 1978
美浜町教育委員会「興道寺遺跡」 1998
美浜町教育委員会「興道寺古墳群 県営中山間地域総合整備事業美方地区に伴う発掘調査報告書」 2002
美浜町教育委員会「美浜町内遺跡発掘調査報告書」I 2003
美浜町教育委員会「美浜町内遺跡発掘調査報告書」II 2007
美浜町教育委員会「美浜町内遺跡発掘調査報告書」III 2012
美浜町教育委員会「興道寺廃寺発掘調査報告書」 2016
美浜文化叢書刊行会「美浜文化叢書9 耳村誌」 2014
山口充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井考古学会会誌』第2号 1984 福井考古学会
立命館大学文学部「立命館大学文学部学芸員課程研究報告第13冊 姫路見野古墳群発掘調査報告」 2011



興道寺廃寺第17次調査1 トレンチ全景（東から撮影）



興道寺廃寺第17次調査1 トレンチ全景（西から撮影）



興道寺廃寺第17次調査1 トレンチ北壁土層断面1



興道寺廃寺第17次調査1 トレンチ北壁土層断面2



興道寺廃寺第17次調査1 トレンチ南壁土層断面

写真図版 2



興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ西端北壁土層断面



興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ整地面



興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ整地面断割土層断面



興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ SD170101



興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ SA170101



興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ P170101 土層断面



興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ P170102 土層断面



興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ P170103 土層断面



興道寺廃寺第18次調査1トレンチ全景(南から撮影)



興道寺廃寺第18次調査1トレンチ南半(南から撮影)



興道寺廃寺第18次調査1トレンチ北半(南から撮影)



興道寺廃寺第18次調査1トレンチ全景(南西から撮影)



興道寺廃寺第18次調査1トレンチ東壁土層断面

写真図版 4



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SZ180101 北側(南から撮影)



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SZ180101-SD1 検出状況



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SZ180101-SD1(南から撮影)



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SZ180101-SD1(北から撮影)



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SZ180101-SD1 積出土状況



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SZ180101-SD1 土層断面1



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SZ180101-SD1 土層断面2



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SZ180101-SD1 断割土層断面



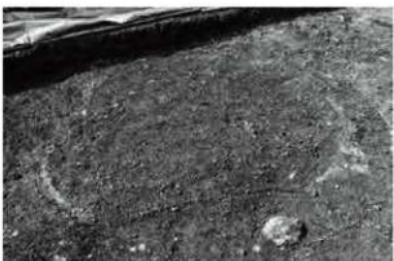
興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SK180101・SK180102



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SK180102



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SK180102 土層断面



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SK180102 検出状況



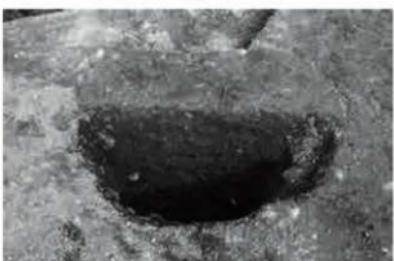
興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SK180102
礫・土壁出土状況



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ SA180101



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ P180101 土層断面



興道寺廃寺第18次調査1 トレンチ P180102 土層断面

写真図版 6



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ全景(南西から撮影)



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ全景(西から撮影)



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ全景(東から撮影)



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ北壁土層断面



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ SZ190101-SD1(西から撮影)



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ SZ190101-SD1 (北から撮影)



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ SZ190101-SD1 碓出土状況



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ SZ190101-SD1 土層断面



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ SZ190101-SD1 断削土層断面



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ SK190101 土層断面



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ SK190103 土層断面



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ P190101 土層断面



興道寺廃寺第19次調査1 トレンチ P190102 土層断面

写真図版 8



興道寺廃寺第19次調査2トレンチ全景(西から撮影)



興道寺廃寺第19次調査2トレンチ全景(東から撮影)



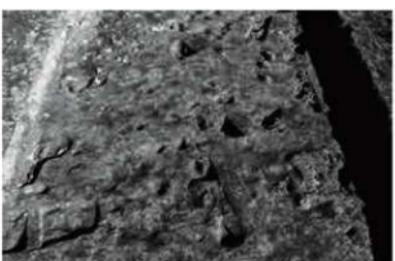
興道寺廃寺第19次調査2トレンチ北壁土層断面



興道寺廃寺第19次調査2トレンチSH190201(東から撮影)



興道寺廃寺第19次調査2トレンチSH190201(北から撮影)



興道寺廃寺第19次調査2トレンチSH190201(西から撮影)



興道寺廃寺第19次調査2トレンチSH190201-SD2



興道寺廃寺第19次調査2トレンチSH190201焼土



高善庵遺跡第2次調査1トレンチ全景(南から撮影)



高善庵遺跡第2次調査1トレンチ全景(北から撮影)



高善庵遺跡第2次調査1トレンチ南半(南から撮影)



高善庵遺跡第2次調査1トレンチ西壁土層断面



高善庵遺跡第2次調査1トレンチ南壁土層断面



高善庵遺跡第2次調査1トレンチ SE020101(南西から撮影)



高善庵遺跡第2次調査1トレンチ SE020101(北から撮影)



高善庵遺跡第2次調査1トレンチ SE020101 土層断面

写真図版 10



高善庵遺跡第2次調査2トレンチ全景(西から撮影)



高善庵遺跡第2次調査2トレンチ西半(西から撮影)



高善庵遺跡第2次調査2トレンチ東半(東から撮影)



高善庵遺跡第2次調査2トレンチ北壁土層断面



高善庵遺跡第2次調査2トレンチ北壁土層断面(西端)



高善庵遺跡第2次調査2トレンチP020204・P020205土層断面



高善庵遺跡第2次調査3トレンチ全景(東から撮影)



高善庵遺跡第2次調査3トレンチ西半(西から撮影)



高善庵遺跡第2次調査3トレンチ東半(東から撮影)



高善庵遺跡第2次調査3トレンチ南壁土層断面



高善庵遺跡第2次調査3トレンチ
SK020301・P020305 土層断面



高善庵遺跡第2次調査3トレンチ
P020301・P020302 土層断面

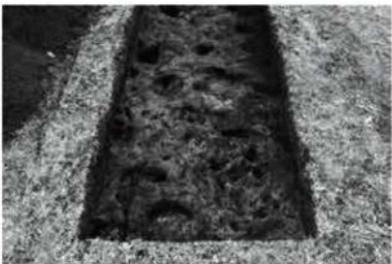


高善庵遺跡第3次調査地全景

写真図版 12



高善庵遺跡第3次調査1トレンチ全景(西から撮影)



高善庵遺跡第3次調査1トレンチ西半(西から撮影)



高善庵遺跡第3次調査1トレンチ東半(東から撮影)



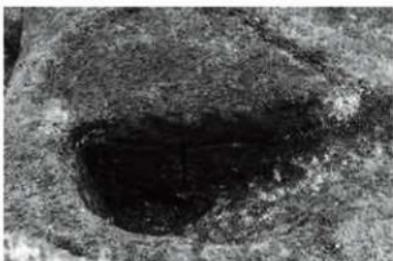
高善庵遺跡第3次調査1トレンチ南壁土層断面



高善庵遺跡第3次調査1トレンチ SA030101



高善庵遺跡第3次調査1トレンチ P030101 土層断面



高善庵遺跡第3次調査1トレンチ P030102 土層断面



高善庵遺跡第3次調査1トレンチ P030103 土層断面



興道寺遺跡試掘調査 1 トレンチ遺構検出状況 (南から撮影)



興道寺遺跡試掘調査 調査前現況 (東から撮影)



興道寺遺跡試掘調査 1 トレンチ東壁土層断面



興道寺遺跡試掘調査 2 トレンチ遺構検出状況 (北から撮影)



興道寺遺跡試掘調査 2 トレンチ東壁土層断面



藤ノ木遺跡試掘調査 9 トレンチ土層断面



藤ノ木遺跡試掘調査 17 トレンチ土層断面

写真図版 14



藤ノ木遺跡試掘調査 21 トレンチ遺構検出状況（北から撮影）



藤ノ木遺跡試掘調査 21 トレンチ土層断面



藤ノ木遺跡試掘調査 23 トレンチ遺構検出状況（北から撮影）



藤ノ木遺跡試掘調査 28 トレンチ遺構検出状況（北から撮影）



中長浜遺跡試掘調査 1 トレンチ土層断面



中長浜遺跡試掘調査 10 トレンチ土層断面

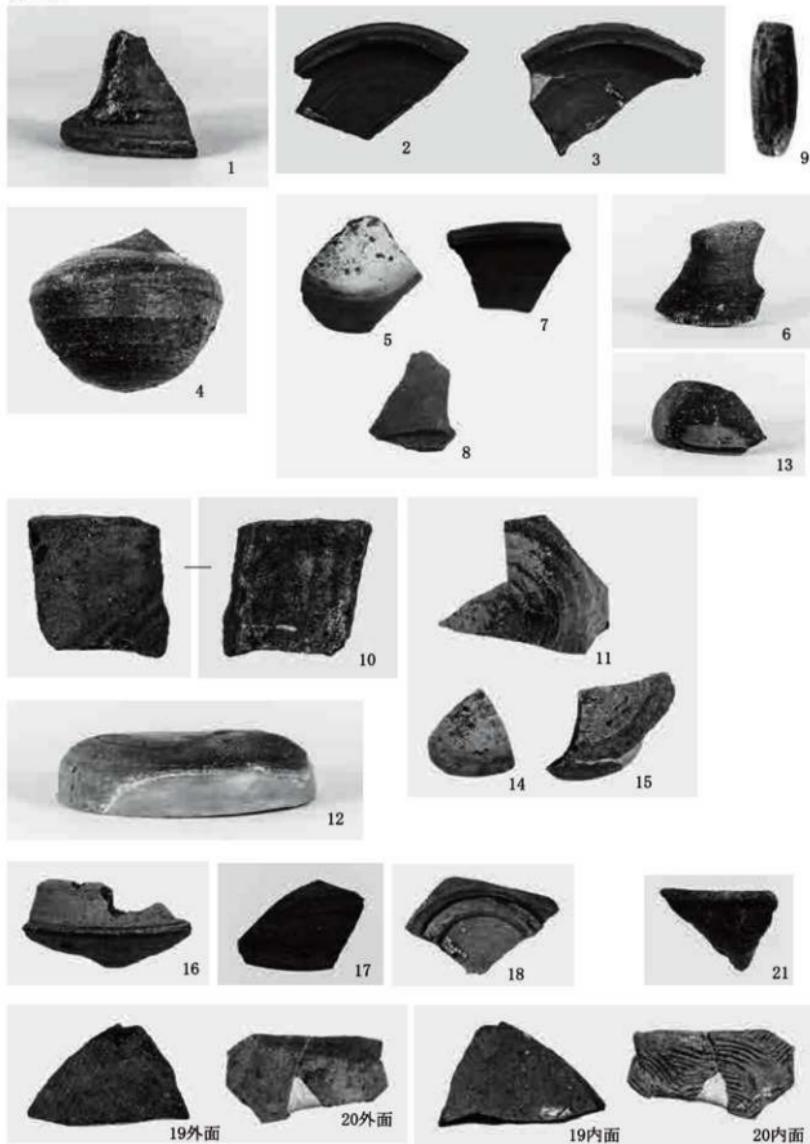


丹生石跡試掘調査 2 トレンチ



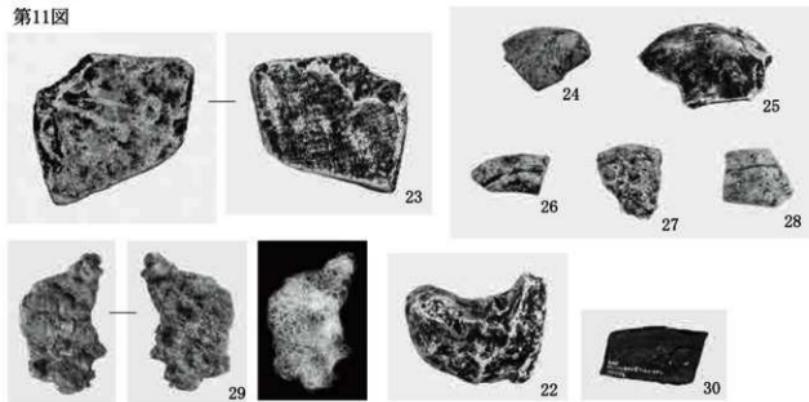
丹生石跡試掘調査 6 トレンチ

第11図

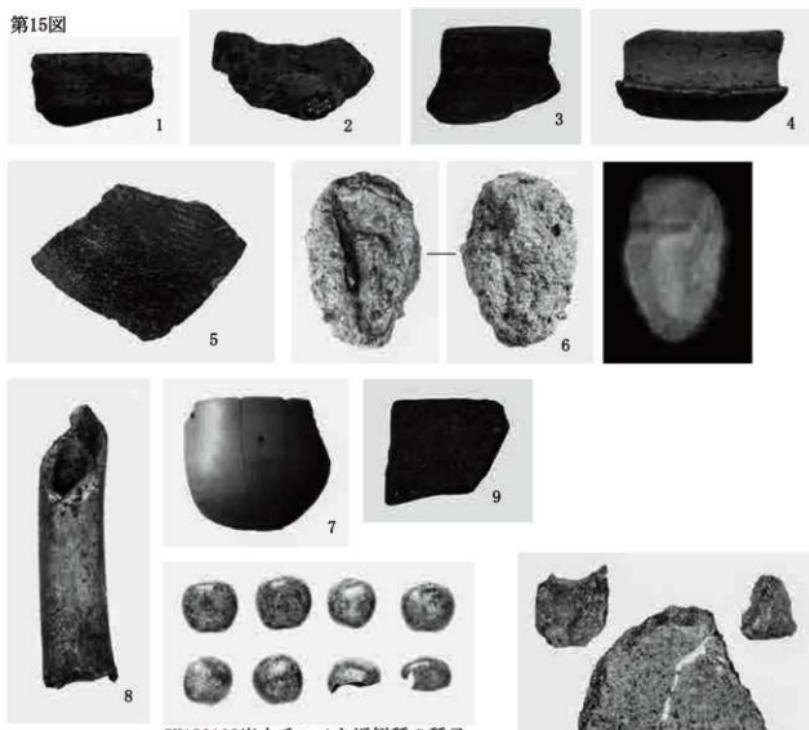


写真図版 16

第11図



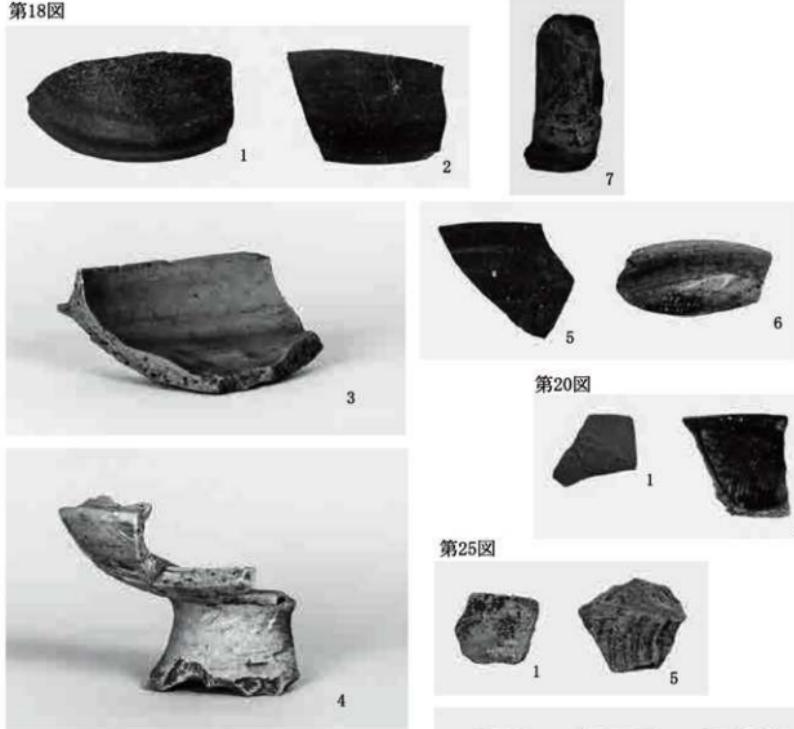
第15図



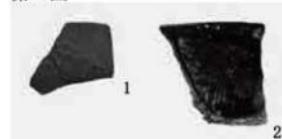
SK180102出土チャノキ近似種の種子

SK180102出土土壁

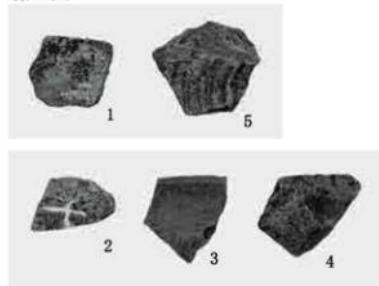
第18図



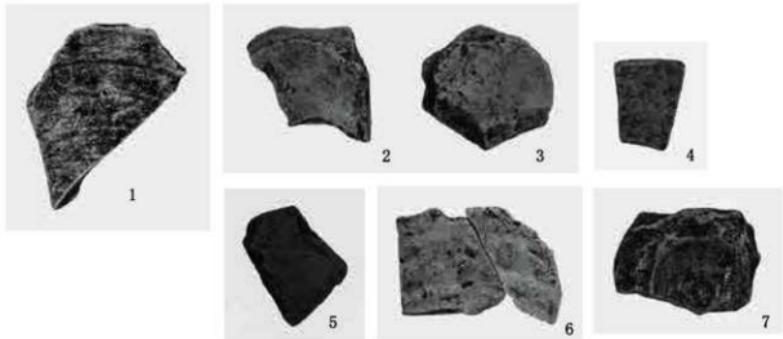
第20図



第25図

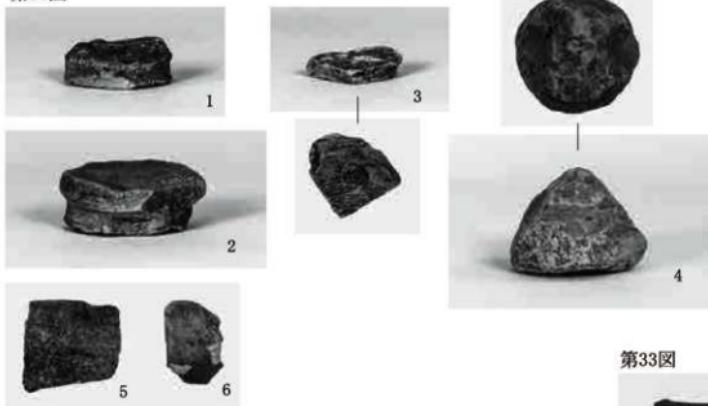


第28図

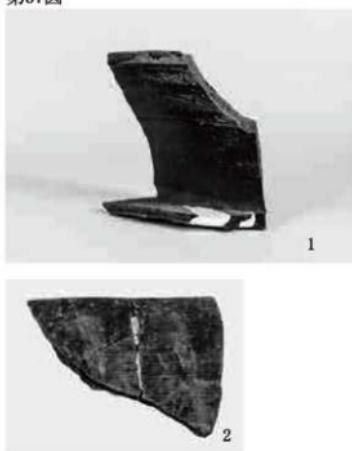


写真図版 18

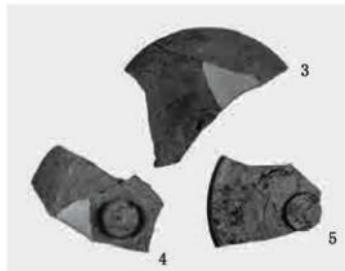
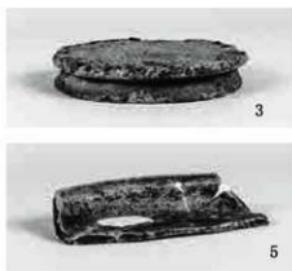
第30図



第37図

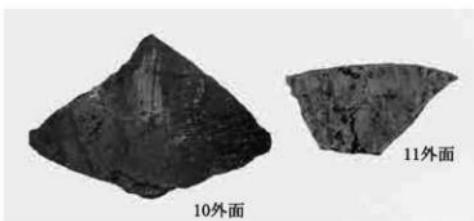
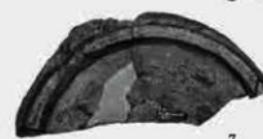


第33図

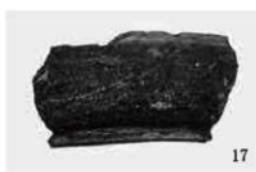


第39図

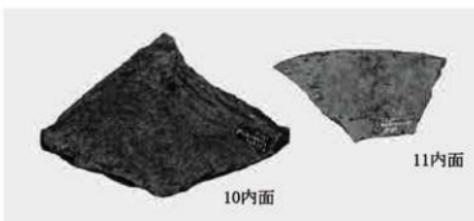
第39図



10外面



17



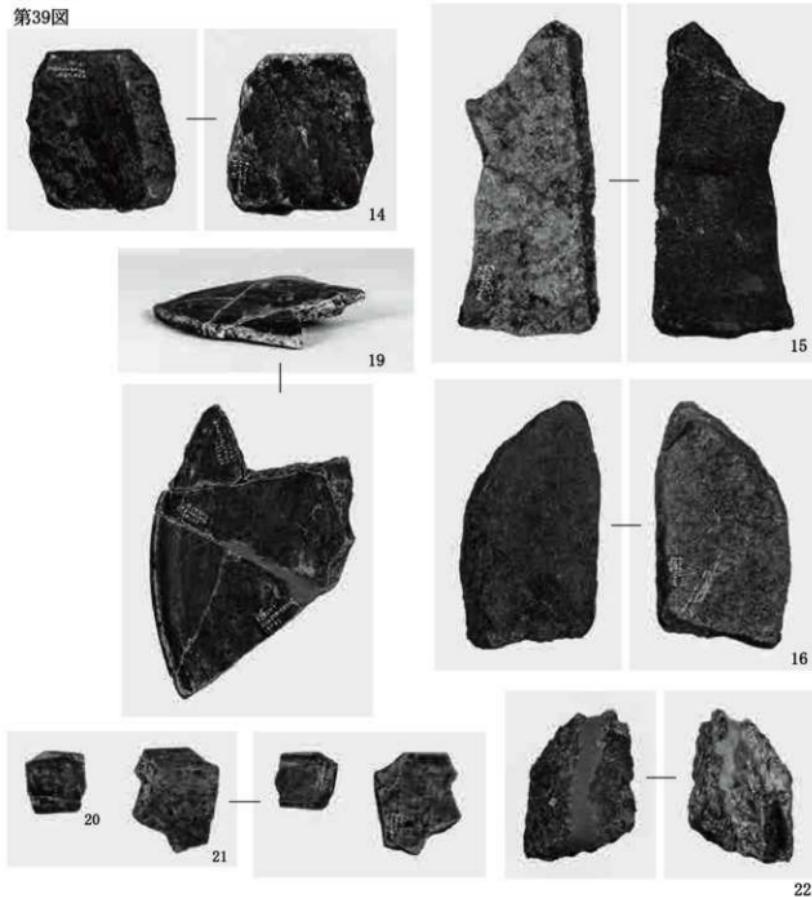
10内面



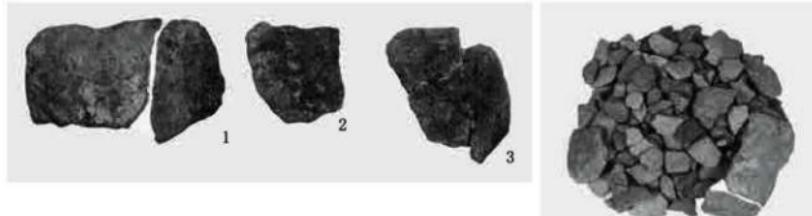
18

写真図版 20

第39図



第43図



中長浜遺跡 1 トレンチ灰褐色砂層
出土製塩土器

報告書抄録

ふりがな	みはまちょうないいせきはくつちょうさほうこくしょし							
書名	美浜町内遺跡発掘調査報告書4							
副書名	興道寺廃寺(第17~19次調査)・高善庵遺跡(第2・3次調査)・興道寺遺跡・藤ノ木遺跡・中長浜遺跡・丹生砦跡							
シリーズ名	美浜町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	松葉竜司							
編集機関	美浜町教育委員会							
所在地	〒919-1192 福井県三方郡美浜町郷市25-25 Tel0770-32-6708							
資料保管場所	美浜町教育委員会事務局 教育政策課 歴史文化館 〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8-8 Tel0770-32-0027							
発行年月日	西暦2020年(令和2年)3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	世界測地系	調査期間	調査面積 m ²	調査原因		
こうどうじはいじ 興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30071 (30073) 35度 35分 52秒	135度 56分 39秒 170207~170314 180131~180323 181016~181213	130.1	内容確認調査 (第17~19次調査)		
こぜんのいせき 高善庵遺跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうこうぞうじ 美浜町興道寺	18442	30068 35度 35分 28秒	135度 56分 50秒 180131~180323 191112~191129	34.1	内容確認調査 (第2・3次調査)		
こうどうじいせき 興道寺遺跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30073 35度 35分 54秒	135度 56分 34秒 181023・181024	27.8	開発事業計画に伴う 存否確認試掘調査		
ふじのきいせき 藤ノ木遺跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうとうごくち 美浜町郷市	18442	30077 35度 36分 12秒	135度 56分 9秒 191121・ 191123・191124	240.0	開発事業計画に伴う 存否確認試掘調査		
なかながはいせき 中長浜遺跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうちゅうながは 美浜町丹生	18442	30006 35度 42分 26秒	135度 58分 25秒 180315・180316	30.0	開発事業計画に伴う 存否確認試掘調査		
にゅうとりであと 丹生砦跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうとうごくち 美浜町丹生	18442	30003 35度 42分 30秒	135度 57分 42秒 170809・ 170810・170816	28.74	開発事業計画に伴う 存否確認試掘調査		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	古代寺院 (集落跡)	白鳳~平安 (弥生~中世)	古墳、柱穴列、 堅穴建物跡等	須恵器、土師器、 製塙土器、瓦など	大きく2時期からなる古 代寺院であることが判明			
高善庵遺跡	散布地	古墳・平安	堅穴建物跡、土 坑、小穴、柱穴列	須恵器、土師器	11~12世紀の土師器皿が 多く出土			
興道寺遺跡	集落跡	弥生~中世	堅穴建物跡、土 坑、小穴	須恵器、土師器	古代の集落の一部か			
藤ノ木遺跡	散布地	古墳~中世	堅穴建物跡、土 坑、小穴	須恵器、土師器、製塙土器、 鉄洋、輪羽口、砾石	8~9世紀の鍛冶関連集 落か			
中長浜遺跡	製塙跡	縄文~平安	なし	製塙土器	堆積層から製塙土器が出土			
丹生砦跡	城郭跡	中世	なし	なし				
要約	『興道寺廃寺発掘調査報告書』刊行以後に実施した第17~19次調査の成果を本書に収録した。寺院外の北方で発掘調査を行い、古墳、柱穴列、堅穴建物跡など古墳時代後期から古代の遺構、遺物を確認した。							
	瓦窯の所在が推定されている高善庵遺跡では第2・3次調査を実施し、11~12世紀を中心とした遺構、遺物が確認された。瓦窯の検出には至らなかったが、古代後期の遺構が検出され、特に土師器皿の出土が多かったことはこの時期には創建されていると考えられる天台宗寺院、興道寺との関連性がうかがえる。							
	これ以外に平成28~30年度、令和元年度に実施した試掘調査の成果を本書に収録した。							

『美浜町内遺跡発掘調査報告書4
興道寺廃寺(第17~19次調査)・高善庵遺跡(第2・3次調査)・
興道寺遺跡・藤ノ木遺跡・中長浜遺跡・丹生砦跡』

2020年3月17日発行

発 行 美浜町教育委員会
〒919-1138 福井県三方郡美浜町郷市 25-25
印 刷 若越印刷株式会社 美浜営業所
〒919-1145 福井県三方郡美浜町金山 19-7-1

この電子書籍は、2020年3月17日、美浜町教育委員会が発行した『美浜町内遺跡発掘調査報告書4 興道寺廃寺(第17～19次調査)・高善庵遺跡(第2・3次調査)・興道寺遺跡・藤ノ木遺跡・中長浜遺跡・丹生砦跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：美浜町内遺跡発掘調査報告書4

興道寺廃寺(第17～19次調査)・高善庵遺跡(第2・3次調査)・興道寺遺跡・藤ノ木遺跡・中長浜遺跡・丹生砦跡

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和2年(2020)3月17日